OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日タイ認識的モダリティ形式の対照研究：「だろう」「かもしれない」「はずだ」を中心に
Author(s)	Rattanapongpinyo, Pratyaporn
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73543
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

博　士　論　文

題目　日タイ認識的モダリティ形式の対照研究：

「だろう」「かもしれない」「はずだ」を中心に

提 出 年 月　　２０１９年０６月

言 語 文 化 研 究 科 日 本 語 ・ 日 本 文 化 専 攻

氏名　PRATYAPORN RATTANAPONGPINYO

（ラッタナポンピンヨ　プラッチャヤポーン）

要旨

日タイ認識的モダリティ形式の対照研究：「だろう」「かもしれない」「はずだ」を中心に

ラッタナポンピンヨ　プラッチャヤポーン

「だろう」「かもしれない」「はずだ」について学習する際、タイ人学習者は「だろう」は「khoŋ(cà)」、「かもしれない」は「ʔàat(cà)」、「はずだ」は「nâacà」というように、一対一の意味の対応関係で学習する（友松他 2002、Banjongmanee 2004、スリーエーネットワーク 2006）。さらに、従来の日タイ語の認識的モダリティ形式に関する対照研究の先行研究（ピヤマーワディー1992、田中 1996）においても同様に「だろう」「かもしれない」「はずだ」は「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」というタイ語の認識的モダリティ形式と一対一の対応関係をなしているとしている。

しかし、実例にあたると、教科書と従来の先行研究で示される対応関係で翻訳できない場合もあり、多様な対応関係が見られる。

両言語間における多様な対応関係を生み出したのには、大きく 2 つの要因があると考えられる。まず、日タイ語の「認識的モダリティ形式」用法の仕組みの違いである。そして、もう一つは、日本語とタイ語における上記の形式が認識的用法から派生した用法を持っているためだと考えられる。

しかし、前述したように、今までの日タイ対照研究の先行研究の考察は、認識的用法（推量用法）を中心に、各形式がどの形式と対応しているかという観察にとどまっており、実際はどのように訳されているかという点、及び派生的な用法の場合はどの認識的モダリティが選択されるかという点、に関してはあまり考察されていない。

そのため、本研究は以下を目的とする。

① 実際に日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」が両言語でどのように訳されているか、両言語の認識的モダリティ形式がどのような対応関係を成しているかについて明らかにし、従来説明されていない対応関係があれば、それに関して説明することを目的とする。

② 両言語を比較対照することにより、日本語の「だろう」 「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の用法を分析しながら、日本語とタイ語の認識的モダリティ形式の特徴を明らかにする。

第 1 章では、本研究の背景、目的と全体の流れを紹介する。

第 2 章では、認識的モダリティ形式に関するタイで使われている日本語の教科書と日タイ語の認識的モダリティ形式対照に関する先行研究をまとめながら、残されている問題点を示す。

第 3 章では、調査概要について説明する。目的①を明らかにするために、タイ語訳がある日本の作品と日本語訳があるタイの作品から、日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の例を抜き出し、両言語の対応関係によって分類する。

まず、目的①における実際に両言語でどのように訳されているかという点に関して、本研究の調査では、両言語は教科書のようにある形式が特定の形式に訳されるわけではないことを確認できる。日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」は、タイ語の「無形モダリティ形式」「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」に多く訳されていることが明らかになった。一方、タイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」は、日本語の「無形モダリティ形式」「だろう」「かもしれない」「はずだ」に多く訳されていることが明らかになった。

次に、目的①における両言語の認識的モダリティ形式がどのような対応関係を成しているかという点に関して、本研究の調査では、従来タイで使われている日本語の教科書では、3 つの対応関係のみ説明されているが、説明されていない対応関係もあることが確認できた。目的①における従来説明されていない対応関係に関して説明するため、第 3 章の結果を基に、第 4 章～第 8 章でそれぞれの対応関係について分析を行った。まず、出現文と使用状況について分析し、それから、先行研究を踏まえてその形式の特徴を分析する。最後に、それぞれの形式が推量・可能性・推論を表すかどうか確認するため、概言や確言を表す副詞と共起できるかどうか、また、この他にもどのような副詞と共起するかという観点から検討する。

第 4 章では、タイ語の無形モダリティ形式に対応する「だろう」「かもしれない」「はずだ」について分析した。タイ語の「ʔàat(cà)」「khoŋ(cà)」「nâacà」は、ある命題の事実を知らない場合にのみ使用できるが、一方、日本語の「かもしれない」「だろう」「は

ずだ」は、話し手がある命題についての事実を知っている場合に使用することができる。これは基本的な用法から離れた派生的な用法として使用される。

第 5 章では、日本語の無形モダリティ形式に対応する「khoŋ(cà)」「?àat(cà)」「nâacà」、について分析した。話し手がある命題についての事実を知らない場合に関して、日本語は無形モダリティ形式で判断の意味を表すことができるが、タイ語では認識的モダリティ形式がなければ、判断の意味がなくなり、事実を述べる文になることが分かった。

第 6 章では、日本語の「かもしれない」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式について分析した。日本語の「かもしれない」とタイ語の「?àat(cà)」は、基本的に話し手が事実を知らないことについて可能性を表す用法として同様に使用されている。可能性を表す場合、日本語の「かもしれない」は、過去・現在・未来、及び反事実条件でも使用されているが、タイ語の「?àat(cà)」は反事実条件文で使用できないため、両言語は従来の先行研究や教科書のような対応関係を成していない場合があることが明らかとなった。また、可能性を表す用法から離れた対人的な婉曲用法としても、日本語の「かもしれない」とタイ語の「?àat(cà)」が同様に使用されているが、強い義務を表す場合、タイ語では「khoŋ(cà) tôŋ」という形式が使用されているため「?àat(cà)」は使用されていないことが分かった。

第 7 章では、日本語の「だろう」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式について分析した。日本語の「だろう」とタイ語の「khoŋ(cà)」は、基本的に想像の中のものであり、話し手が知りえないことについて推量を表す形式である。推量するためには、根拠や前提が必要だが、その根拠と前提にははっきり分からないことや不確かさがある。そのため、概言を表す副詞と共起することができる。しかし、対話文で「対案・反論」を表す状況において、日本語の「だろう」は、推量用法から離れ、話し手の意見を控えめにする用法を持っているが、タイ語の「khoŋ(cà)」は推量を表す用法しか持っていないため、両言語は従来の先行研究や教科書ののような対応関係を成していない場合があることが明らかとなった。

第 8 章では、日本語の「はずだ」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式について分析した。その結果、日本語の「はずだ」とタイ語の「nâacà」は基本的に話し手が確かな根拠に基づいて推論し、結論を表す用法として同様に使用されている。その推論に関して話し手が確信を持っているため、確言を表す副詞と共起することができる。しかし、反事実について推論する場合、日本語では「はずだ」が使用できるが、タイ語の「nâacà」は事実

を知らない場合にのみ使用されるため、反事実の推論には使用できず、両言語は従来の先行研究や教科書のような対応関係を成していない場合があることが明らかとなった。

第 9 章では、目的②を明らかにするために、第 4 章～第 8 章の結果を基にし、両言語を比較対照することにより、日本語の「無形モダリティ形式」「だろう」 「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「無形モダリティ形式」「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の用法と特徴をまとめる。両言語の特徴に関して明らかになったのは、次の 4 点である。

1) 無形モダリティ形式に関して、断定できない場合、日本語は無形モダリティ形式で判断の意味を表すことができるが、タイ語ではモダリティ形式を入れなければ、判断の意味が表せず、事実を述べる文になる。このように、無形モダリティ形式で断定の意味を表すのは日本語の特徴である。
2) 日本語の「かもしれない」「だろう」「はずだ」は、未来のこと、過去のこと及び反事実条件について使用できるが、タイ語では反事実条件を表す場合、「khoŋ(cà)」のみが使用されている。このように、反事実の制限があるのはタイ語の特徴だと言える。
3) 話し手の複数の不確かなことを 1 文中で同じ認識的モダリティ形式を使用して列挙する場合に関して、日本語では「だろう」と「かもしれない」はそれぞれ繰り返し使用できるが、タイ語では「ʔàat(cà)」しか使用できない。このように、複数の不確かなことを列挙する際に使用できる認識的モダリティ形式に制限があるのは、タイ語の特徴である。
4) 日本語の「かもしれない」「だろう」「はずだ」は、基本的な用法から離れた対人的用法を持っている。一方、タイ語では「ʔàat(cà)」以外、派生的な対人的用法を持っていない。このように、認識の用法から対人的な用法として使用されるのは、日本語の認識的モダリティ形式の特徴である。

以上の日本語とタイ語の認識的モダリティ形式の用法をみると、基本的な用法に関しては、両言語の認識的モダリティ形式は、教科書や先行研究で挙げられている対応関係をなす。しかし、以上の 4 つの日本語とタイ語認識的モダリティ形式の特徴が、両言語が一対一に対応できず、多様な対応関係を生み出している要因だということが明らかになった。

本稿では、タイ語に翻訳された日本語の作品と日本語に訳されたタイ語の作品から用例を抜き出し、考察を行った。作品のジャンルの原因で、日本語の無形モダリティ形式に対応する「nâacà」など、用例の少ない対応関係がある。今後は、用例を増やし、考察を行い

たいと思う。また、日本語の認識的モダリティ形式の派生した用法に関しては、実際にタイ人日本語学習者はどのように使用するのか、母語の原因で誤用があるのかという点について調査を行いたい。

Abstract

Comparative Research on Japanese and Thai Epistemic Modality Forms:

Darō, Kamoshirenai,* and *Hazu da

PRATYAPORN RATTANAPONGPINYO

When learning about *darō*, *kamoshirenai*, and *hazu da*, Thai people are taught that *darō* corresponds to *khoŋ(cà)*, *kamoshirenai* to *ʔàat(cà)*, and *hazu da* to *nâacà*. Furthermore, as per previous research that has compared epistemic modality forms in Japanese and Thai, forms correspond with one another.

However, an examination of the actual examples of their use has revealed cases that cannot be translated using these corresponding forms found in textbooks. Furthermore, analyses in Japanese–Thai comparative research are limited to observations of corresponding forms; the research has focused primarily on epistemic usage (conjecture usage). There is little discussion on how they are actually translated or what epistemic modality forms are used to translate derivate usages.

Therefore, the purpose of this study was as follows:

（1） To clarify how Japanese's *darō*, *kamoshirenai*, and *hazu da* as well as Thai's *khoŋ(cà)*, *ʔàat(cà)*, and *nâacà* are translated in these two languages and to shed light on the relationship between these two languages' epistemic modality forms and to explain any corresponding forms that have not been explained.

（2） To clarify the characteristics of epistemic modality forms in Japanese and Thai by comparing and contrasting both languages while analyzing the usage of Japanese's *darō*, *kamoshirenai*, and *hazu da* and Thai's *khoŋ(cà)*, *ʔàat(cà),* and *nâacà*.

First, in order to conduct (1), Japanese works (Novels and Television Drama Scenario) translated into Thai and Thai works (Novels and Television Drama Scenario) translated into Japanese were examined. It was revealed that forms in these two languages are not translated into other set forms found in textbooks and that the two languages' epistemic modalities correspond to each other.

Subsequently, each of the corresponding relationships was considered. The following four characteristics of Japanese and Thai epistemic modality forms became evident on comparing and contrasting these two languages.

1) When a judgment cannot be made, Japanese can express the meaning of the judgment with the zero modality form. However, in Thai, if a modality form is not included, the statement will be a description of reality. Therefore, expressing the meaning of judgment with a zero modality form is a characteristic of Japanese.
2) Japanese's *kamoshirenai*, *darō*, and *hazu da* can be used for the future, past, and counter-factual conditions. However, in Thai, when expressing counter-factual conditions, only *khoŋ(cà)* can be used. In this way, counter-factual restrictions are a characteristic of Thai.
3) With regard to cases in which the speaker expresses uncertainty a number of times, in Japanese, *darō* and *kamoshirenai* can both be used. However, in Thai, only *ʔàat(cà)* can be used. Consequently, a restriction on expressing uncertainty many times is a characteristic of Thai.
4) Japanese's *kamoshirenai*, *darō*, and *hazu da* have interpersonal usages apart from their basic usage, whereas in Thai, besides *ʔàat(cà)*, forms do not have derivative interpersonal usages. Accordingly, a characteristic of Japanese epistemic modality forms is that epistemic usages are used as interpersonal usages.

An examination of the four characteristics of epistemic modality forms in Japanese and Thai, which are noted above, reveals that these languages do not correspond to one another in this regard. Furthermore, these characteristics are factors that produce diverse corresponding relationships. I propose that when teaching the Japanese language in Thailand, differences in epistemic modality form characteristics between Japanese and Thai should be explained so as to allow learners to acquire an in-depth understanding thereof.

บทคัดย่อ

การศึกษาคำช่วยแสดงทัศนะภาวะสัญชานในภาษาญี่ปุ่น และภาษาไทย : กรณีศึกษา Daroo Kamoshirenai Hazuda

ปรัชญาภรณ์ รัตนพงศ์ภิญโญ

ในการศึกษาภาษาญี่ปุ่น คำช่วยแสดงทัศนะภาวะสัญชาน “Daroo” “Kamoshirenai” “Hazuda” เป็นหนึ่งในไวยากรณ์ที่นิยมบรรจุไว้ในแบบเรียนขั้นพื้นฐาน มีการนำมาสอนโดยเทียบกับความหมายในภาษาไทยแบบคำต่อคำ ดังนี้ 1. “Daroo” มีความหมายตรงกับ “คงจะ” 2. “Kamoshirenai” มีความหมายตรงกับ “อาจจะ” และ 3. “Hazuda” มีความหมายตรงกับ “น่าจะ” นอกจากนี้ในงานวิจัยที่เกี่ยวข้องกับการศึกษาเปรียบเทียบคำช่วยแสดงทัศนะภาวะสัญชานในภาษาญี่ปุ่นและภาษาไทย ได้อธิบายหน้าที่และความหมายของ “Daroo” “Kamoshirenai” และ “Hazuda” ว่ามีความหมายตรงกับ “คงจะ” “อาจจะ” และ “น่าจะ” เช่นเดียวกันกับแบบเรียนภาษาญี่ปุ่นที่ใช้อยู่ในประเทศไทย

จากการสำรวจสำนวนแปลภาษาญี่ปุ่นและภาษาไทยในวรรณกรรมแปลและบทละครโทรทัศน์ พบว่ามีกรณีที่ “Daroo” “Kamoshirenai” “Hazuda” ไม่สามารถแปลว่า “คงจะ” “อาจจะ” และ “น่าจะ” ได้ และในงานวิจัยที่ผ่านมาศึกษาเฉพาะสำนวนที่แสดงการคาดคะเน ซึ่งไม่สามารถอธิบายถึงหน้าที่อื่นๆ ของคำว่า “Daroo” “Kamoshirenai” “Hazuda” ได้ ผู้วิจัยจึงได้จัดทำงานวิจัยชิ้นนี้ขึ้น โดยมีวัตถุประสงค์เพื่อ

1. ศึกษาคำช่วยแสดงทัศนะภาวะสัญชาน “Daroo” “Kamoshirenai” “Hazuda” ว่าแปลเป็นภาษาไทยได้อย่างไร และ“คงจะ” “อาจจะ” “น่าจะ” แปลเป็นภาษาญี่ปุ่นได้อย่างไร รวมถึงศึกษาว่าทั้งสองภาษามีการจับคู่ความหมายกันเช่นไร หากมีคู่ความหมายใหม่ที่ต่างจากที่เคยมีมาก่อนในแบบเรียน งานวิจัยนี้จะศึกษาคู่ความหมายดังกล่าวว่ามีหน้าที่อย่างไร ใช้ในสถานการณ์ใด และเหตุใดจึงไม่สามารถแปลตามที่เคยมีมาก่อนได้

2. ศึกษาข้อจำกัดและลักษณะเด่นของการใช้ทัศนภาวะสัญชานในภาษาญี่ปุ่น และภาษาไทย จากการเปรียบเทียบสองภาษา

โดยผู้วิจัยได้สำรวจสำนวนแปล “Daroo” “Kamoshirenai” “Hazuda” ในวรรณกรรมและบทละครโทรทัศน์ญี่ปุ่นที่มีการแปลเป็นภาษาไทย และสำรวจสำนวนแปล “คงจะ” “อาจจะ” “น่าจะ” ในวรรณกรรมและบทละครโทรทัศน์ไทยที่มีการแปลเป็นภาษาญี่ปุ่น แล้วเปรียบเทียบแต่ละคู่ความหมาย โดยวิเคราะห์การใช้จากบทบรรยายความคิดของตัวละครหรือบทสนทนา แสดงการคาดคะเนภายใต้สถานการณ์ที่ใช้ และคำวิเศษณ์ที่ใช้ร่วม ผลการสำรวจพบว่าในวรรณกรรมและบทละครโทรทัศน์ไม่สามารถแปล“Daroo” “Kamoshirenai” “Hazuda” เป็น “คงจะ” “อาจจะ” “น่าจะ” แบบคำต่อคำได้ และยังมีการจับคู่ความหมายที่ต่างจากที่เคยมีมาก่อนในแบบเรียนอีกด้วย

ผลการเปรียบเทียบแต่ละคู่ความหมายพบว่า คำช่วยแสดงทัศนะภาวะสัญชาน “Daroo” “Kamoshirenai” “Hazuda” “คงจะ” “อาจจะ” “น่าจะ” มีข้อจำกัดและลักษณะเด่นที่แตกต่างกันดังนี้

1. การใช้คำช่วยแสดงทัศนะภาวะสัญชาน Zero Modality Form

ภาษาญี่ปุ่นสามารถใช้ Zero Modality Form ในการแสดงทัศนะภาวะสัญชานของผู้พูด เกี่ยวกับเรื่องที่ผู้พูดยังไม่ทราบข้อเท็จจริงได้ โดยแสดงถึงความมั่นใจของผู้พูดต่อเรื่องนั้น แต่ในภาษาไทย Zero Modality Form จะใช้ได้เฉพาะเรื่องที่ผู้พูดทราบถึงข้อเท็จจริงแล้วเท่านั้น จึงสรุปได้ว่า การใช้ Zero Modality Form ในการแสดงทัศนะภาวะสัญชานของผู้พูด เป็นลักษณะเด่นของภาษาญี่ปุ่น

2. การใช้คำช่วยแสดงทัศนะภาวะสัญชานในการแสดงเหตุการณ์ตรงข้ามกับความจริง

ในภาษาญี่ปุ่น คำช่วยแสดงทัศนะภาวะสัญชาน “Daroo” “Kamoshirenai” “Hazuda” สามารถใช้กับกาลที่เป็นอดีต ปัจจุบัน อนาคต รวมถึงเหตุการณ์ตรงข้ามกับความจริงได้ แต่ในภาษาไทยการแสดงเหตุการณ์ตรงข้ามกับความจริงจะใช้คำช่วยแสดงทัศนะภาวะสัญชาน “คงจะ” เท่านั้น จึงสรุปได้ว่าในภาษาไทยมีข้อจำกัดในการเลือกใช้คำช่วยแสดงทัศนะภาวะสัญชานต่อการแสดงเหตุการณ์ตรงข้ามกับความจริง

3. การใช้คำช่วยแสดงทัศนะภาวะสัญชานเดียวกันมากกว่าหนึ่งครั้ง ในประโยคหรือในย่อหน้าเดียวกัน

ในการแสดงความไม่มั่นใจของผู้พูด ภาษาญี่ปุ่นสามารถใช้คำช่วยแสดงทัศนะภาวะสัญชาน “Daroo” หรือ“Kamoshirenai” ซ้ำมากกว่าหนึ่งครั้งได้ในประโยคหรือในย่อหน้าเดียวกันได้ แต่ในภาษาไทยใช้ได้เพียงคำว่า “อาจจะ”เท่านั้น เช่น “ผมอาจจะเพียงแต่เหงา และต้องการใครสักคนหรืออะไรสักอย่างที่ให้ความอบอุ่นรักใคร่ไยดี ผมอาจจะเพียงแต่คิดถึงวัยเด็กที่บริสุทธิ์และไร้เดียงสา หรือผมอาจจะเพียงแต่คิดว่าตัวเองคิดถึงสิ่งเหล่านั้นก็ได้” เป็นต้น แต่จะไม่สามารถใช้ “คงจะ...หรือ คงจะ...” ซ้ำกันมากกว่าหนึ่งครั้งได้ จึงสรุปได้ว่าในภาษาไทยมีข้อจำกัดในการใช้คำช่วยแสดงทัศนะภาวะสัญชานมากกว่าหนึ่งครั้ง ในการแสดงความไม่มั่นใจของผู้พูดอยู่

4. การแสดงหน้าที่อื่นนอกเหนือจากการคาดคะเน

คำช่วยแสดงทัศนะภาวะสัญชาน “Daroo” “Kamoshirenai” “Hazuda” มีหน้าที่อื่นนอกเหนือจากการแสดงการคาดคะเนอยู่ โดยมักใช้ในบริบทและหน้าที่อื่นๆ เช่น การเสนอแนะ หรือการแสดงความคิดเห็น แต่ในภาษาไทยมีเพียง “อาจจะ” เท่านั้นที่มีหน้าที่อื่นนอกเหนือจากการคาดคะเน จึงสรุปได้ว่าการกลายหน้าที่ของคำช่วยแสดงทัศนะภาวะสัญชานจากการแสดงการคาดคะเนเป็นหน้าที่อื่นในบทสนทนา เป็นลักษณะเด่นของภาษาญี่ปุ่น

จากผลการวิจัยดังกล่าวสรุปได้ว่า ข้อจำกัดและลักษณะเด่น 4 ข้อที่ได้กล่าวมานี้ เป็นสาเหตุที่ทำให้คำช่วยแสดงทัศนะภาวะสัญชาน “Daroo” “Kamoshirenai” “Hazuda” และ“คงจะ” “อาจจะ” “น่าจะ” ไม่สามารถแปลแบบคำต่อคำดังที่ระบุไว้ในแบบเรียนได้ ผู้วิจัยหวังว่า การเข้าใจข้อจำกัดและลักษณะเด่นของทั้งสองภาษาจะสามารถนำไปปรับใช้ในการเรียนการสอนภาษาต่างประเทศได้ต่อไปในอนาคต

目次

要旨 …… i

Abstract ……vi

第 1 章　はじめに …… 1

第 2 章　タイで使われている教科書とタイの先行研究 …… 5

2.1. タイで使われている教科書 …… 5

2.2. 日タイ認識的モダリティ形式に関する先行研究 …… 8

2.2.1. ピヤマーワディー（1992） …… 8

2.2.2. 田中（1996） …… 9

2.2.3. Kiatkobchai（2011） …… 11

2.2.4. Rattanapongpinyo （2016） …… 13

2.3. 問題提起と本研究の立場 …… 15

第 3 章　調査概要 …… 18

3.1. 調査対象 …… 18

3.2. 分類方法 …… 23

第 4 章　タイ語の無形モダリティ形式に対応する日本語の形式 …… 26

4.1. タイ語の無形モダリティ形式に対応する「かもしれない」 …… 27

4.2. タイ語の無形モダリティ形式に対応する「だろう」 ……31

4.3. タイ語の無形モダリティ形式に対応する「はずだ」 …… 35

4.4. まとめ …… 41

第 5 章　日本語の無形モダリティ形式に対応するタイ語の形式 …… 43

5.1. 日本語の無形モダリティ形式に対応する「ʔàat(cà)」 ……44

5.2. 日本語の無形モダリティ形式に対応する「khoŋ(cà)」 …… 53

5.3. 日本語の無形モダリティ形式に対応する「nâacà」 ……58

5.4. まとめ ……61

第 6 章「かもしれない」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式 …… 63

6.1.「かもしれない」に対応する「ʔàat(cà)」 …… 64

6.2.「かもしれない」に対応する「khoŋ(cà)」 …… 72

6.3. まとめ …… 80

第 7 章「だろう」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式 …… 83
7.1.「だろう」に対応する「khoŋ(cà)」 …… 84
7.2.「だろう」に対応する「ʔàat(cà)」 …… 89
7.3.「だろう」に対応する「nâacà」 …… 95
7.4. まとめ …… 96
第 8 章「はずだ」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式 …… 100
8.1.「はずだ」に対応する「nâacà」 …… 101
8.2.「はずだ」に対応する「khoŋ(cà)」 …… 108
8.3. まとめ …… 113
第 9 章 むすび …… 116
9.1. 本研究のまとめ…… 116
9.2. 日本語とタイ語の認識的モダリティ形式の用法と特徴…… 119
9.2.1. 日本語とタイ語の「無形モダリティ形式」の用法と特徴……119
9.2.2. 日本語の「かもしれない」「だろう」「はずだ」の用法と特徴…… 120
9.2.3. タイ語の「ʔàat(cà)」「khoŋ(cà)」「nâacà」の用法と特徴…… 123
9.2.5. まとめ …… 126
9.3. 今後の課題…… 127
謝辞 …… 128
参考文献 …… 129
音韻表記 …… 134

第 1 章　はじめに

初級日本語教科書において「だろう」「かもしれない」「はずだ」[1]は概言を表す基本的な形式として必ず導入される。「だろう」「かもしれない」「はずだ」について学習する際、タイ人学習者は「だろう」は「khoŋ(cà)」、「かもしれない」は「ʔàat(cà)」、「はずだ」は「nâacà」というように、一対一の意味の対応関係で学習する（友松他 2002、Banjongmanee 2004、スリーエーネットワーク 2006）。図 1 で示す。さらに、従来の日タイ語の認識的モダリティ形式に関する対照研究の先行研究（ピヤマーワディー1992、田中 1996）においても、図 1 のように「だろう」「かもしれない」「はずだ」は「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」というタイ語の認識的モダリティ形式と一対一の対応関係をなしている。

しかし、実例にあたってみると、図 1 のような対応関係で翻訳できない場合もある。実際は、図 2 のように複雑な対応関係が見られる。

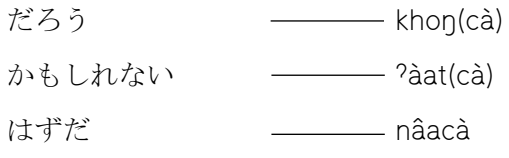

図 1　教科書と先行研究の対応関係

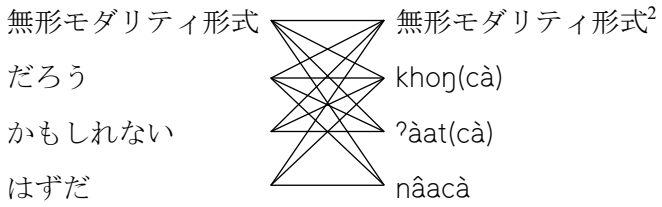

図 2　実際の対応関係

[1] 本稿では「だろう」と「でしょう」「であろう」、「かもしれない」と「かも」「かもしれません」、「はずだ」と「はず」「はずです」などを区別せず、以下ではこれらの形式を「だろう」「かもしれない」「はずだ」によって代表させる。

[2] 本稿では「無形モダリティ形式」は、無形の認識的モダリティ形式を意味とする。

例えば、

（01）状況：母親（潮香）は娘の病気を心配し、色んな病院を回ったが、治療法がないと言われた。最後にその病気の専門家の医者のところに行った。

潮香：海外では…。あの海外では何かいい治療法があるんじゃないですか？

医者：今のところ海外も同じです。

むしろ日本のほうがこの病気の研究は進んでいるでしょう。

a. 今のところ海外も同じです。
むしろ日本のほうがこの病気の研究は進んでいる<u>でしょう</u>。

b. tɔɔnníi tàaŋpràthêt ʔeeŋkôɔ mŭ̌ankan thîi yîipùn ʔeeŋ <u>àatcà</u>
今 海外 も 同じ で 日本 方 àatcà
phátthanaa wícay rôok níi pay mâakkwà lɛ́ɛw dûaysámpay
発達 研究 病気 この 行く より 過去形
(1リットルの涙)

（01）の状況では、医者は病気の国内外の治療状況について話しており、患者の母親（潮香）の発言に反対意見を表している。その場合、日本語では（01a）のように「だろう」を使うが、タイ語の（01b）では、従来の先行研究で「かもしれない」と対応関係をなしているとされている「ʔàat(cà)」で表す。

次の（02）では、「ʔàat(cà)」の日本語訳として「かもしれない」を使用している。「かもしれない」は、低程度推量（野田 1984、平田 2001、山岡 2016）を表すため、（02b）のように「かもしれない」を使うと、医者が低程度の確信を表すという意味になり、話し手が専門知識を持っており、相手の発言に反対意見を表している状況においては、不自然になる。

（02）a. tɔɔnníi tàaŋpràthêt ʔeeŋkôɔ mŭ̌ankan thîi yîipùn ʔeeŋ <u>àatcà</u>
今 海外 も 同じ で 日本 方 àatcà
phátthanaa wícay rôok níi pay mâakkwà lɛ́ɛw dûaysámpay
発達 研究 病気 この 行く より 過去形

b.* 今のところ海外も同じです。
むしろ日本のほうがこの病気の研究は進んでいる<u>かもしれない</u>。

一方、タイ語でも、日本語の「だろう」を「khoŋ(cà)」の形式を使用して直訳すると、適切ではない場合がある。Kiatkobchai（2011：61）によれば、「khoŋ(cà)」は話し手が直接的経験領域にない知識について、思考、想像、仮定という不確かな認識によって判断を下す場合に使用されるという。（03b）のように「khoŋ(cà)」を使用すると、文法的には正しいが、話し手が直接経験領域にない国内外の治療状況について不確かな認識によって判断を下しているという意味になる。そのため、話し手が専門家であり、相手の発言に反対意見を表している状況においては、不自然になる。

（03）a. 今のところ海外も同じです。むしろ日本のほうがこの病気の研究は進んでいるでしょう。

b.* tɔɔnníi tàaŋpràthêt ʔeeŋkɔ̂ɔ mŭ̌ankan thîi yîipùn ʔeeŋ khoŋ(cà)

今 海外 も 同じ で 日本 方 khoŋ(cà)

phátthanaa wícay rôok níi pay mâakkwà lɛ́ɛw dûaysámpay

発達 研究 病気 この 行く より 過去形

以上の例から、日タイ語の認識的モダリティ形式の意味は一対一の対応関係をなしていないということが確認できる。

両言語の多様な対応関係が生じるのには、大きく 2 つの要因があると考えられる。まず、日タイ語の「認識的モダリティ形式」用法の仕組みの違いである。張（2008：112）は、日本語と中国語の推量確認要求を比較対照し、両言語の仕組みの違いが多様な対応関係を生み出す原因だと述べている。本稿では、張（2008）と同様な仮説を立てる。そして、もう一つは、日本語とタイ語における上記の形式が認識的用法から派生した用法を持っているためだと考えられる。

しかし、今までの日タイ対照研究の先行研究の考察は、認識的用法（推量用法）を中心に、各形式がどの形式と対応しているかという観察にとどまっており、実際はどのように訳されているか、及び派生的な用法の場合はどの認識的モダリティ形式で訳されているか、に関してはあまり考察されていない。

そのため、本研究の目的は、日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」を中心に、実際に日本語の「だろう」 「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」が、どのように訳されているか、また、両言語の認識的モダリティ形式ではどのような対応関係を成しているかにつ

いて分析し、両言語を対照しながら、日本語とタイ語の認識的モダリティ形式の特徴を明らかにする。

全体的な流れは以下のとおりである。

第 2 章では、認識的モダリティ形式に関するタイで使われている日本語の教科書と日タイ語の認識的モダリティ形式対照に関する先行研究をまとめながら、残されている問題点を示す。

第 3 章では、日本語とタイ語における認識的モダリティ形式の対応関係を分析するため、タイ語訳がある日本の作品と日本語訳があるタイの作品から、日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「?àat(cà)」「nâacà」の例を抜き出し、両言語の対応関係によって分類する。

第 4 章では、タイ語の無形モダリティ形式に対応する「だろう」「かもしれない」「はずだ」を分析する。

第 5 章では、日本語語の無形モダリティ形式に対応する「khoŋ(cà)」「?àat(cà)」「nâacà」を分析する。

第 6 章では、「かもしれない」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式を分析し、「かもしれない」の特徴をまとめる。

第 7 章では、「だろう」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式を分析し、「だろう」の特徴をまとめる。

第 8 章では、「はずだ」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式を分析し、「はずだ」の特徴をまとめる。

第 9 章では、本研究の全体のまとめ、日本語の「だろう」 「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「?àat(cà)」「nâacà」の用法と特徴について考察し、残された課題を示す。

第 2 章　タイで使われている教科書とタイの先行研究

第 2 章では、認識的モダリティ形式に関するタイで使われている日本語の教科書と日タイ語の認識的モダリティ形式対照に関する先行研究をまとめながら、残されている問題点を示す。2.1.では、タイで使われている三冊の日本語の教科書をまとめる。次の 2.2.では、日タイ語の認識的モダリティ形式対照に関する先行研究をまとめる。2.2.1.～2.2.4.では、先行研究について、ピヤマーワディー（1992）、田中（1996）、Kiatkobchai（2011）、Rattanapongpinyo（2016）のそれぞれを記す。最後に、タイで使われている教科書とタイ語の先行研究を比較し、問題点を示す。

2.1.　タイで使われている教科書

本節は、タイで使われている三冊の日本語の教科書を調査対象とする。その三冊とは『みんなの日本語』『あきこと友だち』[3]『日本語表現文型 200 初･中級』である。『みんなの日本語』『あきこと友だち』『日本語表現文型 200 初･中級』は高校や大学など、初・中級における日本語教育でよく使われるため、この三冊を調査対象とした。

この三つの教科書の「だろう」「かもしれない」「はずだ」に関して調査した結果、両言語の対応関係は表 1 のとおりであった。

表 1 タイで使われている教科書の日・タイ認識的モダリティ形式の対応関係

日本語の 認識的モダリティ形式	タイ語の 認識的モダリティ形式	教材の名前と初出課
だろう	khoŋ(cà)	『あきこと友だち』第 27 課 『みんなの日本語』第 32 課[4] 『日本語表現文型』第 15 課
かもしれない	?àat(cà)	『あきこと友だち』第 21 課 『みんなの日本語』第 32 課 『日本語表現文型』第 15 課
はずだ	nâacà	『みんなの日本語』第 46 課 『日本語表現文型』第 15 課

[3] 『あきこと友だち』では「はずだ」については扱われていない。

[4] 「（推量の）だろう」の初出課は第 32 課であり、「（確認要求の）だろう」の初出課は第 21 課である。

以下、各教科書における日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」の例文と文法の説明を示す。なお、『あきこと友だち』はタイ人と日本人が共同で書いた教科書であるが、日本語での説明はないため、タイ語の説明を筆者が日本語に訳した。また、タイ語版の『みんなの日本語』には日本版にはない文法説明が含まれており、その部分についても筆者が日本語に訳した。『日本語表現文型 200 初･中級』については、タイ語版も日本語版も同じ内容であったため、日本語版の記述をそのまま記載し、例文のタイ語の訳を示す。

1. 『あきこと友だち』

「だろう・でしょう」は、文末において話し手の推量を表す。「khoŋ(cà)」という意味である。推量を強調するために「たぶん」と一緒に使う。（p.88）

あの二人は顔が似ていますから、たぶん兄弟**でしょう**。

sɔ̌ɔŋ khon nán nâataa khláy kan **khoŋ cà** pen phîinɔ́ɔŋ kan la máŋ khráb

「かもしれない」は、「ʔàat(cà)」という意味である。文末において、話し手の確信が低いことに対して推量を表す。（p.129）

今の時間は道がこんでいる**かもしれません**から、早く出ましょう。

wɛɛlaa níi ròt **ʔàatcà** tìt kɔ̂ɔdây rîib ʔɔ̀ɔk dii kwàa

2. 『みんなの日本語』

「でしょう」は、話し手のなんらかに基づいた推量である。　（タイ語版：p.94）

明日雨が降る**でしょう**。

phrûŋníi fon **khoŋcà** tôk

「かもしれない」は、話し手の推量を表す表現である。ある状況や可能性に基づいて推量する。「でしょう」より可能性が低い。（タイ語版：p.94）

約束の時間に間に合わない**かもしれない**。

ʔàatcà mây than wɛɛla thîi nát wáy kɔ̂ɔdây

「はずだ」は、話し手が証拠や情報に基づいて確信を持って推論する。話し手は、昨日電話があったという情報を持っているため、確信を持って推論する。（タイ語版：p.111）

ミラーさんは今日来るでしょうか。

…来る**はずです**よ。きのう電話がありましたから。

khun minlêə cà maa mǎy khráb wannníi

…**nâacà** maa na phrɔ́ mûawaan thoo maa bɔ̀ɔk wâa ca maa

3. 『日本語表現文型 200 初･中級』

「でしょう・だろう」 ― khoŋ(cà)

はっきり判断できないことや天気予報など、未来の予測を表すのによく使われる。（タイ語版：p.144）

家族旅行はらいねんは無理だろう。

piinâa khoŋ pay thîiaw dûaykan tháŋ khrɔ̂ɔbkhrua mây dây rɔ̀ɔk

「かもしれない」 ― ʔàat(cà)

その可能性があるという意味で使う。（タイ語版：p.148）

雪の日は、この道は危ないですよ。すべるかもしれませんよ。

wanthîi hima tòk thánŏn săay níi antaraay na ʔàatcà rûɯn kɔ̂ɔ dây

「はずだ」 ― nâacà

客観的な理由があって（例えば計算などをして）、推量にかなり確信があるときに使う。その理由から考えて、当然のことだと推量するときの言い方。（タイ語版：p.149）

田中さんはもう会社を出たはずですよ。5 時の新幹線に乗ると言っていたから。

khun thanaka nâacà ʔɔɔk caak bɔɔrisát pay lέεw na

phrɔ́ bɔ̀ɔk wâa cà khûn rótfay shinkhansen thîiaw hâa mooŋ

これらのタイで使われている三冊の日本語の教科書の中では、『みんなの日本語』以外、文法の説明では各形式に一対一対応でタイ語訳が与えられている。『みんなの日本語』は文法説明の中には「だろう」「かもしれない」「はずだ」のタイ語訳がないが、例文では図 1 の一対一の関係の通りに訳されている。Rattanapongpinyo（2016）によれば、その対応関係や説明などは仁田（2000）を参考にしたという。つまり、ほとんどの教科書では、日本語の意味を基準にして、それに合わせたタイ語を使用して説明している。

実際に、タイ語の認識的モダリティ形式は、日本語と同じような意味を持っているのだろうか。教科書で挙げているように全て一対一で対応しているのだろうか。次に、両言語の認識的モダリティ形式対照に関する先行研究をまとめながら、残されている問題点を示す。

2.2. 日タイ認識的モダリティ形式に関する先行研究

本節では、これまでの日本語とタイ語における認識的モダリティ形式の対照研究に関する先行研究を概観し、分類方法や説明および日本語とタイ語の対応関係をまとめる。最後に先行研究の残されている問題点について指摘する。なお、本稿では、「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」について扱うため、この三つのモダリティ形式に関する先行研究のみをまとめる。

2.2.1. ピヤマーワディー（1992）

ピヤマーワディー（1992）は、Palmer（1986）のモダリティ研究の枠組と定義を大枠とし、その枠組みに修正を加えた上で日本語とタイ語における事柄に対するモダリティを比較対照した。タイ語の認識的モダリティについては、判断型と証拠型という 2 つのタイプに分類し、それぞれ日本語のどの表現と対応しているか述べている。

判断型とは、話し手がある手持ちの情報を基にして推論を行い、その結果導き出される事柄を述べる際に働いている心的態度を表すタイプである。このとき、根拠よりも自分の判断の方に比重が置かれているとされている。ピヤマーワディー（1992：161）の判断型のモダリティ形式には、「ʔàat(cà)」「khoŋ(cà)」「nâacà」などがある。これらのモダリティを分類すると、「ʔàat(cà)」が推測、「khoŋ(cà)」が推量、「nâacà」が推論を表すことになる。

1)　推測　ある事柄の事実性をはっきりと確認はできないが、弱い確信をもってそう判断する際に、日本語は「かもしれない」、タイ語は「ʔàat(cà)」というモダリティで表す。

（04）（どのぐらい時間がかかったかと聞かれて）

二、三分、いえ、もっと短かった<u>かもしれません</u>。

sɔ̌ɔŋ　sǎam　naathii　mǎychǎy　<u>ʔàatcà</u>　nɔ́ɔy　kwàa　nán

二　　三　　分　　いいえ　　推定　少ない　より　それ

（ピヤマーワディー1992：264）

2)　推量　ある事柄の真実を確認することはできないが、自分の経験による手持ちの情報や既知の情報を根拠とし、それに基づいて考えた結果、その事柄が真である可能性があると判断する際には、日本語では「だろう」、タイ語では「khoŋ(cà)」で表す。

（05）（浅見は、自分の部屋に着くと、千香子に電話したくなった）

だが、こんな時間なら、眠っている<u>だろう</u>。

tɛ̀ɛ　　dɯ̀k　khanàatníi　<u>khoŋcà</u>　nɔɔn　lɛ́ɛw

しかし　夜遅く　こんなに　推量　寝る　完了

（ピヤマーワディー1992：265）

3) **推論**は二つに分けられる。まず、「強い推論」とは、ある何らかの既知の情報に基づいて推論した結果、ある事柄について真であると確認はできないが、「間違いなく真であると思う」というように強い確信をもって結論づけることである。この場合、日本語では「にちがいない」、タイ語では「tôŋ」で表す。もう一つは、「弱い推論」である。「弱い推論」は、ある事柄の真偽を確認はできないが、ある既知の情報を根拠として考えると推理的に、「当然そのような結論になる」ということを表す。日本語では「はずだ」、タイ語では「nâacà」で表す。

（06）殺人事件なんですから、証拠はある**はずです**。

nâacà　mii　làkthăan　phrɔ́　pen　khaadiikhâatakam

推論　ある　　証拠　　から　だ　　殺人事件

（ピヤマーワディー1992：268）

ピヤマーワディー（1992）とタイで使われている教科書の対応関係を見ると、ほぼ一致しているが、分類の仕方と文法の説明は異なっている。ピヤマーワディー（1992）は判断型の推論については大きく 2 つに分け、「弱い推論」と「強い推論」とに分けている。しかし、教科書の中で「はずだ」は推論を表すが、「に違いない」は推論とは関係せず、高い確信だけを表すとされている。例えば、「かぎがない。どこかに落としたに違いない」（作例）と言った場合は、話し手が「かぎがない」という既知の情報に基づいて推論したのではなく、絶対どこかに落としたという確信を表す。この点においては、ピヤマーワディー（1992）の分類と教科書とでは異なる点があると考えられる。

2.2.2. 田中（1996）

田中（1996）は、タイ語の認識的モダリティ形式を基準にして説明している。両言語の対応関係は、ピヤマーワディー（1992）と似ているが、「khoŋ(cà)」は、日本語の意味としては「だろう、はずだ、かもしれない」など非常に広範囲な解釈が観察されると述べている。しかし、その違いに関しては、説明していない。

1) 「khoŋ(cà)」

「khoŋ(cà)」は、日本語の意味としては「だろう、はずだ、かもしれない」など非常に広範囲な解釈が観察されるが、その中でも比較的近い意味では「だろう」に相当する。

(07) khun aakìkò khoŋ mây yûu bâan nâ
さん 昭子 khoŋ 否定 いる 家 ね
昭子さんは家にいないだろう。

（田中 1996：219）

2) 「ʔàat(cà)」

日本語では多く「かもしれない」の意味に相当するが、むしろタイ語では未来の事態予測が眼目とされ、話し手の主観を抑制した表出形式である。「ʔàat(cà)」の基本的な意味は推量というよりは、可能性の判断という趣が強い。

(08) khăw ʔàatcà tɛ̀ɛŋŋaan lɛ́ɛw kɔ̂ɔdây
彼 ʔàatcà 結婚する 過去形 ありうる
彼女は結婚しているかもしれない。

（田中 1996：222）

3) 「nâacà」

「nâacà」は、客観的状勢から推して、「してもよさそうだ」という価値判断や、ある前提条件、経緯、情報などにもとづき、話者にとって事態が後述のように推移し、帰結される必然性が極めて高いということを認める判断表現の一つとして用いられることが多い。

(09) riancòp kaansùksăaphâakbaŋkháp lɛ́ɛw kɔ̂ɔ nâacàʔ àan năŋsŭ̌ɯphimʔ ɔ̀ɔk
卒業する 義務教育 過去形 で nâacàʔ 読む 新聞 わかる
義務教育を終えているのだから、新聞が読めるはずだ。

（田中 1996：230）

田中（1996）とタイで使われている教科書の対応関係を見ると、「だろう」と「khoŋ(cà)」以外は教科書の対応関係と一致している。教科書では、「khoŋ(cà)」は「だろう」に対応すると述べられているが、田中（1996）では「khoŋ(cà)」は、日本語の意味としては「だろう、はずだ、かもしれない」など非常に広範囲な解釈が観察されると指摘している。

2.2.3.Kiatkobchai（2011）

Kiatkobchai（2011）は、タイ語の小説作品と日本語訳版を調査し、「khoŋ[5]」が「だろう」に訳されていない場合があると指摘している。調査の結果、「だろう」が対応する「khoŋ」は 53%であり、「だろう」が対応しない「khoŋ」は 47%であった。それぞれの用法は、以下のようにまとめられる。

1)　「だろう」が対応する「khoŋ」

「khoŋ」は、「だろう」と同様に推量表現として使われている。「khoŋ」は、「主観的な推量」と「間接的な証拠からの推量」に分けられる。「khoŋ」と「だろう」いずれも小説の地の文と会話の文に用いられる。ただし、「だろう」における間接的な証拠からの推量の場合、説明モダリティの「の」が共起する。

（10）　khoŋ chuây khon phûknán dây bâaŋ
khoŋ 助ける 人 それら できる 多少
あの親子にはそれで多少の生活の足しにはなるだろう。

（Kiatkobchai 2011：59）

（11）　khoŋ klua yaay ləəy mây klâa hây ûm
khoŋ 怖がる 祖母 だから NEG 勇気がある させる 抱く
おばあさんが怖くて、抱かれたくなかったのでしょう。

（Kiatkobchai 2011：59）

2)　「だろう」が対応しない「khoŋ」

a. 一人称制限：「khoŋ」とは異なり、「だろう」には一人称を主体にしにくい場合がある。日本語記述文法研究会編（2003：148）では、「推量の対象となるのは、話し手にとって本来知りえないことであるので、不確かなことであっても、話し手の記憶の中にある事柄や話し手自身の行動予定にダロウを用いることは自然ではない」と述べている。

[5] Kiatkobchai（2011：64）によれば、「khoŋ」は「cà」と共起し「khoŋ cà」という形をとることが多く、本稿ではこれらを区別せずに扱う。両者の違いについては今後の課題であるという。

(12) phŏm khoŋ chûay thúk khon mây dây rɔ̀ɔk
僕 khoŋ 助ける 全て 人 NEG できる PART
全員を助けるんなんて無理だよ。

(Kiatkobchai 2011：59)

b. 断定扱い：話し手の独断な判断の場合、「だろう」も用いられるが、断定形に翻訳されることもしばしばある。

(13) man khoŋ yùu mây naan rɔ̀ɔk man tôŋ phàan pay mŭan chiiwít
それ khoŋ 居る NEG 長い PART それ AUX 通る 行く 同様 人生
それも長くは居続けられやしない、過ぎゆくのが定めだ。

(Kiatkobchai 2011：59)

c. 望み：話し手が願っていることを表現する際に「wăŋwâa（願う）+khoŋ(cà)」[6] がよく用いられる。

(14) wăŋ wâa tôy khoŋ phóp khun maa cháy chiwít mày thîi
望む と トイ khoŋ 会う 貴方 来る 使う 人生 新しい で
yəəraman yàaŋ mii khwaamsùk
ドイツ よう ある 幸せ
あなたがドイツへ来られて幸福な人生に遭遇されることを願っています。

(Kiatkobchai 2011：60)

d. 相手への願望：聞き手への願いや謝罪を表す際、「khítwâa（思う）+khoŋ(cà)」が用いられる。

(15) kràphŏm khít wâa lŭaŋphôɔ khoŋ khâwcay ceetanaadii khŏɔŋ kràphŏm
わたくし 思う と 本尊 khoŋ 理解 善意 の わたくし
わたくしにはご本尊様のご理解をいただけるものと思っております。

(Kiatkobchai 2011：60)

[6] 原文ではタイ文字で書かれているが、本稿では、これ以後も同様に、タイ文字は IPA 表記（International Phonetic Alphabet）で表記する。

e. その他：「だろう」の一人称制限や翻訳者の個人的な訳し方により、別の表現が用いられることもある。

（16） phŏm khoŋ nɔɔn mây làp pay talɔ̀ɔt chiiwít nêɛ
僕 khoŋ 寝る NEG 眠る 行く 永遠 人生 きっと
thâa rûu wâa man yaŋ mây taay
もし 知る と あれ まだ NEG 死ぬ
僕は絶対に、一生、安眠できない気がする。あの犬が生きているか死んだのかを確かめるまでは

（Kiatkobchai 2011：60）

Kiatkobchai （2011）は、タイで使われている教科書の対応関係に首肯しておらず、「だろう」には一人称の制限があるため、「khoŋ(cà)」が「だろう」に訳されない場合がある要因の一つであると説明している。しかし、他の認識的モダリティ形式と対応する場合もあると述べているが、どんな場合であるかは、詳しく説明していない。

2.2.4. Rattanapongpinyo （2016）

Rattanapongpinyo（2016）は、タイで使われている日本語の教科書における認識的モダリティ形式に注目し、日本語とタイ語の認識的モダリティ形式が教科書のとおり一対一の対応関係を成さない場合を明らかにすることを目的としている。特に、タイ語の無形モダリティ形式に対応する日本語の認識的モダリティ形式、及び日本語の無形モダリティ形式に対応するタイ語の認識的モダリティ形式を中心に考察を行っている。

1) タイ語の無形モダリティ形式に対応する日本語の認識的モダリティ形式

a. タイ語の無形モダリティ形式に対応する「だろう」

過去の事実を自分の想像のものとして捉える場合、日本語では（17a）のように「だろう」が使用されるが、タイ語では（17b）のように無形モダリティ形式が使用される。「khoŋ(cà)」はある事柄の真実を確認することができない場合にのみ使用されるため、話し手が知っている場合においては、（17b’）のように「khoŋ(cà)」を入れると不自然になる。

（17）状況：影山は二人の目撃者がアトリエに駆け込んできたと知っており、殺人事件の後の犯人の行動について推量している。

a. 松下画伯の悲鳴を耳にした二人は、すぐにでもアトリエに駆け込んでくるでしょう。

b. phɔɔ tháŋsɔ̌ɔŋkhon dâyyin sǐaŋrɔ́ɔŋ khɔ̌ɔŋ cìttakɔɔn matsɯchita
すると 二人 聞こえる 声 の 画家 松下
khâw kɔ̂ɔ rîip wîŋ maa thî satuudio
入る と すぐに 走る 来る に アトリエ
松下画伯の声を聞こえると、彼女たちはすぐにアトリエに走って来る。

b'.* phɔɔ tháŋsɔ̌ɔŋkhon dâyyin sǐaŋrɔ́ɔŋ khɔ̌ɔŋ cìttakɔɔn matsɯchita
すると 二人 聞こえる 声 の 画家 松下
khâw kɔ̂ɔ khoŋ(cà) rîip wîŋ maa thî satuudio
入る と khoŋ(cà) すぐに 走る 来る に アトリエ
松下画伯の声を聞こえると、彼女たちはすぐにアトリエに走って来るだろう。

（Rattanapongpinyo 2016：37）

b. タイ語の無形モダリティ形式に対応する「はずだ」

日本語記述文法研究会編（2003：161）によれば、「はずだ」の文は、「本来はこうである」ということに加えて、「現実はそうではない」ということを意味することがあるという。（18）は、話し手は「刑事である麗子なら、謎を解けるはずだ」と思っていたが、実際には、話し手が麗子に大事なヒントを教えたのにも関わらずまだ犯人の正体がわかっていないという状況である。この場合、日本語では（18a）のように「はずだ」が使用されるが、タイ語では（18b）のように無形モダリティ形式が使用される。なぜならば、タイ語では、事実性が確認できない場合にのみ認識的モダリティ形式が使用されるからである。（18）では、話し手である影山は麗子が刑事だということを知っているので、（18b'）のように「nâacà」を使用すると、不自然となるのである。

（18）状況：影山は麗子に殺人事件の謎を解くための大事なヒントを教えたが、麗子はまだ犯人の正体がわからない。

a. お嬢様は国立署捜査一課の現職刑事のはず。

b. khunnŭu pen câunâathîisɔ̀bsŭan hɛ̀ɛŋ sɔɔnɔɔ kunithaci na khráp
お嬢様 である 現職刑事 の 警察署 国立 終 終

お嬢様は国立署捜査一課の現職刑事である。

b'.* khunnŭu nâacà pen câunâathîisɔ̀bsŭan hɛ̀ɛŋ sɔɔnɔɔ kunithaci na khráp
お嬢様 nâacà である 現職刑事 の 警察署 国立 終 終
お嬢様は国立署捜査一課の現職刑事のはず。

（Rattanapongpinyo 2016：32）

このように、タイ語の無形モダリティ形式に対応する日本語の認識的モダリティ形式に関して、日本語では話し手が事実性を確認できる場合もできない場合も（17a）（18a）のように「はずだ」と「だろう」が使用されるが、タイ語では事実性が確認できない場合にのみ認識的モダリティ形式が使用される。

2) 日本語の無形モダリティ形式に対応するタイ語の認識的モダリティ形式

ある命題が真であるかどうか断定できない場合に関して、日本語は無形モダリティ形式で話し手の確信を表すことができる（例えば（19a））が、タイ語では（例えば（19b））「khoŋ(cà)」「nâacà」など認識的モダリティ形式を入れる。そうでないと、（19b'）のように判断の意味がなくなり、事実を述べる文になると説明している。（19）では話し手がなぜお母さんが家を買い戻したいか、その理由について分からない状況であるため、タイ語では認識的モダリティ形式が必要である。

（19）状況：家を買い戻すため、お母さんは他人からお金をだました。駿太郎は、なぜお母さんが家を買い戻したいか、その理由について分からないが、弥生という娘が家の庭の桜を見たいということに基づいて、推論する。

a. 弥生のためだ。弥生は庭の桜が見たいって

b. khoŋcà／nâacà tham phûa yayoi lûuk thə yàak duu dɔ̀ɔk sakura
khoŋcà／nâacà する ため 弥生 子供 彼女 たい 見る 花 桜
弥生のためだろう。弥生は庭の桜が見たいって。

b'.* tham phûa yayoi lûuk thə yàak duu dɔ̀ɔk sakura
する ため 弥生 子供 彼女 たい 見る 花 桜
弥生のためだ。弥生は庭の桜が見たいって。

（Rattanapongpinyo 2016：47）

Rattanapongpinyo (2016) では、タイで使われている日本語教科書で提示されている対応関係に首肯せず、両言語は完全に対応関係を成していないことを指摘している。タイ語の無形モダリティ形式に対応する場合が説明されているが、他の認識的モダリティ形式に対応する場合がどのような場面であるに関しては、説明がなされていない。

2.3. 問題提起

以上、タイで使われている日本語教科書と従来の日タイ両言語の認識的モダリティ形式対照研究には、まだいくつかの問題点が残されていると考えられる。その問題点は以下のようにまとめられる。

1) タイで使われている日本語教科書と従来の先行研究で示されている、日本語とタイ語の認識的モダリティ形式の対応関係は一致していない部分がある。以下の表 2 に示す。

表 2　日本語とタイ語の認識的モダリティ形式

タイ語 / 日本語	ʔàat(cà)	khoŋ(cà)	nâacà	無形モダリティ形式
かもしれない	タイでの教科書 ピヤマーワディー（1992） 田中（1996） Rattanapongpinyo（2016）	田中（1996）＊説明無し		
だろう		タイでの教科書 ピヤマーワディー（1992） 田中（1996） Kiatkobchai（2011） Rattanapongpinyo（2016）		Kiatkobchai（2011） Rattanapongpinyo（2016）
はずだ		田中（1996）＊説明無し	タイでの教科書 ピヤマーワディー（1992） 田中（1996） Rattanapongpinyo（2016）	Rattanapongpinyo（2016）
無形モダリティ形式		Rattanapongpinyo（2016）	Rattanapongpinyo（2016）	

2) 先行研究では、教科書のように一対一の対応関係を成していない場合もあると示唆するが、実際に日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」はどのように訳されているか、教科書のとおり対応しないのはどのような場面であるかに関しては、十分説明されていない。さらに、表 2 の空白の部分、すなわち、タイ語の無形モダリティ形式に対応する「かもしれない」や「ʔàat(cà)」に対応する「だろう」など、先行研究では挙げられていない対応関係が残っている。

3) 今までの日タイ対照研究の先行研究の考察は、認識的用法（推量用法）を中心に、日本語の認識的モダリティ形式がどのタイ語の認識的モダリティ形式と対応しているか、またはタイ語の認識的モダリティ形式がどの日本語の認識的モダリティ形式と対応しているか、という観察にとどまっており、派生的な用法に関してはあまり観察されていない。

そして、これらの問題を明らかにするため、本研究は以下を目的とする。

① 実際に日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」が両言語でどのように訳されているか、両言語の認識的モダリティ形式がどのような対応関係を成しているかについて明らかにし、従来説明されていない対応関係があれば、それに関して説明することを目的とする。

② 両言語を比較対照することにより、日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の用法を分析しながら、日本語とタイ語の認識的モダリティ形式の特徴を明らかにする。

第 3 章　調査概要

本研究では、実際に日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」がどのように訳されているか、両言語の認識的モダリティ形式がどのような対応関係を成しているかについて明らかにするため、日本語とタイ語の小説とドラマから、日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の例を抜き出し、両言語の対応関係を分析する。3.1 では調査対象を説明し、3.2. では分類方法について述べる。なお、それぞれの調査結果は第 4〜8 章で順に分析・考察を行う。

3.1. 調査対象と調査方法

第 2 章で紹介した先行研究では、例文は全て小説から取り出されていたが、本稿では、実際に使用する自然会話に近い用例を把握するため、2000 年以後の様々なジャンルのドラマも対象に加えて、調査する。

本稿で調査した日本の作品は、

- タイ語の字幕がある日本のドラマ
  『1 リットルの涙』『ガリレオ』『半沢直樹』『ラッキーセブン』『リーガルハイ』
- タイ語に翻訳された日本語の小説
  東川篤哉『謎解きはディナーの後で』
  夏川草介『神様のカルテ』

日本語の作品に関して、『謎解きはディナーの後で』『ガリレオ』『ラッキーセブン』は、推理小説と推理ドラマであり、推量表現がよく使われているという理由で、選んだ。また『神様のカルテ』『1 リットルの涙』『半沢直樹』『リーガルハイ』は、田舎の医者、学生の生活、銀行員、弁護士をテーマにした作品であるため、日常会話や専門分野で使われる表現が多いと考えられる。

Rattanapongpinyo（2016）は、日本語の無形モダリティ形式に対応するタイ語の認識的モダリティ形式について考察したが、日本の作品のみの調査にとどまっていた。そのため、本稿では、1980 年以後に刊行された日本語訳があるタイの小説と、日本語の字幕があるタイのドラマも加えて、調査する。

本稿で調査したタイの作品は、

- 日本語の字幕があるタイのドラマ・映画
  『sɔ̌ɔŋ hǔacay níi phûa thəə』『thəə khɯɯ phrǒmlíkhìt』『phrácan sǐ rúŋ』『kèət maa luy』『phîimâak phrákhánooŋ』
- 日本語に翻訳されたタイ語の小説
  Khamphun Bunthavi『lûuk iisǎan（東北タイの子）』
  Prapatsorn Sewikul『weelaa nay khùatkɛ̂ɛw（瓶の中の時間）』
  Win Lyovarin『rûaŋ khɔ̌ɔŋ phrá dèk sŭa kày mɔ̂ɔt（僧子虎鳥虫のゲーム）』
  Uthis Haemamool『sǐaŋ rîak càak phûan kàw（旧友の呼び声）』
  Binlah Songkalagiri『sǐi thîi pèɛt khɔ̌ɔŋ rúŋkinnám（虹の八番目の色）』

タイ語の作品には、推理小説や推理ドラマがあまり見当たらず、ほとんどの内容が、恋愛や社会問題に関するものである。本研究で選んだ作品は、政府問題、社会問題、家族に関する内容などであるため、様々な日常の場面で使われる表現が見られると思われる。

なお、特定の翻訳者の訳し方の影響を受けないよう、異なる翻訳者の作品を選んだ。

次に、調査方法に関して述べる。本稿では以上の日本の作品から「だろう[7]」「かもしれない」「はずだ」の用例とタイの作品から「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の用例を抜き出し、全ての用例をそれぞれのタイ語訳と日本語訳と対照する。

---

[7] 「だろう」の「確認要求」や「疑問要素がある場合」は、タイ語に訳すと、「châymáy」などの疑問文になるため、本研究の対象外である。

確認要求とは、命題に対して話し手の判断が成立せず（不確定性条件）、それを聞き手に問いかけて回答を求める（問いかけ性条件）という 2 つの条件のうち、不確定性条件を欠くものである。つまり、確認要求は話し手には話し手なりの判断が成立しているが、それをより確かなものにするために、聞き手に問いかけるといった機能を持つものである。確認要求は「だろう」や「じゃないか」「ね」「よね」といった形式によって表される。（日本語文法学会編 2014：106）

「だろう」の疑問要素がある場合は、「か」や「何」等の疑問要素が付随しており、「疑念用法」「婉曲的な疑問用法」に分けられている。例えば、「何年ぶりだろう。（疑念用法）」「店に戻らせてはもらえないでしょうか。(婉曲的な疑問用法)」(キャアコップチャイ 2009:167-170)

まず、日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」がタイ語でどのように訳されているのか、またどの形式がどの程度の割合で使用されているのか、以下の表3～表5で示す。

表3　「だろう」のタイ語訳の出現数

作品名	khoŋcà	無形	ʔàatcà	tôŋ	nâacà	nêɛ	khít	máŋ	pen pay dây wâa	rŭŭ	daw	duu thâa	rúu	chŭa	合計
ガリレオ	1	3													4
ラッキーセブン	3	2		2		1								1	9
1リットルの涙	2		1												3
半沢直樹	4	4	5	1	1	1	3						1		20
リーガルハイ	4	6	1	3	2	1	1					1			19
謎解きはディナーの後で	44	16	17	15	11	3		1	2	1	1				111
神様のカルテ	38	13		3	3			1							58
合計	**96**	**44**	**24**	**24**	**17**	**6**	**4**	**2**	**2**	**1**	**1**	**1**	**1**	**1**	**224**

日本の7作品中の「だろう」の出現数は、224例である。表3で示すように、「だろう」の訳として、最も使用されたのは、「khoŋ(cà)」で96例（42.8%）である。次いで「無形モダリティ形式」44例（19.6%）、「ʔàat(cà)」24例（10.7%）、「tôŋ」24例（10.7%）の順で訳されている。

表4　「かもしれない」のタイ語訳の出現数

作品名	ʔàatcà	無形	khoŋcà	pen pay dây wâa	rŭŭ	tôŋ	baaŋ thii	khít	合計
ガリレオ	8	4	4			1	1		18
ラッキーセブン	15	4	1					1	21
1リットルの涙	1	2	1						4
半沢直樹	9	1			1				11
リーガルハイ	7	3	3	2		1			16
謎解きはディナーの後で	35	4	3		2				44
神様のカルテ	21		1	1					23
合計	**96**	**18**	**13**	**3**	**3**	**2**	**1**	**1**	**137**

日本の7作品中の「かもしれない」の出現数は、137例である。表4で示すように、「ʔàat(cà)」に最も多く訳されており、96例（70%）である。次いで、「無形モダリティ形式」18例（13.1%）、「khoŋ(cà)」13例（9.5%）の順に訳されている。

表 5　「はずだ」のタイ語訳の出現数

作品名	無形	tôŋ	nâacà	khoŋcà	nêɛ	pràmaan	pen pay dây wâa	mân cay	合計
ガリレオ		2	1	1	1				**5**
ラッキーセブン	3	1							**4**
1リットルの涙									**0**
半沢直樹	7	1		2	2	1			**13**
リーガルハイ	7	1	2						**10**
謎解きはディナーの後で	14	9	10	6	1		1		**41**
神様のカルテ	2	1		1				1	**5**
合計	**33**	**15**	**13**	**10**	**4**	**1**	**1**	**1**	**78**

日本の 7 作品中の「はずだ」の出現数は 78 例である。表 5 で示すように、「はずだ」は、「無形モダリティ形式」で最も多く訳されており、33 例（42.3%）である。次いで、「tôŋ」15 例（19.2%）「nâacà」13 例（16.7%）が使用されている。

このように、日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」は、教科書のようにある形式が特定の形式に訳されるわけではないことが確認でき、「無形モダリティ形式」「khoŋ(cà)」「tôŋ」「ʔàat(cà)」「nâacà」に多く訳されていることが明らかになった。

なお、「tôŋ」に関しては、義務的モダリティの意味を持っている用例もあるため、本稿の対象にしない。

次に、タイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」が日本語でどのように訳されているのか、また、どの形式がどの程度の割合で使用されているのか、以下の表 6～表 8 で示す。

表 6　「khoŋ(cà)」の日本語訳の出現数

作品名	無形	だろう	に違いない	思う	かもしれない	きっと	はずだ	ようだ	らしい	恐れ	信じる	たぶん	ぐらい	そうだ	みたい	気付く	考える	つもり	合計
sɔ̌ŋ hŭacay níi phûa thəə	9	1			1														**11**
thəə khuɯɯ phrɔ̂mlíkhìt	7					1									1				**9**
phrácan sĭ rúŋ	33	4		2	2		1					2							**44**
kêət maa lɯy	4																		**4**
phĭĭmâak phrákhánooŋ							1												**1**
lûuk iisăan	23	13	16	4	3	2	1	2	2				2	1					**69**
rûuaŋ khɔ̌ŋ phrá dèk sŭa kày mɔ̂ot	3				1			1						1					**6**
sĭi thĭi pèet khɔ̌ŋ rúŋkinnám	1	3			1														**5**
sĭaŋ rîak càak phûan kâw	3	3					2	3											**11**
weelaa nay khûatkɛ̂ɛw	28	29	6	10	4	4	1			3	2					1	1	1	**90**
合計	**111**	**53**	**22**	**16**	**12**	**7**	**6**	**6**	**2**	**3**	**2**	**2**	**2**	**2**	**1**	**1**	**1**	**1**	**250**

タイの 10 作品中の「khoŋ(cà)」の出現数は 250 例である。表 6 で示すように、「khoŋ(cà)」は、「無形モダリティ形式」で最も多く訳されており、111 例（44.4%）である。次いで、「だろう」53 例（21.2%）、「に違いない」22 例（8.8%）の順で多く訳されている。

表 7　「ʔàat(cà)」の日本語訳の出現数

作品名	かもしれない	無形	だろう	思う	恐れる	みたい	かねない	たぶん	合計
sɔ̌ɔŋ　hŭacay　níi　phŵa　thəə	5	4	1						**10**
thəə　khɯɯ　phrŏmlíkhìt	2	3					1		**6**
phrácan　sĭ　rúŋ	3	7							**10**
kɛ̀ət　maa　luy	1								**1**
phîimâak　phrákhánooŋ	3								**3**
lûuk　iisăan	6	2							**8**
rûaŋ　khɔ̌ɔŋ　phrá　dèk　sŭa　kày　mɔ̂ɔt	2	3			1				**6**
sĭi　thîi　pɛ̀ɛt　khɔ̌ɔŋ　rúŋkinnám	2								**2**
sĭaŋ　rîak　càak　phûan　kàw									**0**
weelaa　nay　khùatkɛ̂ɛw	21	9	11	2	1	1		1	**46**
合計	**45**	**28**	**12**	**2**	**2**	**1**	**1**	**1**	**92**

タイの 10 作品中の「ʔàat(cà)」の出現数は 92 例である。表 7 で示すように、「ʔàat(cà)」は、「かもしれない」に最も多く訳されており、45 例（48.9%）である。次いで、「無形モダリティ形式」28 例（30.4%）「だろう」12 例（13%）に多く訳されている。

表 8　「nâacà」の日本語訳の出現数

作品名	無形	はずだ	だろう	合計
sɔ̌ɔŋ　hŭacay　níi　phŵa　thəə	1	1		**2**
thəə　khɯɯ　phrŏmlíkhìt	1			**1**
phrácan　sĭ　rúŋ		1		**1**
kɛ̀ət　maa　luy				
phîimâak　phrákhánooŋ				
lûuk　iisăan	1			**1**
rûaŋ　khɔ̌ɔŋ　phrá　dèk　sŭa　kày　mɔ̂ɔt		1		**1**
sĭi　thîi　pɛ̀ɛt　khɔ̌ɔŋ　rúŋkinnám	1			**1**
sĭaŋ　rîak　càak　phûan　kàw		1	2	**3**
weelaa　nay　khùatkɛ̂ɛw	1			**1**
合計	**5**	**4**	**2**	**11**

タイの 10 作品中の「nâacà」の出現数は、「khoŋ(cà)」と「ʔàat(cà)」に比べると、少なく、11 例のみである。表 7 で示すように、「無形モダリティ形式」に最も多く訳されており、5 例（45.4%）である。次いで、「はずだ」4 例（36.4%）「だろう」2 例（18.8%）に訳されている。

このように、タイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」は、教科書のようにある形式が特定の形式に訳されるわけではないことを確認でき、「無形モダリティ形式」「だろう」「かもしれない」「はずだ」によく訳されていることが明らかになった。

本稿では、「だろう」「かもしれない」「はずだ」「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の 6 つの認識的モダリティ形式の他に両言語の「無形モダリティ形式」を加え、分析を行う。

3.2. 分析方法

3.1 で紹介したように、本稿では「だろう」「かもしれない」「はずだ」「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」「無形モダリティ形式」を中心に、642 文全ての用例のタイ語と日本語を対照する。各作品から抜き出した用例は、それぞれの形式に分け、出現数は以下の表 9 のとおりである。

表 9　日タイ認識的モダリティ形式の対応関係の出現数

タイ語 / 日本語	ʔàat(cà)	khoŋ(cà)	nâacà	無形モダリティ形式	合計
かもしれない	141	25		18	184
だろう	36	149	19	44	248
はずだ		16	17	33	66
無形モダリティ形式	28	111	5		144
合計	205	301	41	95	642

また、作品別・形式別にすると、次の表 10 のとおりである。

表 10　日タイ認識的モダリティ形式の対応関係の出現数（作品別）

作品名		形式 - 無形式						形式 - 形式							合計
		かも	だろう	はずだ	ʔàatcà	khoŋcà	nâacà	かも	かも	だろう	だろう	だろう	はずだ	はずだ	
		無形	無形	無形	無形	無形	無形	ʔàatcà	khoŋcà	khoŋcà	ʔàatcà	nâacà	nâacà	khoŋcà	
ガリレオ	180分(第1-4話)	4	3					8	4	1			1	1	22
ラッキーセブン	225分(第1-5話)	4	2	3				15	1	3					28
1リットルの涙	90分(第1-2話)	2						1	1	2	1				7
半沢直樹	225分(第1-5話)	1	4	7				9		4	5	1		2	33
リーガルハイ	225分(第1-5話)	3	6	7				7	3	4	1	2	2		35
sɔ̌ɔŋ hŭacay nîi phûa thəə	210分(第1-3話)				4	9	1	5	1	1	1		1		23
thəə khɯɯ phrɔ̄mlíkhìt	210分(第1-3話)				3	7	1	2							13
phrácan sĭ rúŋ	280分(第1-4話)				7	33		3	2	4			1	1	51
kàət maa luy	95分					4		1							5
phîimâak phrákhánooŋ	112分							3						1	4
謎解きはディナーの後で	250ページ	4	16	14				35	3	44	17	11	10	6	160
神様のカルテ	201ページ		13	2				21	1	38		3		1	79
lûuk iisăan	384ページ				2	23	1	6	3	13				1	49
rŭaŋ khɔ̌ɔŋ phrá dèk sŭa kày mɔ̂ɔt	20ページ				3	3		2	1				1		10
sĭi thîi pɛ̀ɛt khɔ̌ɔŋ rúŋkinnám	18ページ					1	1	2	1	3					8
sĭaŋ rîak càak phŭan kâw	22ページ					3				3		2	1	2	11
weelaa nay khùatkɛ̂ɛw	282ページ				9	28	1	21	4	29	11			1	104
合計		18	44	33	28	111	5	141	25	149	36	19	17	16	642

従来の先行研究では、無形モダリティ形式に対応する認識的モダリティ形式に関して述べられることは少ないが、表 9 と表 10 より、本稿の調査結果では、無形モダリティ形式に対応する日タイ語の認識的モダリティ形式が少なくないことが明らかである。642 例の中、タイ語の無形モダリティ形式に対応する「だろう」「かもしれない」「はずだ」は 95 例（14.8%）であり、日本語の無形モダリティ形式に対応する「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」は、144 例（22.4%）である。無形モダリティ形式の対応関係を分析するによって、先行研究では見落としされていた「だろう」「かもしれない」「はずだ」「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の用法が明らかになると考えられる。

本研究の分類と考察は、表 9 を参考にし、以下の順に行う。

表 9　日タイ認識的モダリティ形式の対応関係の出現数

タイ語 / 日本語	ʔàat(cà)	khoŋ(cà)	nâacà	無形	合計	
かもしれない	141	25		18	184	→第 6 章
だろう	36	149	19	44	248	→第 7 章
はずだ		16	17	33	66	→第 8 章
無形	28	111	5		144	→第 5 章
合計	205	301	41	95	642	
				↓ 第 4 章		

第 4 章では、タイ語の無形モダリティ形式に対応する「かもしれない」「だろう」「はずだ」を分析する。

第 5 章では、日本語の無形モダリティ形式に対応する「ʔàat(cà)」「khoŋ(cà)」「nâacà」を分析する。

第 6 章では、「かもしれない」に対応する「ʔàat(cà)」「khoŋ(cà)」を分析し、「かもしれない」の特徴をまとめる。

第 7 章では、「だろう」に対応する「ʔàat(cà)」「khoŋ(cà)」「nâacà」を分析し、「だろう」の特徴をまとめる。

第 8 章では、「はずだ」に対応する「khoŋ(cà)」「nâacà」を分析し、「はずだ」の特徴をまとめる。

第 4 章　タイ語の無形モダリティ形式に対応する日本語の形式

第 4 章では、タイ語の無形モダリティ形式に対応する「だろう」「かもしれない」「はずだ」について分析する。本稿では、Rattanapongpinyo（2016）の結果を基にし、より詳しく分析を行う。4.1.～4.3.では、タイ語の無形モダリティ形式に対応する「だろう」「かもしれない」「はずだ」のそれぞれについて記す。最後に、4.4 で全体をまとめる。

タイ語の無形モダリティ形式に関しては、管見の限り先行研究ではあまり述べられていない。Uppakit（1937）では、タイ語のマーラー（ムード）に関して述べており、タイ語のマーラー（ムード）の中で無形形式で表しているのは、「ニテーサ・マーラー」であり、これは情報のやり取りと話し手の意見を表すマーラーである。また、Rattanapongpinyo（2016）は、タイ語では事実性を確認できる場合のみ無形モダリティ形式を使用すると説明している。

本稿では先行研究を踏まえて、図 3 の手順で分析する。まず、出現文と使用状況について分析し、それから、話し手が命題の事実を知っているかどうかについても分析する。最後に、話し手が事実を知っているかどうか確認するため、概言を表す副詞などと共起できるかどうか、またどのような副詞と共起するかという観点から検討する。

なお、無形モダリティ形式に対応する用例を分析する前に、まず、「だろう」「かもしれない」「はずだ」、それぞれの形式に関する先行研究の用法をまとめ、教科書や先行研究で挙げられている対応関係に該当する用例を挙げ、次に無形モダリティ形式に対応する用例を取り挙げる。

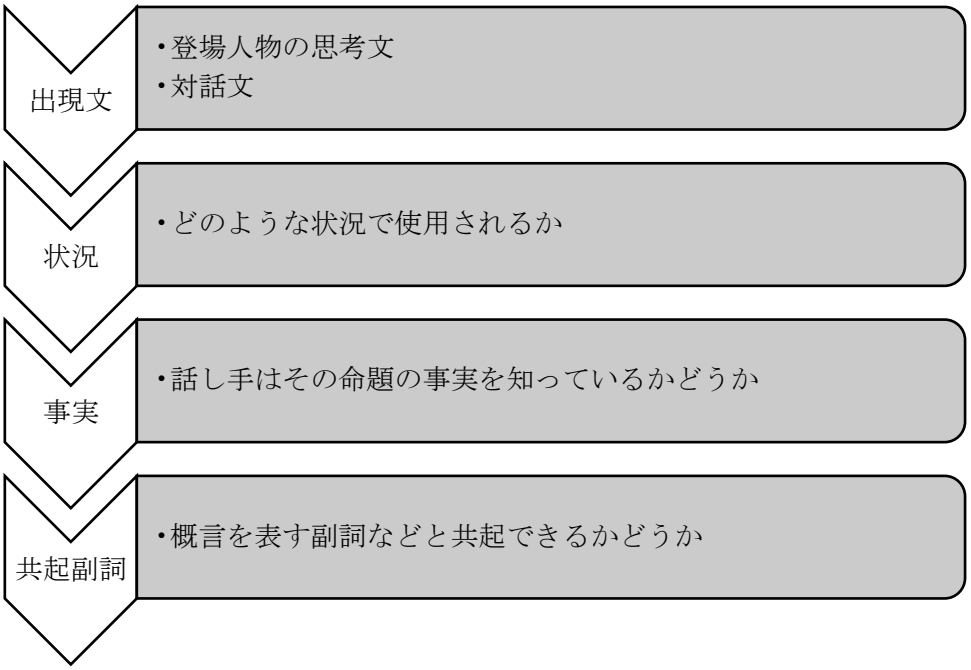

図 3　タイ語の無形モダリティ形式に対応する日本語の形式の分析の手順

4.1. タイ語の無形モダリティ形式に対応する「かもしれない」

「かもしれない」に関する先行研究をまとめると、大きく 4 つの用法を持っていることが分かる。それは、①可能性を表す用法（三宅 1995、仁田 2000、ワンプラディット 2008）、②低程度推量用法（野田 1984、平田 2001、山岡 2016）、③前置き用法（野田 1984、平田 2001、ワンプラディット 2008、國澤 2013、山岡 2016）、④対人的配慮用法（ワンプラディット 2008、山岡 2016）である。

まず、①可能性を表す用法について述べる。三宅（1995:198-199）では、命題が真である可能性があると認識する場合に使用する用法であるとされている。加えて、その可能性が高いか低いかという、可能性の程度についての認識ではないことを述べている。仁田（2000：132-133）によれば、「かもしれない」は可能性の把握を表す用法であるとされている。ワンプラディット（2008：200）は、「かもしれない」は「可能性」を表すものであり、P の可能性と¬P の可能性という両極の可能性が共存していると説明する。次の（20）がその一例である。

（20）状況：相手に裁判に来てもらうために、古美門は、誘っている。

a. 別居中の奥さんと娘さんも法廷に見に来る**かもしれません**ね。

b. phanyaa thîi kamlaŋ măaŋməən kàp lûuksăaw khɔ̆ɔŋ khun **?àatcà**

奥さん　修飾助詞　ている　揉める　　と　　娘　　の　　あなた　?àatcà
maa　duu　khun
来る　みる　あなた
別居中の奥さんと娘さんも見に来るかもしれません。

（リーガルハイ）

（20）の話し手は、相手の奥さんと娘さんが法廷に見に来るかどうか知らないため、断定できず、来る可能性もあると言う。（20）の「来るかもしれません」は、「来ないかもしれません」と言う意味も含めている。

田中（1996：222）と Rangkupan（2005：62）では、タイ語の「?àatcà」も可能性を表す形式だと述べている。そのため、（20）ように可能性を表す場合、日本語の「かもしれない」はタイ語の「?àatcà」に対応すると言える。

次に、前置き用法として使用される場合について述べる。「かもしれない」は、相手の言ったことを完全に否定せず、そういう可能性もあると述べたうえで、自分の主張を展開し、配慮表現として使用されている。（野田 1984、平田 2001、國澤 2013、山岡 2016）この場合、「かもしれない」は、「でも」「けど」など逆接接続詞とよく共起しているとされる。次の（21）がその一例である。

（21）状況：ラッキー探偵社の新田は警察やニュースに犯人だと言われたが、探偵社長は新田が犯人ではないと信じて、部下達と相談している。

社長：もし、新田君のことで営業停止命令が出たとしても受け入れようと思います。でも、その前にやりたいことがあるの。（i）状況的には今新田君が犯人にみえるかもしれない。でも、何度考えてみてもやっぱり思うのよ。（ii）新田君やってないんじゃないかって、みんなも、そうじゃない？

（i） a. 状況的には今新田君が犯人に見える**かもしれない**。でも、何度考えてみてもやっぱり思うよ。新田君やっていないんじゃないかって。みんなもそうじゃない？

b. níttà　nay　tɔɔnníi　**?àatcà**　thùuk　mɔɔŋ　pen　khonráay
新田　中　今　?àatcà　られる　見る　である　犯人
tɛ̀ɛ　mâywâacà　khít　kìikhráŋ　kɔ̂ɔdây　khamtɔ̀ɔp　dəəm　wâa
しかし　どうしても　考える　何度　も　答え　同じ　と

thâa níttà mây dây tham ciŋ lâ
もし 新田 否定 できる する 本当 終助詞
thúkkhon khít mŭ̌ankan châymăy
みんな 思う 同じ じゃない
今の新田が犯人に見えるかもしれない。でも、何度考えてみても、同じ答えが出た。もし新田が本当にやっていなかったら。みんなもそう思ってるでしょ。

（ラッキーセブン）

（21）では、ラッキー探偵社の新田が警察やニュースから犯人だと扱われていたが、社長は（21i）のように完全に否定せず、そういう可能性もあると述べたうえで、（21ii）のように自分の主張を述べている。

以上のように、可能性を表す場合と前置きの場合には、日本語の「かもしれない」はタイ語の「ʔàat(cà)」に対応している。

さらに、対人的配慮用法の「かもしれない」も存在する。ワンプラディット（2008 : 200）によれば、話し手が直接的な経験によって評価的判定を表す場合、「かもしれない」は可能性を表さず、配慮用法として使用するという。また、山岡（2016 : 142-143）は、《改善要求》《忠告》《主張》《感情表出》など、相手の消極的フェイスを脅かす場合、自らの発話が FTA となるリスクを回避するために、話し手は対人配慮用法の「かもしれない」を用いると述べている。このような対人的配慮用法の「かもしれない」をタイ語に訳し、「ʔàatcà」を使うと、次の（22）のように不自然になる。

（22）状況：亜也たちは、犬の名前を付けている。

遥斗：「がんも」 とか？
亜也：（i）それかわいいかも。
瑞生：（ii）ああ「がんも」かあ。ああ、いいかもなあ。うん。
亜也：じゃあ、決まり。がんも！

（1 リットルの涙）

（i） a. それかわいいかも。
b. kôɔ nâarák dii ná
それ かわいい いい 終助詞
それがかわいい。

（ii） c. ああ「がんも」かあ。ああ、いいかもなあ。

d. ʔaa kanmó rɔ̌ɔ ʔaa kɔ̂ɔ dii ná

ああ がんも か ああ （それ）は いい 終助詞

ああ「がんも」かあ。ああ、それはいいなあ。

（22a）（22c）の話し手は、遥斗が考えた「がんも」という名前を「かわいい」「いい」と評価している。本稿の調査では、対人的配慮用法の「かもしれない」は、対話文で使用されており、（22a）（22c）のように形容詞と共起し、評価を表す状況で使用されていることが分かった。

ワンプラディット（2008：198）によれば、「かもしれない」を用いることによって、話し手が p と思っている､あるいは p と評価したと断定するのを控えることができるという。これは、Brown and Levinson（1978）という ‘face’-preserving politeness strategies の一つであり､強い主張を避けることで対話がより和むという効果を持つと述べている。このように、（22a）（22c）は、「かもしれない」を使用することにより、話し手の「それ、かわいい」「いいなあ」という断定的な判断を避けられていると考えられる。この場合の「かもしれない」は対人的配慮用法として使用されているため、概言を表す副詞と共起できない。

（22）a’.*それもしかしたらかわいいかも。

（22）c’.*ああ「がんも」かあ。ああ、もしかしたらいいかもなあ。

それに対して、この状況においてタイ語では、「ʔàat(cà)」を使うと、（22b’）（22d’）のように不自然になる。

（22）b’.* kɔ̂ɔ ʔàatcà nâarák dii ná

それ ʔàatcà かわいい いい 終助詞

それはかわいいかも。

（22）d’.* ʔaa kanmó rɔ̌ɔ ʔaa kɔ̂ɔ ʔàatcà dii ná

ああ がんも か ああ それは ʔàatcà いい 終助詞

ああ「がんも」かあ。ああ、いいかもなあ。

なぜならば、ピヤマーワディー（1992）、田中（1996）でも述べられているように、タイ語では、「ʔàat(cà)」は、ある事柄の事実性をはっきりと確認はできないが、弱い確信で

判断するものであるからである。（22）は、話し手が直接経験したことを評価している。話し手が「?àat(cà)」を使用すると、自分の評価をはっきりと確認できないという意味になり、不自然である。

以上の分析から、日本語の「かもしれない」は、可能性を表す用法から離れた対人的配慮のために話し手の評価を回避する用法を持っているが、タイ語の「?àat(cà)」は、話し手が事実を知らないという状況で、可能性を表す用法としてのみ使用できることが明らかになった。

4.2. タイ語の無形モダリティ形式に対応する「だろう」

「だろう」に関して、先行研究では、様々な用法が述べられている。本稿では、「確認要求用法」と「疑問要素がある場合」を対象外とし、推量用法のみについて分析する。

先行研究をまとめると、推量用法は、話し手の想像の中のものであり、経験や既知の情報など何らかの情報に基づいて不確かなものとして捉える用法である。（三宅 1995、森山・安達 1996、仁田 2000、日本語記述文法研究会編 2003）この場合、仮定条件を述べる際にもよく使われている。（森山・安達 1996、日本語記述文法研究会編 2003）

（23）状況：麗子は影山を見て、考えている。

（i）判る判る、というふうに影山は頷いた。（ii）彼には判るのだろう。

a. 判る判る、というふうに影山は頷いた。彼には判るのだろう。

b. khaŋeyama pháyáknâa yâaŋ khâwcay khăw kɔ̂ɔ khoŋ rúu ciŋciŋ
影山 頷く ふうに 判る 彼 は khoŋ 判る 本当
影山は、判るというふうに頷いた。彼には本当に判るのだろう。

（謎解きはディナーの後で）

（23）では、話し手は、（23i）「判る判る、というふうに影山は頷いた」ということに基づいて、（23ii）のように彼が判ると推量している。タイ語の「khoŋ(cà)」は、話し手の経験による手持ちの情報や既知の情報に基づいて主観的に推し量りを表すものである。（ピヤマーワディー1992、田中 1996、Rangupan2005）以上の先行研究から、推量用法の「だろう」は、タイ語の「khoŋ(cà)」に対応すると考えられる。

しかし、例外の用例が存在する。Rattanapongpinyo（2016：51）でも述べているように、過去の事実を自分の想像のものとして捉える場合に関しては、日本語では「だろう」が使用されているが、タイ語では無形モダリティ形式が使用されている。

本稿の調査では、次の（24）のように小説の対話文で使用されていることが分かった。また、第 2 章で紹介した Rattanapongpinyo（2016）の用例（17）に関して、話し手がその事実を確認できたかどうかの解釈の基準が詳細に説明されていないため、本稿では（17）を再分析し、説明する。

（24）状況：殺人事件が行った部屋の隣にいる美幸は、被害者の声や外の音を聞こえなかった理由を警察に説明している。

美幸：刑事さん、すぐ隣の部屋にいたわたしが、いちばん最後に現場に顔を出した理由を説明します。実はわたし、試験勉強をしていたというのは真っ赤な嘘。（i）本当はヘッドフォンで音楽を聴いていたんです。（ii）それもかなりうるさい奴を。だからわたし、麗子さんが姉さんの部屋の扉をノックしていることにも気がつかなかったんです。（iii）きっとドラムやなんかの音と混ざっちゃったんでしょうね。わたしが姉さんの部屋の異変に気がついたのは、スローなバラード調の曲に変わったときでした。

（iii）a. きっとドラムやなんかの音と混ざっちゃったんでしょうね。

b. thán sĭaŋ klɔɔŋ sĭaŋ ʔàray tiikan hâymûa paymòt
も 音 ドラム 音 何か 混ざる むちゃくちゃ 全て
ドラムやなんかの音と混ざっちゃったんです。
（謎解きはディナーの後で）

b'.* thán sĭaŋ klɔɔŋ sĭaŋ ʔàray khoŋcà tiikan hâymûa paymòt
も 音 ドラム 音 何か khoŋcà 混ざる むちゃくちゃ 全て
ドラムやなんかの音と混ざっちゃったんでしょう。

（17）状況：目撃者である真紀は、会ったことについて麗子に教えた。その後、麗子は目撃者の話を影山に伝えて、殺人事件の後の犯人の行動について話している。

相原：梯子の倒れる音です。といっても、その時点ではなんの音だか判りません。ただ、バターンというような、なにか大きな物が倒れるような音でした。（i）わたしと中里さんはびっくりして顔を見合わせ、慌ててアトリエの扉を開くと、二人で中に飛び込みました。

（中略）

麗子：当然犯人はアトリエから逃げ出そうとしたんでしょうね。

影山：もちろんでございます。しかし運悪く、別の玄関にはすでに中里真紀と相原美咲が追っていました。（ii）松下画伯の悲鳴を耳にした二人は、すぐにでもアトリエに駆け込んでくるでしょう。

（謎解きはディナーの後で）

（ii） a. 松下画伯の悲鳴を耳にした二人は、すぐにでもアトリエに駆け込んでくるでしょう。

b. phɔɔ tháŋsɔ̌ɔŋkhon dâyyin sǐaŋrɔ́ɔŋ khɔ̌ɔŋ cìttakɔɔn matsɯchita khâw
すると 二人 聞こえる 声 の 画家 松下 入る
kɔ̂ɔ rîip wîŋ maa thî satuudio
すぐに 走る 来る に アトリエ
松下画伯の声を聞こえると、彼女たちはすぐにアトリエに走って来る。

b'.* phɔɔ tháŋsɔ̌ɔŋkhon dâyyin sǐaŋrɔ́ɔŋ khɔ̌ɔŋ cìttakɔɔn matsɯchita khâw
すると 二人 聞こえる 声 の 画家 松下 入る
kɔ̂ɔ khoŋcà rîip wîŋ maa thî satuudio
すぐに khoŋcà 走る 来る に アトリエ
松下画伯の声を聞こえると、彼女たちはすぐにアトリエに走って来るでしょう。

（24）では、話し手は、なぜノックしていることに気付かなかったかと聞かれ、（24i）のように過去の事実を基にして、「きっとドラムやなんかの音と混ざっちゃったんでしょうね」（24ii）と推量し、答えている。また、（17）の話し手は、（17i）の過去の事実を麗子から聞いたが、犯人の行動について推量しているので、（17i）の過去の事実に基づいて「松下画伯の悲鳴を耳にした二人は、すぐにでもアトリエに駆け込んでくるでしょう」（17ii）と推量している。いずれも、話し手は過去の事実に基づいて推量している。この場合、（24a）のように「きっと」など概言を表す副詞と共起することができる。

それに対して、タイ語に関して、ピヤマーワディー（1992 : 265）によれば、「khoŋ(cà)」は、ある事柄の真実を確認することはできないが、自分の経験による手持ちの情報や既知の情報を根拠とし、それに基づいて考えた結果、その事柄が真である可能性があると判断する形式という。（24）では、話し手はヘッドフォンで音楽を聴き、それはかなりうるさい音楽だと知っている。その音楽はドラムやなんかの音と混ざっていることは、自分が体験したことである。（17）では、話し手は「わたしと中里さんはびっくりして顔を見合わせ、慌ててアトリエの扉を開くと、二人で中に飛び込みました」という事実を聞いた。したがって、（23）（17）では話し手が知っていることなので、「khoŋ(cà)」を入れると不自然になる。

このように、過去の事実に基づいて、推量している場合、日本語の「だろう」はタイ語の無形モダリティ形式に対応している。

しかし、例外的な用例もある。以下の「だろう」は、（25b）では無形モダリティ形式で訳されているが、（25b'）のように「khoŋ(cà)」を使用しても、問題はない。これに関して、本研究では用例を挙げて指摘するにとどめる。

（25）状況：一止は、自分が働いている病院の状況について考えている。

慢性的医者不足のこの町では、外科でも内科でも耳鼻科でも皮膚科でも、ひとりの「救急医」が診療を行う。（i）それが良いのかと問う声もあるだろう。むろん良い訳がない。しかし、これもまた地方病院の現状なのである。

（i） a. それが良いのかと問う声もあるだろう。

b. mii khon thăam mŭɯankan wâa chênníi lέεw cà dii rŭɯ
いる 人 問う も と このように なって いい か
こんな状態になって本当にいいかどうか聞いた人もいる。

（神様のカルテ）

b'. khoŋ mii khon thăam mŭɯankan wâa chênníi lέεw cà dii rŭɯ
khoŋ いる 人 問う も と このように なって いい か
こんな状態になって本当にいいかどうか聞いた人もいるだろう。

（25）は、一人称の地の文である。本稿の調査では、地の文の「だろう」はタイ語の無形モダリティ形式に訳されることが少なくないことが分かった。（25b）のように、無形モダリティ形式を使用すると、話し手は「それがいいのか」と聞かれたことを事実として表している。それに対して、（25b'）のように「khoŋ(cà)」を使用すれば、話し手は事実として問われたかどうか分からず、断定できないため、ある情報に基づいて推量を表す。（25）のように地の文の「だろう」は推量の根拠を表示しない場合があるため、翻訳者はその命題を事実か推量か確認できず、無形モダリティ形式に訳していると考えられる。

4.3. タイ語の無形モダリティ形式に対応する「はずだ」

「はずだ」に関して、先行研究をまとめると、大きく 3 つの用法が指摘されている。それは、①推論を表す用法、②納得を表す用法、③話し手の推論結果と現実が異なる用法である。

まず、何らかの根拠に基づいて推論する際に使用する、①推論を表す用法（野田 1984、仁田 2000、益岡 2007）に関して、この用法はタイ語の「nâacà」に訳すことができる。次の（26）がその一例である。

（26）状況：警部は関係者の相原と話している。

警部：（i）相原さんは美大生だそうですね。（ii）ならば、わたしよりも美術関係にお詳しいはずだ。

a. 相原さんは美大生だそうですね。ならば、わたしよりも美術関係にお詳しい**はずだ**。
b. khunaihara rian thîi mahăawitthayalay sĭnlapa châymăy khráp
相原さん 勉強 で 大学 美術 疑問語 終
thâa yàaŋnánkɔ̂ɔ **nâacà** rúu rûaŋ sĭnlapa mâak kwàa phŏm
もし そう nâacà 知る こと 美術 たくさん より 僕
相原さんは美大生ですね。そうなら、わたしより美術について詳しいはずだ。
（謎解きはディナーの後で）

（26）では警部は、（26i）のように相原さんが美術大学で勉強していることに基づいて推論し（26ii）「美術関係に詳しい」という結論を表している。美術大学の学生は警察より美術のことに詳しいのは当然のことである。タイ語の「nâacà」は、ある事柄の真偽を確認

はできないが、ある既知の情報を根拠に考えると推理的に「当然そのような結論になる」ということを表す。（ピヤマーワディー1992：267-268）このような場合、日本語の「はずだ」とタイ語の「nâacà」は対応している。

次は、②納得を表す用法についてである。この用法は、その事柄の成立が当然のことであるということをその理由を知ることによって、その場で納得するという用法である。（野田 1984、日本語記述文法研究会編 2003）

（27）状況：麗子は、影山の理由を聞いている。

影山：では、吉本瞳が鍵を掛け忘れたのでしょうか。しかし、お嬢様の話によれば、その可能性を低いと思われます。（i）吉本瞳は『人並み以上に戸締まり気を使う人で、鍵をかけ忘れることなんて絶対ない』。第一発言者の杉村恵理はそう断言しております。

麗子：確かにそうね。（ii）吉本瞳が外出の際に鍵をかけたはずよ。

（ii） a. 確かにそうね。吉本瞳が外出の際に鍵をかけた**はず**よ。

b. ciŋdûay sìná tɔɔn ʔɔ̀ɔk pay khâaŋnɔ̂ɔk yoshimotohitomi **nâacà** lɔ́k hɔ̂ŋ lɛ́ɛw lâ

本当　終　とき　出る　行く　外　吉本瞳　nâacà　かける　部屋　た　終

そうですね。吉本瞳が外出の際に鍵をかけたはずよ。

（謎解きはディナーの後で）

（27）では、麗子が影山の理由を聞いて、「吉本瞳は人並み以上に戸締まりに気を使う人で、鍵をかけ忘れることなんて絶対ない」（27i）という理由が当然だと考え、納得する。このような場合にも両言語は対応している。

最後に、③話し手の推論結果と現実が異なる場合の用法に関して、野田（1984：117）では、「理論的に推論するとこうなって当然だが、現実は違う」という使い方もかなり多いと説明されている。また、日本語記述文法研究会編（2003：161）によれば、「はずだ」の文は「本来はこうである」ということに加えて、「現実はそうではない」ということも意味することがあるという。次の（28）（29）がその一例である。

（28）状況：結婚式が始まって一時間ほど経過したが、花嫁である沢村有里の姿がいつの間にか会場から消えている。不審に思った麗子が、執事の吉田をつかまえて問いただした。吉田は訝しげな表情で答える。

（i）＜結婚式の直前＞

「きゃあぁぁぁぁぁぁー」

いきなりの惨劇に、麗子は咄嗟に顔を背ける。

「有里様あぁ！」冷静であるはずの吉田も、さすがに泡を食った様子で彼女のもとに駆け寄った。「だ、大丈夫でございますか！」

「え、ええ、大丈夫ですわ、吉田さん。」

（中略）

そんなこんなでパーティーがはじまって一時間ほどが経過したころ。麗子はふとおかしなことに気がついた。（ii）本日の主役、花嫁である沢村有里の姿がいつの間にか会場から消えているのだ。不審に思った麗子が執事の吉田をつかまえて問いただしたところ、

「（iii）おや、先ほどまではいらっしゃったはずなのに。」と吉田も訝しげな表情。

「細山様にお尋ねしてみましょうか。」

（iii）a. おや、先ほどまではいらっしゃった**はず**なのに

b. á mûɯakíi kɔ̂ɔ yaŋ yùu ləəynîi khráp

あ 先ほど も まだ いる 終 終

おや、先ほどまだいらっしゃった。

（謎解きはディナーの後で）

b'.* á conthɯŋ mûɯakíi **nâacà** yùu ləəynîi khráp

あ まで 先ほど nâacà いる 終 終

おや、先ほどまではいらっしゃったはずなのに

（29）状況：探偵である淳平は、林原の依頼書を押収したと知って、警察に会いに行った。

＜探偵事務所で＞

淳平：茅野ちゃん。林原の依頼書、見せてくれ。

茅野：無理です。

淳平：何で？そうか。（i）全部警察だ。

＜その後、警察署で＞

警察：（ii）何か分かったんですか？

淳平：（iii）うちから押収したものの中に林原という男の依頼書があったはずです。

（iii）a. うちから押収したものの中に林原という男の依頼書があった**はずです**。

b. bandaa khɔ̌ɔŋ thîi khun yúut càak raw pay mii
の中に もの 関係代名詞 あなた 押収 から 私たち いく ある
sǎnyaacàaŋ caak chaay thîi chûɯ haayaachíbaara
依頼書 から 男 関係代名詞 名前 林原
わたしたちから押収したものの中に林原という男の依頼書があった。
（ラッキーセブン）

b. bandaa khɔ̌ɔŋ thîi khun yúut càak raw pay nâacà
の中に もの 関係代名詞 あなた 押収 から 私たち いく nâacà
mii sǎnyaacàaŋ caak chaay thîi chûɯ haayaachíbaara
ある 依頼書 から 男 関係代名詞 名前 林原
わたしたちから押収したものの中に林原という男の依頼書があったはずです。

（28）では話し手である吉田は、（28i）のように一時間前に花嫁の由里と話したが、麗子に聞かれたときには、（28ii）花嫁である沢村有里の姿がいつの間にか会場から消えていたので、話し手は「（28ii）おや、先ほどまではいらっしゃったはずなのに」と答えている。（29）では、（29i）のように話し手は先日警察に事務所の全てのものを押収されたことを知っており、回収するために警察のところに行ったが、「（29ii）何が分かったんですか」と聞かれ、知らないような素振りをみせられたため、話し手は「（29iii）うちから押収したものの中に林原という男の依頼書があったはずです。」と表している。いずれも、話し手が知っていること（推論結果）と現実が異なる状況である。

話し手の推論結果と現実が異なる状況において日本語では「はずだ」が使用されているが、タイ語では無形モダリティ形式が使用されている。タイ語で「nâacà」を使うと不自然になる理由は、ピヤマーワディー（1992：267-268）でも述べられているように、タイ語では「nâacà」は、話し手が事実性は確認できないが、何らかの情報を根拠にし、そこから推論すると当然そのような結論になるという意味を表す場合にしか使用できないためである。（28）では話し手は（28i）のように一時間前に有里と話した。（29）では（29i）のように

話し手は先日警察に事務所の全てのものを押収されたことを知っているため、「nâacà」を使用すると不自然となるのである。

したがって、例えば

（30）山田さんは、今日、大学に来ている**はずだ**。（作例）

といった例の場合、話し手が今日大学で山田さんを見たり、誰かに山田さんが大学にいることを聞いたりした場合はタイ語に訳す際に「nâacà」を使用すると、不自然となるが、その事実を知らず、単に「山田さんは毎日欠かさず大学に来ているため、今日も大学に来ているはずだ」「山田さんは今日授業があるため、大学に来ているはずだ」など何らかの情報を根拠に推論している場合、タイ語に訳す際に「nâacà」を使用することができる。

（30）a. 状況：話し手は、今日、大学で山田さんを見たが、いつも山田さんと一緒に出る授業が始まると、山田さんがいなくなった。話し手は山田さんが大学に来ているか、聞かれる。

wannii　khunyamada　maa　mahăawítthayalay

今日　山田さん　来る　大学

山田さんは今日大学に来ている。

（30）b. 状況：話し手は山田さんが大学に来るか、友達に聞かれた。話し手は今日はまだ山田さんに会っていなかったが、授業があるため、山田さんが来ると推論する。

wannii　khunyamada　nâacà　maa　mahăawítthayalay

今日　山田さん　nâacà　来る　大学

山田さんは今日大学に来ているはずだ。

また、このような話し手の推論結果と現実の状態が異なる場合の用法の「はずだ」は、対話文でよく使用され、「言う」「教える」など、伝達動詞と一緒によく使われている。具体的な例は（31）（32）に示す。

（31）状況：浅野支店長は貸金の稟議書を早く出してほしいが、半沢はその稟議書はまだ十分に確認していないと思って、出さなかった。浅野支店長は不満の意を示す。

浅野：どうかしましたか？

半沢：その稟議書は、まだ十分に確認しておりません。

江島：遅いんだよ。支店長は朝一でとおっしゃっただろ

半沢：いったん戻していただけませんか。

江島：今、本部の融資部にオンラインで送った。

半沢：では融資部に掛け合います。

浅野：（i）これは、緊急を要する稟議だと言ったはずです。

（i） a. これは緊急を要する謀議だと言った**はずです**。

b. phŏm bɔ̀ɔk lɛ́ɛwŋai wâa rûaŋ níi tôŋ ʔànúmát dùan
僕 言う た と こと この 要 承認 緊急
僕は、このことが緊急に承認する必要があると言った。

（半沢直樹）

（32） 状況：半沢たちは 5 億円の融資を取られてしまった。浅野支店長はその全責任を半沢一人になすりつけようと画策する。浅野支店長の画策を知っていた半沢は怒った。

半沢：（i）「私が全責任を持つ」あの時あなたは確かにそうおっしゃったはずだ。あれは嘘だったんですか？あなたの言葉は信用できません。

（i） a. 「私が全責任を持つ」あの時あなたは確かにそうおっしゃった**はずだ**。

b. phŏm cà ráp phìtchôp tháŋmòt ʔeeŋ phŏm dâyyin khun phût chátcen
僕 未来 持つ 責任 全部 一人 僕 聞こえる あなた 言う 明らか
「私が全責任を持つ」あの時あなたは確かにそうおっしゃった。

（半沢直樹）

（31）（32）は、どちらも話し手が不満や怒りを表している場面で、日本語では「はずだ」を使うと、「言ったのに、なぜ言ったとおりにしない」という意味になる。しかし、タイ語の「nâacà」は、話し手が事実を知らない場合にのみ使用することができる。そのため、（31）（32）の状況において、「nâacà」を使うと、話し手が言ったかどうか知らずに、根拠に基づいて推論するという意味になるため、（31b’）（32b’）のように不自然となる。

（31）b’.* phŏm **nâacà** bɔ̀ɔk lɛ́ɛwŋai wâa rûaŋ níi tôŋ anumát dùan
僕 nâacà 言う た と こと この 要 承認 緊急

僕は、このことが緊急に承認する必要があると言ったはずだ。

(32) b'.* phŏm cà ráp phìtchôp tháŋmòt ʔeeŋ tɔɔnnán khun nâacà phût

僕 未来 持つ 責任 全部 一人 あの時 あなた nâacà 言う

「私が全責任を持つ」あの時あなたはおっしゃったはずだ。

以上の分析から、日本語の「はずだ」は事実を知っている場合も知らない場合も使用できるが、タイ語の「nâacà」は、話し手が事実を知らない場合にのみ使用できることがわかる。

4.4. まとめ

第 4 章ではタイ語の無形モダリティ形式に対応する「かもしれない」「だろう」「はずだ」に関して分析した。それぞれの対応関係と使用条件は、以下の表 11 のようにまとめられる。

表 11 タイ語の無形モダリティ形式に対応する形式の対応関係と使用条件

【4.1】タイ語の無形モダリティ形式に対応する「かもしれない」	**【4.2】タイ語の無形モダリティ形式に対応する「だろう」**	**【4.3】タイ語の無形モダリティ形式に対応する「はずだ」**
a) 対話文 b) 状況：話し手が直接的証拠に基づいて評価する c) 事実を知っている d) 概言を表す副詞と共起できない	a) 対話文 b) 状況：過去の事実を基に、推量する c) 事実を知っている d) 概言を表す副詞と共起できる	a) 対話文 b) 状況：話し手が推論した結果が、現実と異なる c) 事実を知っている d) 確言を表す副詞と共起できない

タイ語の無形モダリティ形式に対応する「かもしれない」「だろう」「はずだ」に関して明らかになったことは、以下の 3 点である。

一つは、タイ語の無形モダリティ形式に対応する「かもしれない」において、本稿の調査では、【4.1】a のように対話文で使用されていることが明らかになった。日本語の「かも

しれない」は、可能性を表す用法から離れた対人的配慮のために話し手の評価を回避する用法を持っているが、タイ語の「?àat(cà)」は、話し手が事実を知らないという状況で、可能性を表す用法としてのみ使用される。そのため、話し手が直接的証拠に基づいて評価する際、タイ語では話し手の評価をそのまま述べる。それに対して、日本語では、対人的配慮用法として使用されている。この場合、可能性を表さないため、概言を表す副詞と共起できない。

次に、タイ語の無形モダリティ形式に対応する「だろう」において、本稿の調査では、小説の対話文で使用することが明らかになった。過去の事実に基づいて、推量している場合、日本語では、推量を表す「だろう」が使用されるが、タイ語では、話し手がその事実を知っているため、無形モダリティ形式が使用され、事実として述べられる。つまり、話し手がある命題についての事実を知っている場合、タイ語では無形モダリティ形式のみ使用されている。

最後に、タイ語の無形モダリティ形式に対応する「はずだ」において、本稿の調査では、対話文でよく使用されていることが明らかになった。日本語の「はずだ」は話し手の推論結果と現実の状態が異なる場合使用されるが、タイ語の「nâacà」は、話し手が事実性を知らない場合にのみ使用される。そのため、話し手が知っている情報が現実と違う場合、タイ語では過去の事実として述べる。それに対して、日本語では自分が知っている事実をそのまま述べるのではなく、「はずだ」を使って推論結果と現実が異なることを表す。この場合、推論用法から離れた用法であるため、確言を表す副詞と共起できない。

以上の観察から、話し手がある命題についての事実を知っている場合に関して、日本語では「かもしれない」「だろう」「はずだ」を使用することができる。「かもしれない」と「はずだ」は基本的な用法から離れた派生的な用法として使用され、「だろう」は過去の事実を基にして推量する用法として使用される。それに対して、タイ語の「?àat(cà)」「khoŋ(cà)」「nâacà」は、ある命題の事実を知らない場合にのみ使用できることが明らかになった。

第 5 章　日本語の無形モダリティ形式に対応するタイ語の形式

第 5 章では、日本語の無形モダリティ形式に対応する「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」、について分析する。本稿では、Rattanapongpinyo（2016）の結果を基にし、より詳しく分析を行う。5.1.～5.3.では、日本語の無形モダリティ形式に対応する「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」のそれぞれについて記す。最後に、5.4 で全体をまとめる。

日本語の無形モダリティ形式に関して、仁田（2000：112）は、事態の成立・存在について、自らの想像・思想や推論の中で確かなものとして捉え、確信として表す際、日本語は無形モダリティを使用すると述べている。

また、日本語の無形モダリティ形式に対応するタイ語の認識的モダリティ形式に関して、Rattanapongpinyo（2016）は、日本の小説からの用例を調査し、小説の中で日本語とタイ語翻訳における推量表現で表す頻度数[8]を調査している。その結果について、タイ語の方が頻繁に推量表現を使うと述べ、それは謎を解いている途中で結論が出ていない場合、タイ語では推量表現が必要となるからだと説明している。それに対して、日本語では話し手が事実を知っているかどうかに関わらず、話し手がある命題を確かなものとして捉える場合、無形モダリティ形式が使用されていると述べている。

本稿では先行研究を踏まえ、タイ語の小説を加え、図 4 の手順で分析する。まず、出現文と使用状況について分析し、それから、話し手が命題の事実を知っているかどうかについても分析する。最後に、話し手が事実を知っているかどうか確認するため、概言を表す副詞などと共起できるかどうか、またどのような副詞と共起するかという観点から検討する。

なお、無形モダリティ形式に対応する用例を分析する前に、まず、「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」、それぞれの形式に関する先行研究の用法をまとめ、教科書や先行研究で挙げられている対応関係に該当する用例を挙げ、次に無形モダリティ形式に対応する用例を取り挙げていく。

[8] 頻度数は、別の言い方で言い換えることを考えず、推量表現が現れた数だけ数えたものである。

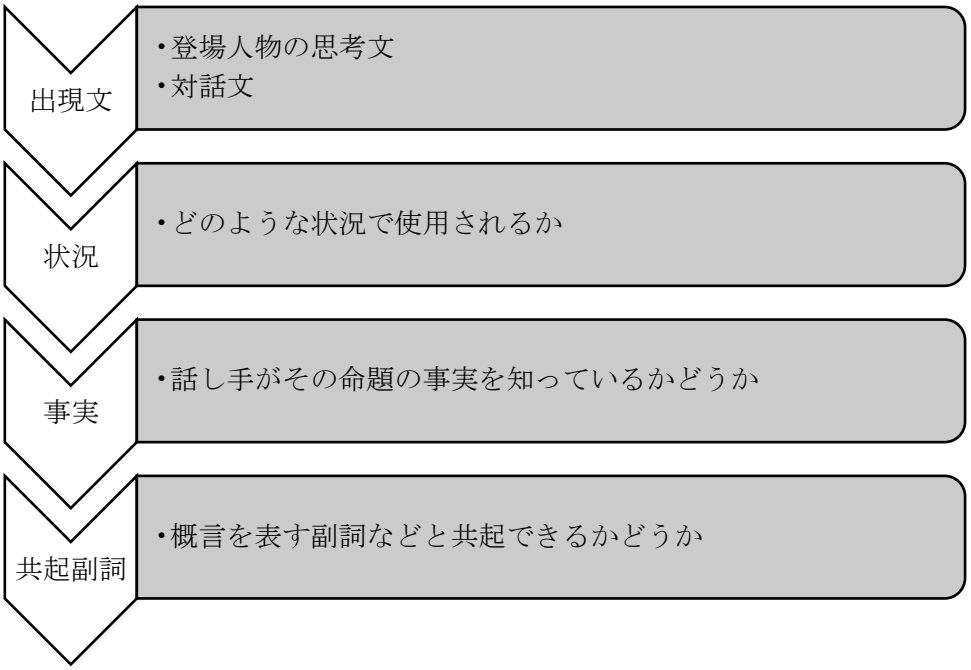

図 4　日本語の無形モダリティ形式に対応するタイ語の形式の分析の手順

5.1. 日本語の無形モダリティ形式に対応する「ʔàat(cà)」

ピヤマーワディー（1992：264）によれば、ある事柄の事実性をはっきりと確認はできないが、弱い確信を持ってそう判断する際に、タイ語では「ʔàat(cà)」というモダリティ形式で表すという。また、Rangkupan（2005）では、「ʔàat(cà)」は Speculative（推測）に分類されており、可能性を表す形式だと述べられている。次の（33）がその一例である。

（33）状況：ファーは、ある女性がタワンの代わりにお金を返しに来たと聞いた。

a.　phûuyǐŋ　khon　nán　ʔàatcà　pen　yâat　tàwan　kɔ̂ɔdây　nîikhá
　　女性　人　その　ʔàatcà　である　親戚　タワン　可能　終助詞
　　その女性はタワンの親戚かもしれません

b.　その人、やっぱりタワンの叔母かもしれません。

（phrácan　sǐ　rúŋ）

（33）の話し手は、友達であるタワンの代わりにお金を返した人が誰かを知らず、断定できないため、叔母だという可能性もあると言う。（33）の「叔母かもしれません」は、「タワンの叔母ではないかもしれない」という矛盾の可能性も含めている。

先行研究（三宅 1995、仁田 2000、益岡 2007、ワンプラディット 2008）によれば、日本語の「かもしれない」は可能性を表す用法を持っているという。以上の先行研究から、(33)のように可能性を表す場合、タイ語の「?àat(cà)」は、日本語の「かもしれない」に対応すると言える。

しかし、第 3 章で述べたように、タイ語の「?àat(cà)」と日本語の「かもしれない」とは対応関係を成していない場合がある。本節では、日本語の無形モダリティ形式に対応する「?àat(cà)」の場合を説明する。日本語の無形モダリティ形式に対応する「?àat(cà)」は、2つの場合に分けられ、①複数の可能性を表す場合、②話し手の対案を表す場合である。

まず、①複数の可能性を表す場合に関して、本稿の調査では、このような複数の可能性を表す「?àat(cà)」は、タイの小説では多く使用されており、登場人物の思考文と対話文で両方とも使用されていることが分かった。（34）（35）に示す。

（34）状況：ナットと友だちは警察に捕まえられ、その後がどうなるか心配している。

（i）この先、警察が僕らをどうするのか、誰にも分からなかった。（ii）バーン・メータに行かされるのか、それとも学校を追い出されるのか、あるいは別のもっと厳しい罰を与えられるのか。

（ii） a. mây mii khray rúu wâa khăw cà tham yâaŋray kàp phûakraw
否定 ある だれ 知る と 彼 未来形 する どう と わたしたち
tɔ̀ɔpay ?àat thùuk sòŋ pay bâanmêettaa thùuk lây?ɔ̀ɔk càak
この先 ?àat られる 送る 行く バーン・メータ られる 退学 から
rooŋrian rŭ̌ɯɯ thùuk loŋ thôotthan thîi runrɛɛŋ ?ɯ̀ɯn?ɯ̀ɯn
学校 あるいは られる 与える 罰 関係代名詞 厳しい 他
この先、わたしたちをどうするのか、誰にも分からなかった。バーン・メータに行かされるのか、それとも学校を追い出されるのか、あるいは別のもっと厳しい罰を与えられるのかもしれない。

b. この先、警察が僕らをどうするのか、誰にも分からなかった。バーン・メータに行かされるのか、それとも学校を追い出されるのか、あるいは別のもっと厳しい罰を与えられるのか。

（weelaa nay khùatkɛ̂ɛw）

a'.* mây mii khray rúu wâa khăw cà tham yâaŋray kàp phûakraw

否定　ある　だれ　知る　と　彼　未来形　する　どう　　と　わたしたち
tɔ̀ɔpay　thùuk　sòŋ　pay　bâanmêettaa　thùuk　lâyʔɔ̀ɔk　càak
この先　られる　送る　行く　バーン・メータ　られる　退学　　から
rooŋrian　rŭ̀ɯ　thùuk　loŋ　thôotthan　thîi　runrɛɛŋ　ʔù̀ɯnʔù̀ɯn
学校　あるいは　られる　与える　罰　　関係代名詞　厳しい　　他
この先、わたしたちをどうするのか、誰にも分からなかった。バーン・メータに行かされるのか、それとも学校を追い出されるのか、あるいは別のもっと厳しい罰を与えられる。

(35) 状況：ポムは、ナットに大学の入学試験に合格できなかったことについて話している。

ポム　：あんたは、試験に合格しなかったほかの人たちが、そのことを他人にどう話すと思う？

ナット：(i) 俺にどうしてわかるんだ？ (ii) がなりたてるか、泣きわめくか、ドアを閉めて閉じこもるか。何日間も飯も食わず、水も飲まずにいるか。あるいは首をくくって自殺してしまうか。

ポム　：それは話すことにはならないわ。それは隠すことよ。

(ii) a. chăn　cà　pay　rúu　dây　yaŋŋay　wá
わたし　未来形　いく　知る　できる　どう　終助詞
man　ʔàat　hɛ̀ɛkpàak　rɔ́ɔŋhòmrɔ́ɔŋhây　rŭ̀ɯ　pìt　pràtuu　hɔ̂ɔŋ
あいつ　ʔàat　呼ばわり　泣きわめく　あるいは　閉める　ドア　部屋
khăŋ　tuaʔeeŋ　ʔòot　khâaw　ʔòot　nám　sàk　săam　wan　cèt　wan
閉じこもる　自分　飢える　ご飯　飢える　水　ぐらい　三　日　七　日
mâykɔ̂ɔ　phùuk　khɔɔ　taay　hây　man　rúulɛ́ɛwrúurɔ̂ɔt　pay
あるいは　くくる　首　死ぬ　あげる　それ　しまう　いく
俺にどうしてわかるんだ？
あいつは、がなり泣きわめくか、ドアを閉めて閉じこもるか、何日間も飯も食わず、水も飲まずにいるか、あるいは首をくくって自殺してしまうかもしれない。

b. 俺にどうしてわかるんだ？がなりたてるか、泣きわめくか、ドアを閉めて閉じこもるか。何日間も飯も食わず、水も飲まずにいるか。あるいは首をくくって自殺してしまうか。

（weelaa nay khùatkêɛw）

a'.* chăn cà pay rúu dây yaŋŋay wá
わたし 未来形 いく 知る できる どう 終助詞
man hὲɛkpàak rɔ́ɔŋhòmrɔ́ɔŋhây rŭɯ pìt pràtuu hôɔŋ
あいつ 呼ばわり 泣きわめく あるいは 閉める ドア 部屋
khăŋ tuaʔeeŋ ʔòot khâaw ʔòot nám sàk săam wan cèt wan
閉じこもる 自分 飢える ご飯 飢える 水 ぐらい 三 日 七 日
mâykɔ̂ɔ phùuk khɔɔ taay hây man rúulɛ́ɛwrúurɔ̂ɔt pay
あるいは くくる 首 死ぬ あげる それ しまう いく
俺にどうしてわかるんだ？
あいつは、がなり泣きわめくか、ドアを閉めて閉じこもるか、何日間も飯も食わず、水も飲まずにいるか、あるいは首をくくって自殺してしまう。

本稿の調査では、(34) (35) のように、日本語の無形モダリティ形式に対応する「ʔàat(cà)」は、「rŭɯ（あるいは／それとも）」とよく共起することがわかった。「A かもしれない、あるいは B かもしれない、あるいは C かもしれない」と言う意味になり、話し手の様々な可能性を表している。

（34）では、話し手は警察に捕まえられて、（34i）のように「警察が僕らをどうするのか、誰にも分からなかった」と考えている。すなわち、話し手が事実について知らない状況である。「バーン・メータに行かされる」「学校を追い出される」「別のもっと厳しい罰を与えられる」という 3 つの可能性があると考えている。（35）の話し手は「試験に合格しなかった人たちが他人にどう話すか」と聞かれているが、話し手もそのことに関して知らないため、（35i）のように「俺にどうしてわかるんだ」と答え、「がなり泣きわめく」「ドアを閉めて閉じこもる」「何日間も飯も食わず、水も飲まずにいる」など試験に合格しなかった人たちがする可能性を表している。いずれも、話し手はあることについて事実を知らず、複数の可能性を表している。

管見の限りでは先行研究では、「ʔàat(cà)」の複数の可能性に関して述べられることは少ないが、Rangkupan（2005：56）では、（36）の例が挙げられている。

（36）a. (a) ฟักเร่งเดินเร็วขึ้น (b) นึกเป็นห่วงนางที่อยู่บ้านคนเดียวในกระต๊อบ (c) เวลานี้จวนมืดแล้ว (d) นางคงหิว
(e) นางอาจจะเดินตามหา (f) นางอาจจะสุ่มไฟไล่ยุงในกระต๊อบแล้วลืมดู

b. (a) Fak hurried along (b) He felt concerned about M'am, who was alone in the hut.
(c) It was getting dark, (d) She [khoŋ] was probably hungry
(e) and [ʔàat] may even have gone out looking for him
(f) Maybe she [ʔàat] had lit a fire in the hut to drive away the mosquitoes and then forgotten about it.

（Rangkupan 2005：56）

Rangkupan （2005：56）によれば、（36）の用例は、「khoŋ(cà)」と「ʔàat(cà)」の違いを示すことができるという。（36b）では、話し手が（c）「It was getting dark」を基に、（d）「She [khoŋ] was probably hungry」と推量している。すなわち、「khoŋ(cà)」は根拠に基づいて推量を表す形式である。一方、（e）「and [ʔàat] may even have gone out looking for him」と（f）「Maybe she [ʔàat] had lit a fire in the hut to drive away the mosquitoes and then forgotten about it.」で示すように、話し手が一つ以上の可能性を表す場合、タイ語では「ʔàat(cà)」を使用すると指摘した。[9] すなわち、タイ語の「ʔàat(cà)」は一つのまとまりに複数回使用することができると言える。

一方、日本語では話し手にとって不確かなことのことについて表す際、（34b）（35b）のように「か」をつけている。半藤（2003：64）によれば、文末「か」は様々な意味を持っており、その中で「迷い」という意味を持っているという。それは、どちらも「〜と思う（思った）」の内部に納まるので、聞き手の存在は不要だと説明している。（34）の話し手は、（34i）のように「警察が僕らをどうするのか、誰にも分からなかった」と考えており、（35）の話し手は（35i）のように「俺にどうしてわかるんだ」と表している。つまり、話し手が事実について分からず、迷っている状況である。そのため、日本語では「迷い」という意味を持っている「か」が使用されている。

このように、話し手が迷い、複数の可能性を表す場合、タイ語では「ʔàat(cà)」を使用し、複数の可能性を表している。それに対して、日本語では「迷い」という意味を持っている「か」が使用されている。

[9] 原文では「In the next two cluases, (e) and (f), M'am's possible actions of goimg out in (e) and lighting a fire in (f) are speculated as likely to have happened. They are just some among many other possible actions.」と述べている。（Rangkupan 2005：56）

次に、②話し手の対案を表す場合に関して述べる。本稿の調査では、このような話し手の対案を表す「ʔàat(cà)」は、対話文で使用されていることが分かった。次の（37）（38）（39）がその一例である。

（37）状況：タワンはバイトを休むことができなくて大学の行事を辞退するつもりだが、ファーは否定している。

ファー：辞退？どうして？

タワン：（i）大学の行事に参加する時間がないんだ。仕事を休めなくて。

ファー：（ii）辞退なんて言わないで。私が、オーンさんに頼んでみるわ。（iii）私から話せば、きっと休ませてくれるわよ。

（iii） a. baaŋthii náa ʔɔɔn **ʔàatcà** yɔɔm faŋ fáa yɔɔm hây
たぶん 叔母 オーン ʔàatcà くれる 聞く ファー くれる あげる
tàwan laa ŋaan kɔ̂ɔdây
タワン 休む 仕事 可能
オーンさんは私の話を聞いてくれて、タワンに休ませてくれるかもしれない。

b. 私から話せば、きっと休ませてくれるわよ。
(phrácan sĭ rúŋ)

a'.* baaŋthii náa ʔɔɔn yɔɔm faŋ fáa yɔɔm hây
たぶん 叔母 オーン くれる 聞く ファー くれる あげる
tàwan laa ŋaan kɔ̂ɔdây
タワン 休む 仕事 可能。

（38）状況：オーンは、タワンの友達のファーに注意している。

オーン：（i）あんな子とは、もう友だちをやめなさい。

ファー：（ii）それはできません。タワンに迷惑をかけられたことはありません。人をだまして、利用するような人じゃありません。つきまとったりもされていません。

オーン：それこそ、だまされている証拠よ。（iii）これ以上、タワンの言葉をうのみにしたら、今日来た女のように貢ぐはめになるわよ。

(iii) a. thâa nŭu yaŋ lŏŋchûa lompàak man yùu lákɔ̂ɔ
もし 君 まだ うのみ 言葉 あいつ ている たら
nŭu ʔàatcà sĭathâa sĭaŋən mŭan kàp phûuyĭŋ thîi
君 ʔàatcà 騙される お金かかる よう に 女性 関係代名詞
ʔaw ŋən maa khɯɯn thɛɛn man wanníi kɔ̂ɔdây nákhá
持つ お金 来る 返す 代わり あいつ 今日 可能 終助詞
もしファーちゃんはまだあいつの言葉をうのみにしたら、今日あいつの代わりにお金を返しに来た女のように貢ぐはめになるかもしれないよ。

b. これ以上、タワンの言葉をうのみにしたら、今日来た女のように貢ぐはめになるわよ。

(phrácan sĭ rúŋ)

a'.* thâa nŭu yaŋ lŏŋchûa lompàak man yùu lákɔ̂ɔ
もし 君 まだ うのみ 言葉 あいつ ている たら
nŭu sĭathâa sĭaŋən mŭan kàp phûuyĭŋ thîi
君 騙される お金かかる よう に 女性 関係代名詞
ʔaw ŋən maa khɯɯn thɛɛn man wanníi kɔ̂ɔdây nákhá
持つ お金 来る 返す 代わり あいつ 今日 可能 終助詞
もしファーちゃんはまだあいつの言葉をうのみにしたら、今日あいつの代わりにお金を返しに来た女のように貢ぐはめになる。

(39) 状況：ナットは友達であるジョムに、離婚した父親のことを相談している。

「ナット、またお父さんに会いに来てね」ピーウェーウは顔を上げて僕を見た。明かりが、その目にきらりと光る涙を照らした。「ある人間は子供を愛するわ。でも、ある人間は子供を必要としているのよ。ナットのお父さんは、あとのタイプよ」

「これが、僕が父さんにあった最後のときのことだ」僕はジョムに話して聞かせたあとで、小さな声で言った。

「(i) あなたはお父さんにたびたび会いに行くべきね」ジョムが言った。「(ii) お父さんは、きっと本当にあなたを必要としているのよ。」

「もしジョムだったら」僕は恨みっぽい声で尋ねた。「(iii) もし誰かが自分を必要としていると言って、それなのに誰か他の人と一緒にいるとしたら、どんな気がする？」

(iii) a. naay nâacà pay hăa phôɔ bɔ̀ɔybɔ̀ɔy
あなた べきだ 行く 会う 父 たびたび
phôɔ ʔàat tôŋkaan naay ciŋciŋ kôɔdây
父 ʔàat 欲しい あなた 本当 可能
あなたは、あなたはお父さんにたびたび会いに行くべきね。お父さんは、本当にあなたを必要としているかもしれないよ。

b. あなたはお父さんにたびたび会いに行くべきね。お父さんは、きっと本当にあなたを必要としているのよ
(weelaa nay khùatkêɛw)

a'.* naay nâacà pay hăa phôɔ bɔ̀ɔybɔ̀ɔy
あなた べきだ 行く 会う 父 たびたび
phôɔ tôŋkaan naay ciŋciŋ kôɔdây
父 欲しい あなた 本当 可能
あなたは、あなたはお父さんにたびたび会いに行くべきね。お父さんは、本当にあなたを必要としているよ。

(37) では、聞き手は (37i) のように大学の行事への参加を辞めるつもりだが、話し手は「辞退なんて言わないで」(37ii) と反対し、(37iii)「私から話せば、きっと休ませてくれるわよ」という対案を表している。(38) では、話し手はファーに (38i)「あんな子とは、もう友だちをやめなさい」と注意したが、聞き手のファーは「それはできません」と反対意見を表した。そのため、話し手は (38iii)「これ以上、タワンの言葉をうのみにしたら、今日来た女のように貢ぐはめになるわよ」という対案を表している。(39) は、(37) (38) のように話し手と聞き手の間に反対意見を直接を表していないが、ナットの (39iii)「もし誰かが自分を必要としていると言って、それなのに誰か他の人と一緒にいるとしたら、どんな気がする？」から、ナットが父親に会いたくないと考えられる。話し手は、(39i)

「あなたはお父さんにたびたび会いに行くべきね」という反対意見を表し、（39ii）「お父さんは、きっと本当にあなたを必要としているのよ。」と対案している。いずれも、話し手は聞き手の意見を反対し、自分の意見を聞き手に対案している。

話し手の対案は、（37iii）（38iii）のように未来のことであり、（39ii）は他人の気持である、これらは、話し手が知りえないことであるため、タイ語では認識的モダリティ形式が必要だと考えられる。なぜならば、タイ語では、話し手が知らないことについて述べる際、モダリティ形式（助動詞）か副詞が必要だからである。Phatranawig（1972：127－128）によれば､タイ語の推量を表すマーラー(ムード)の語順に関して 4 つに分けられるという。①助動詞（khoŋ／ʔàat）＋動詞、②助動詞（khoŋ／ʔàat）＋助動詞＋動詞、③助動詞（thâacà／duumŭan）＋助動詞＋動詞、④動詞＋副詞(máŋ)である。

その認識的モダリティ形式の中で、なぜ対案を表す場合、「ʔàat(cà)」が使用されているのか、管見の限りでは先行研究ではあまり述べられていない。Vatcharasuwan（2004：95）は、タイ語で反論を表す時に、「ʔàat(cà)」を使用する場合があることを指摘し、主張をやわらげる効果があると述べている。（37）（38）（39）では、話し手は聞き手の意見に対し反対し、対案を表しているため、「ʔàat(cà)」が使用されると考えられる。

しかし、「ʔàat(cà)」を使用せず、（37a’）（38a’）（39a’）のように無形モダリティ形式で表すと、話し手が「きっと休ませてくれる」「これからファーは貢ぐはめになる」「父親がナットに会いたい」など知ったうえで､事実を述べるという意味になる｡従って､(37a’)（38a’）（39a’）はこの状況においては、不自然になる。

一方、日本語では、（37b）（38b）（39b）のように終助詞「よ」と共起している。中田（2009：30－31）は、「よ」文からは話し手が直接目撃したり、直接経験したり事態であるという直観的な印象をうけることがある。未来事態を表す場合、話し手が直接体験することは不可能だが、「よ」文の方が「ね」文より事態や根拠に基づいた主張に感じられる。また、終助詞を付けない発話と比較すると、「よ」文の方が柔らかい主張にとることも可能であると述べている。すなわち、「ʔàat(cà)」に似た効果があると考えられる。

以上の分析から、話し手が対案を表す場合は、タイ語では「ʔàat(cà)」が使用され、話し手の主張をやわらげる。「ʔàat(cà)」を入れなければ、判断の意味がなくなり、事実を述べる文になる。それに対して、日本語では無形モダリティ形式が使用されるが、「よ」の終助詞と共起し、話し手の柔らかい主張を表す。

5.2. 日本語の無形モダリティ形式に対応する「khoŋ(cà)」

「khoŋ(cà)」に関して、ピヤマーワディー（1992：165－168）は「推量」と呼び、ある事柄の真実を確認することはできないが、自分の経験による手持ちの情報や既知の情報を根拠とし、それに基づいて考えた結果、その事柄が真である可能性があると判断する場合に使用すると説明する。また、Rangupan（2005：62）によれば、演繹で主観的に推し量りを表すものだという。そして、Kiatkobchai（2011：61）では、「khoŋ(cà)」は話し手の直接的経験領域にない知識について、思考、想像、仮定という不確かな知識によって判断を下す用法であると捉える。つまり、「khoŋ(cà)」は話し手の知識に基づいて主観的に推量を表す形式である。次の（40）がその一例である。

（40）状況：話し手が虹に会った場合について想像している。

彼女が虹を捕まえるという考えをやめたあとに、(i) 虹は彼女との友情をますます強めました。ときには、水を吸ってお腹が膨らんだあと、虹はにっこりしながら空の上で仰向けに寝転がりしました。王女はそこで、もし近くに行けたら虹にお願いしようと考えました。(ii) 虹はきっと同情して、喜んで自分の体にスプレーを吹きかけ、八色に変身してくれるだろうと。

(ii) a. khăw khoŋ hěncay lέ yindii phôn sàpree tuaʔeeŋ hây mii pὲεt sǐi
彼 khoŋ 同情 と 喜ぶ 吹き スプレー 自分 あげる ある 八 色
彼（虹）は同情して、喜んで自分の体にスプレーを吹きかけ、八色に変身してくれるだろう。

b. 虹はきっと同情して、喜んで自分の体にスプレーを吹きかけ、
八色に変身してくれるだろう。
（sǐi thîi pὲεt khɔ̌ɔŋ rúŋkinnám）

（40） では、話し手が虹に出会った場合について想像している。話し手は（40i）のように「最近、虹は話し手との友情をますます強めた」という思考を基に、自分の理由を説明し、（40ii）のように「虹はきっと同情して、喜んで自分の体にスプレーを吹きかけ、八色に変身してくれる」と推量している。

日本語の「だろう」は、話し手の想像の中のものであり、経験や既知の情報など何らかの情報に基づいて不確かなものとして捉える形式である。（三宅 1995、森山・安達 1996、

仁田 2000、日本語記述文法研究会編 2003）以上の先行研究から、推量を表す場合、タイ語の「khoŋ(cà)」は、日本語の「だろう」に対応していると言える。

しかし、第 3 章で述べたように、タイ語の「khoŋ(cà)」と日本語の「だろう」が対応関係を成していない場合がある。本節では、日本語の無形モダリティ形式に対応する「khoŋ(cà)」の場合を説明する。日本語の無形モダリティ形式に対応する「khoŋ(cà)」は、2 つの場合に分けられ、①確信を表す場合、②確定に近い予定を表す場合である。

まず、①確信を表す場合に関して、本稿の調査では、このような確信を表す「khoŋ(cà)」が対話文で使用されていることが分かった。（41）（42）のようである。

（41）状況：クビになったドアボーイが、町長と話している。

町長　　：一人で飲んでもつまらんだろう。悩みごとでもあるのか？
　　また、仕事の悩みか。二、三日寝てればよくなるさ。
ドアボーイ：（i）絶対、それ以上寝てることになる。（ii）今日首になったんだから。

（i） a. khoŋ　dây　nɔɔn　naan　kwàa　nán　nɛ̂ɛ
　　khoŋ　できる　寝る　長い　より　それ　きっと
　　phǒm　thùuk　lây?ɔ̀ɔk　wannníi
　　僕　られる　首になる　今日
　　きっとそれ以上寝られるだろう。今日首になったんだから。
b. 絶対、それ以上寝てることになる。今日首になったんだから。
　　（rûaŋ　khɔ̌ɔŋ　phrá　dèk　sŭa　kày　mɔ̂ɔt）
c. dây　nɔɔn　naan　kwàa　nán　nɛ̂ɛ
　　できる　寝る　長い　より　それ　きっと
　　きっとそれ以上寝られる。
d.* dây　nɔɔn　naan　kwàa　nán
　　できる　寝る　長い　より　それ
　　それ以上寝られる。

（42）状況：クーンは父親と話している。

(i) 犬のネズとアカが、がさがさと走って来たかと思うと、わんわん吠えたため、その鳩はあっという間に飛び去ってしまった。父親は何も言わず、弩の弦を引きがねからはずすと、ため息をついた。クーンは「(ii) これじゃとても鳥は撃てない、先にネズとアカを繋いでた方がいい」と言った。

(ii) a. thâa yâaŋníi khoŋ mây dây yiŋ nók nêɛnêɛ
もし このよう khoŋ 否定 できる 撃つ 鳥 きっと
これなら、きっと鳥は撃てないだろう。

b. これじゃとても鳥は撃てない。

(lûuk iisǎan)

c. thâa yâaŋníi mây dây yiŋ nók nêɛnêɛ
もし このよう 否定 できる 撃つ 鳥 きっと
これなら、きっと鳥は撃てない。

d.* thâa yâaŋníi mây dây yiŋ nók
もし このよう 否定 できる 撃つ 鳥
これなら、鳥は撃てない。

(41i) (42ii) は、未来のことであり、話し手が知りえないことである。(41) では、話し手は (41i) のように「今日首になったんだから」という根拠を基に (41ii) 「二、三日以上寝られる」と推量している。(42) の話し手は、(42i) のように犬が吠えて鳩があっという間に飛び去ったことを根拠とし、(42ii) 「鳥は撃てない」と推量している。いずれも、話し手が知りえないことについて、話し手が自分の何らかの根拠に基づいて推量している。この状況において、タイ語では「khoŋ(cà)」が使用されている。

5.1 で述べたように、話し手が知りえないことについてタイ語では推量を表す際、認識的モダリティ形式が必要である。さらに、(41a) (42a) を見ると、話し手は「nêɛ (きっと)」という副詞が使用され、確からしさを表している。Phatranawig (1972 : 170－183) によれば、タイ語の確からしさを表すマーラー(ムード)の語順には 3 つに分けることができ、①動詞＋副詞、②助動詞＋動詞＋副詞、③助動詞＋助動詞＋動詞＋副詞であるという。つまり、タイ語では確信を表す際、日本語のように無形式で表すことができず、助動詞と副詞が必要である。そのため、以上の状況において、(41d) (42d) のように認識的モダリテ

ィ形式や副詞がなければ、判断の意味が表せず、話し手が単に事実を述べていることになるため不自然になる。

一方、これらの状況において、日本語では断定型が使用できる。この理由は、仁田（2000：94）でも述べられているように、判定のモダリティの中に、概言の推量と対立する「確信」という形式があるためである。仁田は、「確信」とは、事態の成立・存在を、自らの想像・思想や推論の中で確かなものとして捉えたものであると説明しており、推量表現を表さない、無形モダリティ形式である。（41a）（42a）を見ると、話し手は「nêɛ（きっと）」という副詞を使用し、確信を表している。そのため、日本語では確信を表す無形モダリティ形式が使用されている。

この場合、話し手が知らないことについて確信を持って推量しているため、「きっと」など概言を表す副詞と共起できる。

（41）e.　きっと、それ以上寝てることになる。今日首になったんだから。

（42）e.　これじゃ、きっと鳥は撃てない。

以上の分析から、確信を表す場合、日本語ではモダリティ形式を使わなくても判断の意味を表すことができるが、タイ語では「khoŋ(cà)」を入れないと判断の意味が表せず、単に事実を述べる文となる。

次に、②確定に近い予定を表す場合に関して、本稿の調査では、このような確定に近い予定を表す「khoŋ(cà)」が、対話文で使用されていることが分かった。（43）（44）に示す。

（43）状況：母親が時間通り家に帰らなかったため、ナットは母親に電話した。

ナット：母さん、ナットだ。

母親　：（i）ナット、母さんは今夜家に帰れないわ。二人で何をしているの？なぜまだ寝てないの？明日の朝、学校に遅れるわよ。

ナット：母さん、母さんはどこにいるの？

母親　：母さんは、アモンさんの家にいるの。（ii）心配しなくていいわ。

（i）a.　nát　mêɛ　khoŋ　mây　klàp　bâan　ná　khɯɯnníi

ナット　母　khoŋ　否定　帰る　家　終助詞　今夜

ナット、母さんは今夜家に帰れないだろうよ。

b. ナット、母さんは今夜家に帰れないわ

（weelaa nay khùatkêɛw）

b'.* ナット、母さんは今夜家に帰れないだろう。

（44）状況：秘書が社長と話している。

社長：ありがとう。あとは、アピチャートに任せます。では、僕は失礼します。

秘書：社長、（i）しっかり選んできてくださいね。（ii）それだけは、わたしもお手伝いできませんから、こちらの手配はしておきます。

（ii） a. rûaŋ nán nîa phǒm khoŋ càtkaan thɛɛn mây dây

こと あの は 僕 khoŋ 手配 代わり 否定 できる

sùan rûaŋ níi dǐaw phǒm càtkaan ʔeeŋ khráp

ほう こと この しばらく 僕 手配 自分 終助詞

それは僕が社長の代わりに手配できないから、こちらの手配はしておきます。

b. それだけは、わたしもお手伝いできませんから、こちらの手配はしておきます。

（thəə khɯɯ phrǒmlíkhìt）

b'.* 社長、しっかり選んできてくださいね。それだけは、わたしもお手伝いできないでしょうから、こちらの手配はしておきます。

（43）（44）のように、「khoŋ(cà)」の主語は話し手であり、話し手は自分の行動について話している。

Kiatkobchai（2011：62）は、「khoŋ(cà)」を用いることによって判断や主張が控えめになるため、一人称主体の場合は、自分の意図ではなく、何らかの状況によって断らざるをえないというニュアンスが生まれ、「婉曲的な断り」という控えめな断り方としても使われていると説明している。（43）では、母親は、何らかの状況によってアモンの家に泊まり、今夜家に帰れなくなった。（44）では、秘書はあることについて社長を手伝えないと断っているため、Kiatkobchai（2011）の「婉曲的な断り」で説明できると考えられる。しかし、日本語文法学会編（2014：60）によれば、「婉曲」とは直接的な述べ方を避けて述べたものを婉曲表現という。（43）の母親と息子の関係に対しては、判断や主張を控えめにする必

要や、直接的な述べ方を避ける必要がないと考えられる。そのため、本稿では、（43）（44）のような「khoŋ(cà)」を再分析する。

（43）（44）を分析すると、話し手は（43i）（44ii）のように、「母さんは今夜家に帰れないわ」「わたしもお手伝いできません」と自分の行動を否定し、その前後には（43i）「心配しなくていいわ」や、（44ii）「しっかり選んできてくださいね」など、話し手が相手への行為要求を表している。つまり、話し手はある行動について自分ができないという確信を持っているため、否定を表し、その代わりに聞き手に対して依頼を表している。（43）では、母親が今夜帰れないという確率が高いため、ナットたちに「心配せず、早く寝てください。」という行為を要求している。また、（44）の話し手は（恋愛に関して）手伝えないと思っているため、社長に「（仕事するか、恋人に会いに行くか）しっかり選んできてくださいね。」という行為を要求している。

一方、日本語に関して、日本語記述文法研究会編（2003：148）によれば、話し手の記憶の中にある事柄や話し手自身の行動予定に「だろう」を用いることは自然ではないという。（43）（44）は確定に近い予定を表しているため、「だろう」を使用すると、（43b’）（44b’）不自然になる。この状況において、日本語では無形モダリティ形式が使用されている。

以上のように、確定に近い予定を表す場合、タイ語では、「khoŋ(cà)」が使用されている。「khoŋ(cà)」がなければ、判断の意味が表せず、事実を述べる文になる。一方、日本語では無形モダリティ形式で話し手自身の行動予定を表すことができる。

5.3. 日本語の無形モダリティ形式に対応する「nâacà」

日本語の無形モダリティ形式に対応する「nâacà」に関して、本稿の調査はRattanapongpinyo（2016）の結果と異なり、日本語の無形モダリティ形式に対応する「nâacà」は、5.1 の「ʔàat(cà)」と 5.2 の「khoŋ(cà)」に比べると、出現数が少ないという結果になった。それは、調査対象とした小説・ドラマの種類の違いが要因の一つだと考えられる。Rattanapongpinyo（2016）では日本の推理小説・ドラマを調査したため、推論を表す「nâacà」の出現数が高いが、本稿では恋愛・社会に関するタイの小説・ドラマを調査したため、「nâacà」の出現数が少ないと考えられる。

タイ語の「nâacà」に関して、ピヤマーワディー（1992：267-268）によれば、ある事柄の真偽を確認はできないが、ある既知の情報を根拠として考えると推理的に「当然そのような結論になる」という場合に使用される。田中（1996：230）では、ある前提条件、経緯、情報など

に基づき、帰結される必然性が極めて高いということを認める判断を表す形式であると述べられている。例えば（45）のようである。

（45）状況：話し手は友だちに学生時代一緒に読んだ本について聞かれているが、話し手はその本を他の人に渡した。

クリッシュナムルティ師の本は、いまでは私の手元には一冊も残っていなかった。それらの本はずっと以前、人生に疲れ果てたあげく、元気をもらうためにわたしを訪ねてきた人間に残らずあげてしまっていた。（i）そのことは彼だって知っているはずだ。

（i） a. khăw **nâacà** rúu dii
彼 nâacà 知る よく
彼は知っているはずだ。
b. そのことは彼だって知っている**はずだ**。
（sĭaŋ rîak càak phûan kàw）

（45）では、話し手は、以前訪ねてきた人に本を残らずあげてしまっていたことを基にして、友だちである聞き手なら知っていると推論している。この場合、タイ語では、「nâacà」が使用され、日本語では「はずだ」が使用されている。

それに対して、第3章で述べたように、タイ語の「nâacà」と日本語の「はずだ」とが対応関係を成していない場合がある。本節では、日本語の無形モダリティ形式に対応する「nâacà」の場合を説明する。

本稿の調査では、日本語の無形モダリティ形式に対応する「nâacà」の用例は、多くないが、全ての用例は対話文で使用されていた。次の（46）がその一例である。

（46）状況：村長の奥さんはチャンディーの行動を見て、話す。

そのうち、村長の奥さんが娘一人と出てきて座った。（i）チャンディーはその娘を目ばたきもしないで見とれていた。（中略）

「お腹空いているでしょう？チビ金ちゃん。」村長の娘はチャンディーにきくと、美しくほほえんだ。

「空いていない。」と（ii）チャンディーは大声を出した。「おれ、腹は一杯だ。」

村長さんの奥さんはチャンディーを手でさしながら「（iii）この子は大きくなったら、大した色男になるよ」

（iii） a. bàk nîi yày khûn nâacà châuchúu ʔawkaan
人 この 大きい なる nâacà 色男 けっこう
この子は大きくなったら、大した色男になるよ。

b. この子は大きくなったら、大した色男になるよ。

（lûuk iisăan）

a'.* bàk nîi yày khûn châuchúu ʔawkaan
人 この 大きい なる 色男 けっこう

（46）の話し手は、（46i）のように娘を目ばたきもしないで見とれていたチャンディーの様子や、（46ii）のように娘の質問に対して大声で答えたことを根拠とし、（46iii）「大きくなったら、色男になる」と推論している。すなわち、話し手はチャンディの未来を知りえないが、チャンディーの様子に基づいて推論をしている。

5.2.で述べたように、タイ語では話し手が知りえない情報に関して確信を表す場合、助動詞と副詞が必要である。（46）の状況においても同じように、話し手が知りえない情報について推論する場合には「nâacà」が必要である。タイ語ではモダリティ形式がないと、判断の意味が表せなくなり、事実を述べる文になる。このように、話し手が相手の未来を知りえないため、（46a'）のように断定形で表すと、不自然になる。

それに対して、日本語では、5.2 で述べたように「確信」を表す場合は、（46b）のように無形モダリティ形式で表すことができる。この場合、話し手が確信を持って推論しているため、確言を表す副詞と共起することができる。

以上のように、話し手が知りえないことについて推論を表す場合、日本語は無形モダリティ形式で判断の意味を表すことができるが、タイ語では「nâacà」がなければ、判断の意味が表せず、事実を述べる文になる。

5.4. まとめ

第 5 章では日本語の無形モダリティ形式に対応する「ʔàat(cà)」「khoŋ(cà)」「nâacà」に関して分析した。それぞれの対応関係と使用条件は、以下の表 12 のようにまとめられる。

表 12　日本語の無形モダリティ形式に対応する形式の対応関係と使用条件

【5.1】 日本語の 無形モダリティ形式に 対応する「ʔàat(cà)」	【5.2】 日本語の 無形モダリティ形式に 対応する「khoŋ(cà)」	【5.3】 日本語の 無形モダリティ形式に 対応する「nâacà」
① a) 登場人物の思考文・対話文 b) 状況：(複数の) 迷いを表す c) 事実を知らない d) 共起副詞：概言を表す副詞（終助詞「か」と共起する） ② a) 対話文 b) 状況：知り得ないことについて対案を表す c) 事実を知らない d) 共起副詞：概言を表す副詞（終助詞「よ」と共起する）	① a) 対話文 b) 状況：知り得ないことについて確信を持ち、推量する c) 事実を知らない d) 共起副詞：確言を表す副詞 ② a) 対話文 b) 状況：話し手が確定に近い予定を表す c) 事実を知らない d) 共起副詞：概言を表す副詞	a) 対話文 b) 状況：知り得ないことについて自信を持ち、推論する c) 事実を知らない d) 共起副詞：概言を表す副詞

日本語の無形モダリティ形式に対応する「ʔàat(cà)」「khoŋ(cà)」「nâacà」に関して明らかになったことは、以下の 3 点である。

一つは、日本語の無形モダリティ形式に対応する「ʔàat(cà)」について、本稿の調査では、①複数の可能性を表す場合、②話し手の対案を表す場合という 2 つの場合に分けられた。まず、話し手が迷っており、①複数の可能性を表す場合、タイの小説では「ʔàat(cà)」がよく使用され、登場人物の思考文と対話文の両方で使用されていることが分かった。タイ語では「ʔàat(cà)」を繰り返し使用し、話し手が迷っている複数の可能性を表している。それに対して、日本語では「迷い」という意味を持つ「か」が使用されている。次に、②話し手の知らないことについて対案を表す場合に関して、本稿の調査では対話文で使用されて

いることが分かった。話し手が対案を表す場合、タイ語では「ʔàat(cà)」を使用して、話し手の主張をやらげる。「ʔàat(cà)」がなければ、判断の意味を表せず、事実を述べる文になる。それに対して、日本語では無形モダリティ形式が使用されるが、「よ」と共起し、話し手の柔らかい主張を表す。つまり、話し手が事実を知らないことについて、迷いの考えや対案を表す場合、タイ語では「ʔàat(cà)」が必要である。一方、日本語では、認識的モダリティを使用せず、無形モダリティ形式に「か」「よ」を付加し、話し手の考えや主張を表す。

二つ目は、日本語の無形モダリティ形式に対応する「khoŋ(cà)」について、本稿の調査では、①確信を表す場合、②確定に近い予定を表す場合の 2 つに分けられる。まず、①確信を表す場合に関して、本稿の調査では対話文で使用されていることが分かった。話し手が確信を表す場合、タイ語では「khoŋ(cà)」と副詞が必要であり、「khoŋ(cà)」や副詞がなければ、判断の意味が表せず、単に事実を述べる文となる。それに対して、日本語ではモダリティ形式を使わなくても、判断の意味を表すことができる。この場合、確信を表すために、「きっと」など、確言を表す副詞と共起することができる。次に、②確定に近い予定を表す場合の「khoŋ(cà)」は対話文で使用されている。確定に近い予定を表す場合、タイ語では、「khoŋ(cà)」が使用されているが、日本語では無形モダリティ形式で話し手自身の行動予定を表すことができる。つまり、話し手が事実を知らないことについて、確信や確定に近い予定を表す場合、タイ語では「khoŋ(cà)」が必要である。一方、日本語では、日本語ではモダリティ形式を使わなくても、判断の意味を表すことができる。

三つ目は、日本語の無形モダリティ形式に対応する「nâacà」について、本稿の調査では対話文で使用されていることが分かった。話し手が知りえないことについて確信を持ち推論を表す場合、日本語は無形モダリティ形式で判断の意味を表すことができるが、タイ語では「nâacà」がなければ、判断の意味が表せず、事実を述べる文になる。

以上の分析から、話し手がある命題についての事実を知らない場合に関して、日本語は無形モダリティ形式で判断の意味を表すことができるが、タイ語では認識的モダリティ形式がなければ、判断の意味がなくなり、事実を述べる文になることが分かる。このように、無形モダリティ形式で断定の意味を表すのは日本語の特徴だと考えられる。

第 6 章　「かもしれない」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式

第 6 章では、日本語の「かもしれない」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式について分析する。第 3 章の調査の結果では、日本語の「かもしれない」はタイ語の「ʔàat(cà)」と「khoŋ(cà)」に対応していることが分かった。したがって、まず 6.1 で「かもしれない」に対応する「ʔàat(cà)」について教科書や先行研究の説明より詳しく再分析し、次の 6.2 では、先行研究で扱われていない「かもしれない」に対応する「khoŋ(cà)」について分析する。最後に、6.3 で全体をまとめ、タイ語を対照することによって「かもしれない」の機能をまとめる。

「かもしれない」に関する先行研究をまとめると、大きく 4 つの用法を持っている。それは、①可能性を表す用法（三宅 1995、仁田 2000、ワンプラディット 2008）、②低程度推量用法（野田 1984、平田 2001、山岡 2016）、③前置き用法（野田 1984、平田 2001、ワンプラディット 2008、國澤 2013、山岡 2016）、④対人的配慮用法（ワンプラディット 2008、山岡 2016）である。

本稿では先行研究を踏まえて、6.1 と 6.2 を図 5 の手順で分析する。まず、出現文と使用状況について分析し、それから、話し手がある命題に対してどのような可能性を表しているかという観点から検討する。先行研究から見ると、可能性は 3 つに分けられている。まず、話し手がある命題の事実を知らないため断定できず、可能性を表す場合を「単なる可能性」と呼ぶ。次に、ある命題の事実を知らないが、低程度の推量を表し、話し手の予想を表す場合を「予想の可能性」と呼ぶ。最後に、ある命題の事実を知っているが、その命題について婉曲的に示すために丁寧な表現で表す場合を「相反する可能性」と呼ぶ。[10]さらに、可能性を表しているかどうか確認するために、「もしかしたら」「もしかしすると」「ひょっとしたら」「ひょっとすると」など概言を表す副詞と共起できるかどうかという観点から検討する。

[10] 「単なる可能性」「予想の可能性」「相反する可能性」の呼び方に関しては、筆者が中田一志先生に相談し、意見をいただいたものである。

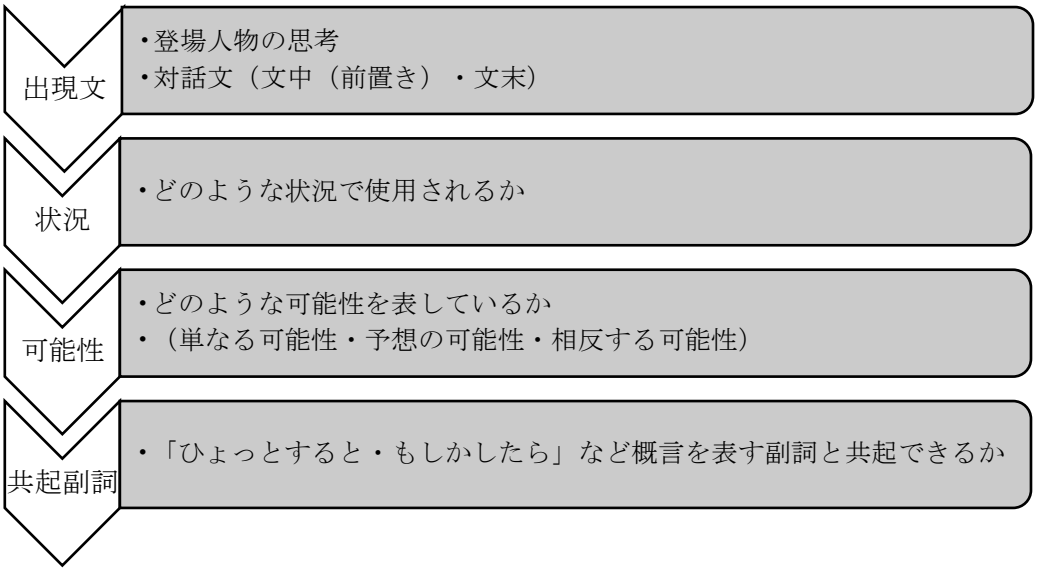

図 5　「かもしれない」に対応するタイ語の形式の分析の手順

6.1. 「かもしれない」に対応する「ʔàat(cà)」

「かもしれない」と「ʔàat(cà)」の関係は、教科書や先行研究でよく挙げられている対応関係である。

基本的な可能性を表す用法に関して、仁田（2000 : 132-133）によれば、「かもしれない」は可能性の把握を表す用法であるとされている。ワンプラディット（2008 : 200）は、「かも」には「可能性」を表す用法があり、P の可能性と¬P の可能性という両極の可能性が共存していると説明する。一方、タイ語の「ʔàat(cà)」に関して、田中（1996 : 222）と Rangkupan（2005 : 62）は、タイ語の「ʔàatcà」は可能性を表す形式だと述べている。

以上の先行研究から日本語の「かもしれない」はタイ語の「ʔàat(cà)」に対応すると考えられる。

本研究の調査では、「かもしれない」に対応する「ʔàat(cà)」は、①可能性を表す場合（単なる可能性）、②主張を表す場合（相反する可能性）の 2 つに分けられる。

まず、①可能性を表す場合に関して、この可能性を表す「かもしれない」は、登場人物の思考文と対話文の両方に使用され、文末に置かれることが多い。また、条件文や「もしかしたら」「もしかすると」という副詞と多く共起する。タイ語に訳すと、「ʔàat(cà)～kɔ̂ɔdâay」という形式で訳されることが多い。以下の（47）～（50）がそれに該当する。

（47）状況： 探偵たちは佐々岡について調べる依頼をもらった。

淳平　：駿太郎。お前、奥さんに接触しろ。

駿太郎：俺が？

淳平　：（i）佐々岡がもし本気で移籍を考えてるなら、奥さん何か聞いてるかもしれない。（ii）お前、奥さんの犬の散歩に付き合って何か聞き出せ。

a. 佐々岡がもし本気で移籍を考えてるなら、奥さん何か聞いてる**かもしれない**。

b. thâa　saasaa?ookà　khítcà　yáaybɔ̀ɔrísàt　ciŋciŋ　lákɔ̂ɔ
もし　佐々岡　考える　移籍　本気　なら
phanlayaa　kɔ̂ɔ　**?àatcà**　rúu　rûaŋ　?àraybâaŋ
奥さん　は　àatcà　知る　こと　何か
もし佐々岡が本気で移籍を考えてるなら、奥さん何か知っているかもしれない。

（ラッキーセブン）

（48）状況：探偵たちは友だちの新田が行方不明事件について話している。

駿太郎：新田だ。新田がシュレッダーかけてました。警察が入る前の日に。たぶん画像データを消したのも。

茅野　：新田さんなら、可能ですね。

飛鳥　：どうしてそういうことを！？

筑紫　：（i）もしかしたら、新田はラッキー探偵社にある証拠を全て消すことで全部自分一人のせいにしようとしたのかもしれない。

（i）a. もしかしたら、新田はラッキー探偵社にある証拠を全て消すことで全部自分一人のせいにしようとしたの**かもしれない**。

b. nitta　**?àatcà**　yàak　lób　làkthăan　tháŋmòt　thîicà　săaw　thŭŋ
新田　?àatcà　たい　消す　証拠　全て　関係代名詞　繋がる　まで
bɔɔrisàtraw　lέ　doonlênŋaan　khondiaw
会社　と　いかれる　一人
新田は、会社に関わる証拠を全て消して、全部自分一人のせいにしたいかもしれない。

(ラッキーセブン)

(49) 状況：ナットは自分のことを考えている。

(i) 僕らが何を待っていたのか僕にはよく分からない。(ii) 多分それは、時間通りに帰って来ない父さんだったのかもしれない。あるいは、僕らにはわからない何かであったのかもしれない。

(ii) a. **?àatcà** pen phôɔ thîi kláp bâan mây troŋ weelaa rŭ̌ɯ
?àatcà である 父 関係代名詞 帰る 家 否定 通り 時間 あるいは
?àatcà pen ?àraysàkyâaŋ thîi raw ?eeŋkôɔ mây khəy rúu
?àatcà である 何か 関係代名詞 僕ら も 否定 たことある 知る
それは、時間通りに帰って来ない父さんだったのかもしれない。あるいは、僕らにはわからない何かであったのかもしれない。

b. 多分それは、時間通りに帰って来ない父さんだったの**かもしれない**。あるいは、僕らにはわからない何かであったの**かもしれない**。

(weelaa nay khùatkɛ̂ɛw)

(50) 状況：ゲオは怪しい男性を助けた。次の日、その人の会社に呼ばれた。友達のプーはそれが怪しいと思い、ゲオに注意する。

プー ：俺は、行かないほうがいいと思う。(i) 何だが変な気がする。
マック：変だけど、給料は 3 万バーツだよ。
プー ：マック、何言ってるんだよ!!黙れ。ゲオ、やっぱり行かないほうがいい！(ii) あいつ、何かたくらんでいるのかも。ゲオが心配だから、言ってるんだ。

(ii) a. keew pùu wâa yâa pay thamŋaan kàp man ləəyná
ゲオ プー と（思う）ない方がいい 行く 勤める と あいつ 終助詞
man **?aatcà** khít mây dii kàp keew kɔ̂ɔdâay
あいつ ?àatcà 思う 否定 いい と ゲオ 可能性
ゲオ、僕はあいつと働きに行かないほうがいいよ。あいつは、ゲオのことに何かたくらんでいるのかも。

b. ゲオ、やっぱり行かないほうがいい！あいつ、何かたくらんでいるのかも。

（sɔ̌ɔŋ hǔacay níi phûa thəə）

（47）の話し手は、佐々岡の奥さんが佐々岡の移籍についてのことを知っているかどうか知らないため、（47ii）のように、駿太郎に「お前、奥さんの犬の散歩に付き合って何か聞き出せ」と命令している。話し手が知らないことであるため、（47ii）「聞いているかもしれない」という可能性を表す際、「聞いていないかもしれない」という矛盾する可能性を同時に並べることができる。（48）では、（48i）のように新田が画像のデータを全部消した証拠を持っていないため、話し手は断定せず、新田がデータを消して、全部自分一人のせいにしようとしたという可能性を表している。（47）と同様に、（48i）「しようとしたかもしれない」と表す際、同時に「しようとしないかもしれない」と矛盾した可能性を並べることができる。また、（49）では（49i）のように、話し手が事実について知らないと表している。（49ii）のように「時間通りに帰って来ない父さんだったの」かあるいは、「僕らにはわからない何かであったの」かという複数の可能性を述べている。そして、(50)の話し手は（50i）「何だが変な気がする」と言ったように、ある男性が何かたくらんでいる根拠を持っていないが、急に 3 万バーツの給料をあげるのは変だと思っており、（50ii）「何かたくらんでいる」という可能性を表している。（47）～（50）ではいずれも話し手はあることについての事実を知らず、可能性を表している。

日本語の「かもしれない」に関して、三宅（1992：39）は、可能性判断は命題が真である可能性があるとの認識を表すものであり、一つの可能性として真であればよいのであるから、同時に真であることができない命題を並べることもできると説明する。そのため、（47）（48）は矛盾した可能性を、（49）は複数の可能性を並べることができる。また、この場合話し手は事実を知らないことについての可能性を表すため、（48）（49）のように、「たぶん」[11]「もしかしたら」など概言を表す副詞と共起できる。

一方、タイ語では、この状況においての「?àat(cà)」は、（50）のように「kɔ̂ɔdây」と共起することが多い。「kɔ̂ɔdây」は直訳すると「～もできる」になる。すなわち、「～も可能性ある」という意味である。そのため、「かもしれない」に対応する「?àat(cà)」は「kɔ̂ɔdây」と共起し、「?àat(cà) 動詞 kɔ̂ɔdây（～かもしれない）」「?àat(cà) mây 動詞 kɔ̂ɔdây（～ないかもしれない）」という矛盾した可能性を並べることができる。

[11] 「かもしれない」は「たぶん」「おそらく」などの確信の度合いを表す副詞と共起することがないことはないが、完全自然だとは言い切れない。（日本語記述文法研究会編 2003：154）

このように、話し手は事実を知らないことについて可能性を表す際、日本語では「かもしれない」を使用し、タイ語では「?àat(cà)」を使用する。話し手が知らないことであるため、「ひょっとすると」「もしかしたら」など概言を表す副詞と共起できる。さらに、「かもしれない」を表す際、矛盾した可能性や他の可能性の意味が含まれている。本稿では、このような可能性を表す「かもしれない」を「単なる可能性」と呼ぶ。

次に、②主張を表す場合に関して、本稿の調査では、この場合の「かもしれない」が、対話文で使われていることが分かった。例を（51）～（54）に示す。

（51）状況：麗子は影山とベビーカーについて話している。

影山：お嬢様は、大変惜しいことをなさいました。せっかくそこまでご覧になったのなら、物置のもう少し奥のほうをお調べになればよかったのに。（i）そうすれば、きっと見つけることができたはずでございます、犯人が死体の運搬に利用したベビーカーを

麗子：ベビーカーですって！

影山：さようでございます。ベビーカーは本来赤ん坊を乗せるものですが、ああいったものはイメージよりは頑丈にできているもの。スリムな女性をひとり乗せたくらいで、たちまち壊れてしまうようなヤワな造りではございません。

麗子：（ii）それはそうかもしれないけど、（iii）物置にそんなものがあったかどうか...

（ii） a. それはそう**かもしれない**けど、物置にそんなものがあったかどうか…

b. mankôɔ **?àatcà** pen yâaŋthîi naay wâa tɛ̀ɛ nay hôɔŋkèpkhɔ̌ɔŋ
それ ?àat(cà) である 通り あなた 言う しかし 中 物置
man mii rótkhěndèk yûu rŭ̌ɯplàw
そこ ある ベビーカー ある かどうか
それはあなたが言った通りかもしれないけど、物置の中にはベビーカーがあったかどうか...

(謎解きはディナーの後で)

（52）状況：探偵（淳平）は警察（由貴）と話している。

淳平：新田はやってません。あいつは変わり者だけど、探偵としてのプライドは持ってた。こんなくだらない事件を起こすわけないんです！

由貴：私が刑事になって学んだのは、人は分からないっていうこと。（i）誰だって犯罪を犯すことがある。私だってあるかもしれない。

淳平：（ii）確かにそうかもしれない。（iii）でも、それは最終判断だ。調べて調べて最後に残った結果がそれだったら、しかたがない。

（ii） a. 確かにそう**かもしれない**。でも、それは最終判断だ。調べて調べて最後に残った結果がそれだったら、しかたがない。

b. kɔ̂ɔ **ʔàatcà** chây tɛ̀ɛ níi pen thîimaa sùttháy lɛ́ɛw tháa
それ ʔàatcà 確かに しかし これ である 経緯 最後 完了 もし
sɯ̀ɯp sámsám lɛ́ɛw phǒnláp mây plìan bɛ̀ɛpnán khoŋ chûayʔàraymâydây
調べる 繰り返し 完了 結果 否定 変わる それ だろう 仕方がない
確かにそう**かもしれない**。でも、これは最終の経緯だ。調べて調べて結果が変わらなかったったら、しかたがない。

(ラッキーセブン)

（53）状況：美由希、裁判で榎戸のことが好きだったという主張に対して否定している。

相沢　：美由希さんは、（i）榎戸さんのことを好きだったという主張に対してどう思われますか?

美由希：（ii）失礼かもしれないけど、（iii）常識的にあり得ないと思います。

（ii） a. 失礼**かもしれない**けど、常識的に　あり得ないと思います。

b. man **ʔàatcà** faŋduu yàapkhaay tɛ̀ɛ chǎn wâa khêɛ khít kɔ̂ɔ
それ ʔàatcà 聞こえる 失礼 しかし 私 と だけ 思う は
mây mii thaaŋ penpaydây lɛ́ɛw khâ
否定 ある 道 あり得ない 完了 終助詞
失礼だと聞こえるかもしれないけど､わたしは考えるだけでもうあり得ないと思います。

(リーガルハイ)

（54）状況：ジョム、友だちのナットに詩人のことを教えている。

ジョム：カーリル・ジブランよ。
ナット：（i）で、それが、どんな関係があるんだ？
ジョム：（ii）あんたとは何の関係もないかもしれないわ。（iii）でも、もしかしたら、あんたに何か、いいことを教えてくれるかもしれないわ。

（ii） a. man **ʔàatcà** mây kìaw ʔàray kàp kɛɛ ləəy tɛ̀ɛ man kɔ̂ɔ
それ ʔàatcà 否定 関係 何 と お前 全然 しかし それ は
ʔàatcà thamhây kɛɛ rúucàk baaŋsìŋbaaŋyâaŋ dii khûn
ʔàatcà させる お前 知る 何か よく もっと
あんたとは何の関係もないかもしれない。でも、あんたに何かいいことを教えてくれるかもしれないわ。

b. あんたとは何の関係もない**かもしれない**わ。でも、もしかしたら、あんたに何か、いいことを教えてくれるかもしれないわ。

(weelaa nay khùatkɛ̂ɛw)

（51）の話し手は、聞き手の（51i）「きっと見つけることができたはずでございます、犯人が死体の運搬に利用したベビーカーを」という意見を首肯せず、（51iii）「物置にそんなものがあったかどうか」と主張している。（52）では、話し手は聞き手の（52i）「誰だって犯罪を犯すことがある。（新田も）」の意見を首肯せず、（52iii）「でも、それは最終判断だ。調べて調べて最後に残った結果がそれだったら、しかたがない。」という主張を述べている。（53）では、話し手は裁判で榎戸のことを好きだったという主張に対して否定し、（53iii）「常識的にあり得ないと思います」という意見を表している。（54）では、話し手は、（54i）のように聞き手の興味を持っていない様子を見て、（54iii）「でも、もしかしたら、あんたに何か、いいことを教えてくれるかもしれないわ」という意見を表している。いずれも、話し手が聞き手の発言に対して首肯せず、自分の主張を表している。

日本語の「かもしれない」に関して、野田（1984：115）は、「かもしれない」は会話の中では、断定を弱め、表現をやわらげるために使われることがあり、それは相手の言ったことを完全に否定しないで、そういう可能性もあると言った上で自分の主張を展開してい

ることを述べている。また、平田（2001：62－65）は、婉曲用法の「かもしれない」が Brown and Levinson (1978)のフェイスとポライトネスに関係すると説明し、「間接的表現」「前置き」「擬似的同意」の 3 つの用法に分けている。「間接的表現」は直接的に言うことも十分可能であるが、間接的に表現することで聞き手に対して丁寧さを示す配慮表現である。「前置き」は、慣用的な言い回しと言えるものである。そして、「擬似的同意」は自己主張をする前にその主張を和らげるためのクッション作用がある。

（51）～（54）をみると、話し手は自分の意見を表す前に（51ii）（52ii）（53ii）（54ii）のように「かもしれない」を使用している。「かもしれない」を使用することにより、相手の発言や行為に対して完全に否定していないことを表し、婉曲用法として使用していると考えられる。このように、話し手は自分の断定を遠回しに発言するため、本稿ではこの「かもしれない」の可能性は「相反する可能性」と呼ぶ。

この状況においての「かもしれない」は単なる可能性を表さず、婉曲用法として使用されているため、概言を表す副詞と共起できない。

（51）a'.* {たぶん／もしかしたら} それはそう**かもしれない**けど、物置にそんなものがあったかどうか…

（52）a'.* {たぶん／もしかしたら} 確かにそう**かもしれない**。でも、それは最終判断だ。調べて調べて最後に残った結果がそれだったら、しかたがない。

（53）a'.* {たぶん／もしかしたら} 失礼**かもしれない**けど、常識的にあり得ないと思います。

一方、タイ語に関して、Rangkupan（2004：61－62）によれば、タイ語の譲歩を表す話法（concessive discourse）では、認識的モダリティを使用する場合があり、それは「?àat(cà)」を使用することによって、「話し手がある命題に対してある可能性があると知っているが、自分が首肯しない」ことを示すという。「thŭŋmέε（でも）」「tὲε（しかし）」という逆接接続詞と共起することが多い。また、Vatcharasuwan（2004：95）は、タイ語で反論を表す時に、「?àat(cà)」を使用する場合があることを指摘し、主張をやわらげる効果があると述べている。つまり、聞き手の意見に首肯しない場合、タイ語では「?àat(cà)」と逆接接続詞を共に使用して話し手が自分の意見を述べる。(51b)(52b)(53b)(54a)のように「?àat(cà)」の文の後に、「tὲε（しかし）」という逆接接続詞が共起している。

以上のように「かもしれない」に対応する「ʔàat(cà)」は、登場人物の思考文と対話文の両方に表れている。話し手がある命題の真偽について知らない場合は、可能性を表す用法として使用されるが、対話文では「かもしれない」と「ʔàat(cà)」を使用することによって話し手の主張を和らげ、婉曲用法として使用される。

6.2. 「かもしれない」に対応する「khoŋ(cà)」

「かもしれない」に対応する「khoŋ(cà)」の関係は、教科書や先行研究では挙げられていない対応関係である。本研究の調査の結果では、「かもしれない」に対応する「khoŋ(cà)」は、①反事実のことを表す場合、②確定に近い予定を表す場合、③義務的なことを表す場合の大きく 3 つに分けられる。

まずは、①反事実のことを表す場合に関して分析する。この場合の「かもしれない」は、対話文でも登場人物の思考でも使用されており、条件文として使用されている。以下の (55)（56）がそれに該当する。

（55）状況：刑事は事件について話している。

内海：（i）遺体を発見したのは母親です。ご夫婦で旅行から戻ってきて、プールに沈んでいる娘さんを発見したそうです。
弓削：溺死だな。これ。
内海：（ii）家にプールがなけりゃ。こんなことにはならなかったかも。うちは貧乏でよかった。

（ii） a. 家にプールがなけりゃ。こんなことにはならなかったかも。
うちは貧乏でよかった。

b. rûaŋ yâaŋ níi khoŋ mây kɛ̀ɛtkhûn rɔ̀ɔkná thâa thəə mây
こと ように この khoŋ 否定 起こる 終助詞 もし 彼女 否定
mii sànám nay bâan dii ciŋciŋ thîi raw con
ある プール 中 家 いい 本当 関係代名詞 うち 貧乏
もし彼女の家にプールがなければ、こんなことは起こらなかっただろう。
うちは貧乏でよかった。

（ガリレオ）

c.* rûaŋ yâaŋ níi ʔàat(cà) mây kɛ̀ɛtkhûn rɔ̀ɔkná thâa thəə mây

こと　ように　この　ʔàat(cà)　否定　　起こる　終助詞　もし　彼女　否定
mii　sànám　nay　bâan　dii　　ciŋciŋ　　thîi　　raw　con
ある　プール　中　家　　いい　本当　関係代名詞　うち　貧乏
もし彼女の家にプールがなければ、こんなことは起こらなかったかもしれない。
うちは貧乏でよかった。

（56）状況：父親は喧嘩して別居した母親について話している。

a. thâaŋán　lûuk　　tôŋ　　rɔɔ　hây　rúŋ　mii　pɛ̀ɛt　sǐi　kɔ̀ɔn
それなら　娘　なければならない　待つ　あげる　虹　ある　八　色　先
lɛ́ɛw　lâ　　thŭŋ　wannán　mɛ̂ɛ　khɔ̌ɔŋ　lûuk　khoŋcà　yɔɔm　phût
過去形　終助詞　まで　その日　お母さん　の　　娘　khoŋcà　くれる　話す
kàp　phɔ̂ɔ　sàkkham
と　お父さん　一言
それなら、君は虹が八色になるまで待たなくてはね。
その日が来たら、お母さんも私と一言話してくれるだろう。

b. それなら虹が八色になるまで待たなくてはね。
その日が来たら、お母さんも私と口を利いてくれるかもしれない。
（sǐi　thîi　pɛ̀ɛt　khɔ̌ɔŋ　rúŋkinnám）

c.* thâaŋán　lûuk　　tôŋ　　rɔɔ　hây　rúŋ　mii　pɛ̀ɛt　sǐi　kɔ̀ɔn
それなら　娘　なければならない　待つ　あげる　虹　ある　八　色　先
lɛ́ɛw　lâ　　thŭŋ　wannán　mɛ̂ɛ　khɔ̌ɔŋ　lûuk　ʔàat(cà)　yɔɔm　phût
過去形　終助詞　まで　その日　お母さん　の　　娘　ʔàat(cà)　くれる　話す
kàp　phɔ̂ɔ　sàkkham
と　お父さん　一言
それなら、君は虹が八色になるまで待たなくてはね。
その日が来たら、お母さんも私と一言話してくれるかもしれない。

（55）では、（55i）のように被害者はプールで溺死したが、話し手はプールがなかった場合について（55ii）「家にプールがなければ、こんなことにはならなかったかも」と想像している。（56）の話し手は虹が八色になる場合について仮定している。実際は、虹が七

色を持っているため、八色になることは反事実のことである。いずれも、話し手が反事実のことを表している。

日本語の「かもしれない」に関して、中畠（1993）によれば、「かもしれない」は事実や現実の事態をふまえて（あるいは全くそれに無頓着に）話し手の予測、推測を示す場合に用いられるという。また、平田（2001：61）では、現実に起こってしまったことをふまえた上で、それに反する仮想が行われ、起こった事態と反対推測がされている場合があると述べられている。現実によくないことが起こった場合、そこには、話し手の後悔の気持ちが表現されていると説明されている。

（55）では、溺死という事件が起こるのは望ましくないことであるため、話し手はプールがなく、事件が起こらない場合を仮定して表している。（56）では、話し手は妻と別居するのは望ましくなく、虹が八色になる場合を仮定し、喧嘩して別居した妻と仲直りしたいという気持を表している。このように、現実での出来事が話し手にとって望ましくないことであるため、話し手は「かもしれない」を使用することにより、反事実条件文で自分が望ましいことを表している。

この状況において、（55）（56）は、反事実のことであり、話し手は可能性としてを表し、（55a’）（56b’）のように「たぶん」「もしかしたら」など概言を表す副詞と共起できる。

（55）a’. 家にプールがなけりゃ。{たぶん／もしかしたら}こんなことにはならなかったかも。うちは貧乏でよかった。

（56）b’. それなら虹が八色になるまで待たなくてはね。その日が来たら、{たぶん／もしかしたら}お母さんも私と口を利いてくれるかもしれない。

一方、タイ語では、Rangkupan（2004）は、仮定（Hypothetical）の場合、「?àat(cà)」が使用できると述べているが、その仮定は可能な世界（Possible World）に存在すると説明している。つまり、（55）はもう起こったこと（過去）であり、現在その事態が起こり得るという可能性はない。また（56）では、虹が八色になるのは反事実であり、現実の世界に絶対起こらないことである。そのため、（55c）（56c）のように「?àat(cà)」を使用すると不自然となるのである。

したがって、例えば

（57）山田さんはイベントに参加したかもしれない。

といった例の場合、山田さんが参加できなかったと知った場合は不自然となるが、当時山田さんがイベントに参加したかどうか知らず、単に「イベントに参加する」という可能性を表す場合、（57a）のように「ʔàat(cà)」を使用することができる。

（57）a. 状況：「山田さんがイベントに参加したか」と聞かれたが、話し手は先週山田さんがイベントに参加したかどうか知らなかった。

khunyamada ʔàat(cà) pay rûam ŋaan

山田さん ʔàat(cà) 行く 参加 イベント

山田さんはイベントに参加しに行くかもしれない。

（57）b. 状況：話し手は、山田さんが行きたかったイベントに参加して、偶然に山田さんの好きな歌手に会った。その日、山田さんが仕事でそのイベントに参加きなくなったと知ったので、残念な気持を語る。

thâa mii weelaa khunyamada khoŋ dây pay rûam ŋaan

もし ある 時間 山田さん khoŋ 可能 行く 参加 イベント

時間があれば、山田さんはイベントに参加できただろうに。

本稿の調査では、以上の「かもしれない」に対応する「khoŋ(cà)」は、過去形と「かもしれない」で表している場合が多く見られた。時間の関係について考えてみると、以下の図 6、図 7、図 8 で説明できる。

まず、話し手が山田さんがイベントに参加したかどうか分からない場合、イベントの前の日（E１）から発話時まで「参加する可能性」と「参加しない可能性」の 2 つの可能性を存在するため、両言語とも可能性を表す「かもしれない」と「ʔàat(cà)」を使用できる。以下の図 6 に示す。

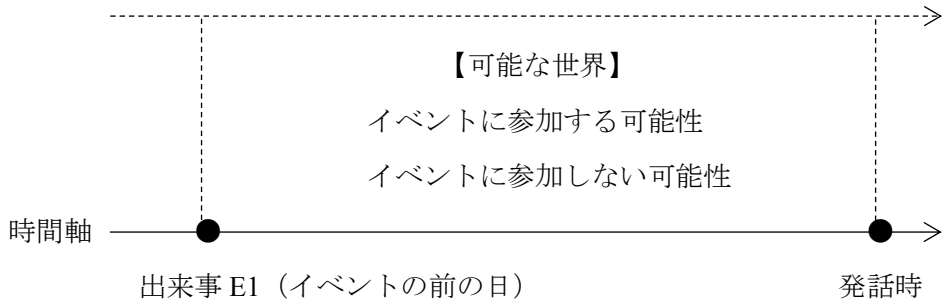

図 6（57a）の時間の関係

それに対して、山田さんが仕事でそのイベントに参加できなくなったと知り、残念な気持を語っている場合について、タイ語の場合は図 7 で示し、日本語の場合は図 8 で示す。

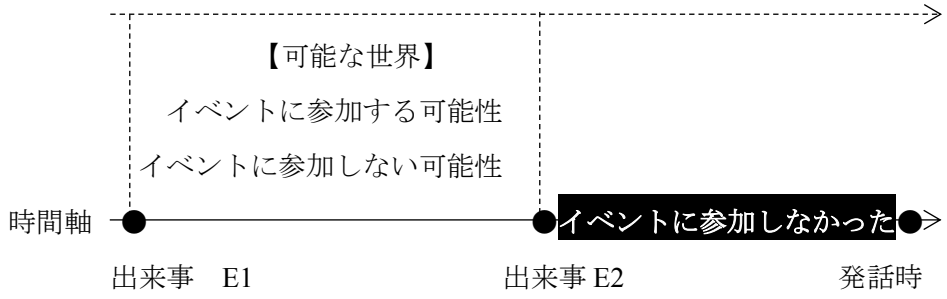

図 7 タイ語の（57b）の時間の関係

タイ語では、図 7 で示すように、話し手は山田さんがイベントに参加しなかったと知った時点（E2）～発話時点で話し手は「イベントに参加しなかった」という事実として捉えているため、「ʔàat(cà)」を使用すると、不自然になる。このような反事実を表す場合、タイ語では、想像を表す「khoŋ(cà)」が使用されている。

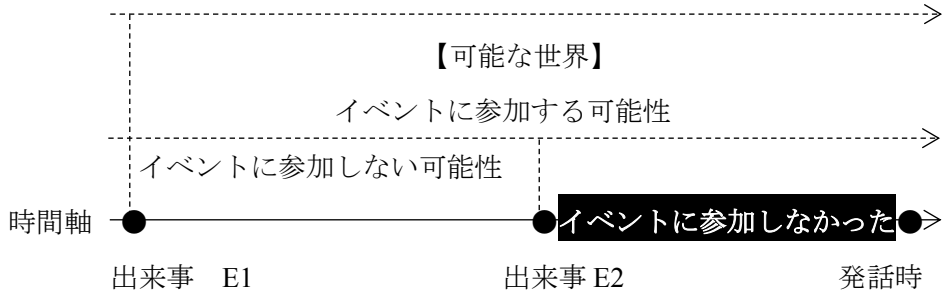

図 8 日本語の（57b）の時間の関係

一方、日本語では、図 8 で示すように、（E2）の時点で「参加しない」という可能性は現実になっても、「参加する可能性」はまだ可能の世界に残っているため、発話時点でも「かもしれない」を使用することができると考えられる。

このように、現実での出来事は話し手にとって望ましくないことであるため、反事実のことで自分にとって望ましいことを表す場合、日本語では「かもしれない」を使用し、タイ語では想像を表す「khoŋ(cà)」を使用する。この場合、話し手が推量を表し、自分の予想や期待を含んでいるため、本稿では「予想の可能性」と呼ぶ。

次に、②確定に近い予定を表す場合に関して、本研究の調査では、対話文で使用されていることが分かった。確定に近いことを表す場合は、タイ語の作品のみで使用されている。次の（58）（59）がその一例である。

（58）状況：父親は息子を見送る。

父親　：(i) 明日、父さんとケーオがバンコクまでついていってあげる。
タワン：本当？
父親　：タワンの大学や寮を見ておきたいから、心配だからね。
タワン：じゃあ、もう一日一緒にいられるんだね。
父親　：うん。(ii) タワンが行ってしまったら、眠れないかもしれない。タワンのことばかり考えて。

(ii) a. klàp càak sòŋ lûuk phôɔ khoŋ nɔɔn mây làp
帰る から 送る 息子 お父さん khoŋ 寝る 否定 眠る
タワンを送って帰ったら、眠れないだろう。
b. タワンが行ってしまったら、眠れないかもしれない。

(phrácan sĭ rúŋ)

（59）状況：クーンと父親が歩いて行くうちに、米をふるっている女の人は父親に話した。

女の人：(i) 今年も米作りはできないかもしれない。米倉の米も残り少なくなった。
(ii) きっと米の代わりにタロ芋や山芋を食べなければならない。

a. pii níi khoŋ mây dây tham naa ʔìik
年 この khoŋ 否定 できる 作る 田圃 また
b. 今年も米作りはできないかもしれない。

(lûuk iisăan)

（58）の話し手は、（58i）のように明日息子をバンコクに送る予定で、明日離れることが決まっているため、（58ii）「タワンが行ってしまったら、眠れないかもしれない」という可能性を表している。（59）では、（59i）で示すように話し手は米の代わりにタロ芋や

山芋を食べれなければならないと確信で表している。干ばつ状態となっているとき、タイの農家が米の代わりにタロ芋と山芋を植えることが多い。すなわち、今干ばつ状態となっている。そのため、話し手は（59ii）「今年も米作りはできないかもしれない」という予定を表している。つまり、（58）（59）は、現実では、「タワンが行く」「今干ばつ状態」といった確定条件が決まり、話し手はそれを基にして確定に近い予定を表している。本稿では、「予定の可能性」と呼ぶ。

日本語では、6.1 で述べたように「かもしれない」は、話し手がある命題の事実について知らない場合の可能性を表す形式である。（58）（59）は未来のことである。すなわち、話し手が知りえないことであるため、「かもしれない」で可能性を表すことができる。この場合は（58b'）（59b'）のように概言を表す副詞と共起することができ、「可能性が低くなくても可能性があるとき…」という意味になる。[12]

（58）b'. タワンが行ってしまったら、{たぶん／もしかしたら} 眠れない**かもしれない**。
（59）b'. 今年も {たぶん／もしかしたら} 米作りはできない**かもしれない**。

一方、タイ語では「?àat(cà)」を使用すると、文法的には正しいが（58）（59）の状況においては不自然となる。なぜならば、「?àat(cà)」は 6.1 で述べたように、単に可能性を表し、矛盾の可能性を同時に並べることができるからである。そのため、「?àat(cà)」を使用すると、（58c）（59c）のように「眠れないかもしれないし、眠れるかもしれない」「米作りはできないかもしれないし、できるかもしれない」という意味になる。

（58）c. klàp càak sòŋ lûuk phôɔ **?àat(cà)** nɔɔn mây làp
（59）c. pii níi **?àat(cà)** mây dây tham naa ?ìik

（58）では息子と離れることは決まっていることであり、（59）では今干ばつ状態になって、米作りができないことは決まっているため、確定に近いことだと考えられる。（58）（59）は、5.2 の日本語の無形モダリティ形式に対応する「khoŋ(cà)」に似て、確定に近いことを表すため、タイ語では「khoŋ(cà)」が使用されている。

このように、話し手が確定に近いことについて話している場合、日本語では「かもしれない」が使用され、タイ語では「khoŋ(cà)」が用いられる。

[12] 筆者が中田一志先生に相談し、意見をいただいたものである。

そして、③義務的なことを表す場合に関して、本稿の調査では、一つの用例のみが確認され、対話文で使用されていた。次の（60）がその一例である。

（60）状況：母親と父親は娘の病気について話している。

父親：亜也…。病気のこと知ったら、あいつどうなっちまうんだよ。（i）言えるはずないだろ。そうだろ？人間ってのはそんな　強いもんじゃねんだよ。たった 15 歳の亜也にそんなこと　言えねえよ。

母親：お父さん。（ii）つらいけど、わたしたちがあの子の病気を認めて受け入れなくちゃいけないのかも。あの子のためにも。

（ii）　a.　お父さん。つらいけど、わたしたちがあの子の病気を認めて受け入れなくちゃいけないのかも。あの子のためにも。

b.　phôɔ　khá　thŭŋ　man　cà　lambàak
父　終助詞　でも　それ　未来形　つらい
tɛ̀ɛ　phûakraw　kôɔ　tôŋ　yɔɔmráp　rûaŋ　rôok　khɔ̌ɔŋ　kɛɛ
しかし　私たち　も　なくちゃいけない　受け入れ　こと　病気　の　彼女
khoŋ　tôŋ　thamcay　hâydây　phûɯa　tua　khɔ̌ɔŋ　ʔaayá　dŭay
khoŋ　なくちゃいけない　心を準備　できる　ため　身　の　あや　も
お父さん。つらいけど、わたしたちがあの子の病気を認めて受け入れなくちゃいけないのだろう。あの子のためにも。

（1 リットルの涙）

（60）では、父親は娘の病気に対して受け入れるのが難しいと思い、娘に教えるのも（60i）「言えるはずないだろ」と思っている。しかし、母親は首肯せず、（60ii）「受け入れなくちゃいけない」と意見を表す。

6.1 で述べたように、「かもしれない」は、会話の中では、断定を弱め、表現をやわらげるために使われることがあることを指摘した。（60ii）では話し手は、「わたしたちがあの子の病気を認めて受け入れなくちゃいけない」という意見を直接的述べず、「かもしれない」を使用することによって、婉曲的に父親に伝える。つまり、話し手が聞き手に義務を負わせる当為判断を直接述べることを避け[13]、遠回しに表している。

[13] 筆者が中田一志先生に相談し、意見をいただいたものである。

それに対して、6.1 でタイ語の「ʔàat(cà)」は「かもしれない」と同様に、話し手の主張を和らげ、婉曲用法として使用されることを指摘したが、(60) では「てはいけない」という義務的モダリティ形式と同時に使用されるため、「ʔàat(cà)」を使用すると不自然になる。

Rangkupan（2004：43）によれば、タイ語では、認識的モダリティは義務的モダリティと共起することができ、その中の「tôŋ」という義務的モダリティ形式と共起すると、強い義務（Strong Obligation）を表すという。そのため、(60) では「khoŋ(cà)」と「tôŋ」を同時に使用し、強い義務を表している。[14]

このように、話し手が聞き手に義務を負わせる当為判断を直接述べることを避け、遠回しに表すことによって、義務的なことを和らげる場合に関して、日本語では「かもしれない」が使用されており、タイ語では「khoŋtôŋ」という形式が使用されている。

6.3. まとめ

第 6 章で「かもしれない」に対応する「ʔàat(cà)」「khoŋ(cà)」に関して考察した。それぞれの対応関係と使用条件は以下の表 13 のようにまとめられる。

[14] タイ語では「tôŋ」と共起できる認識的モダリティ形式は 2 つあり、それは「khoŋ」と「ʔàat」である。(Phatranawig 1972、Rangkupan 2004) しかし、先行研究では、その二つの違いについて述べていない。本稿の調査では、「khoŋtôŋ」の用例のみみられ、(60) のように義務的なことや決まっていることについて話す状況で使用する。一方、「ʔàattôŋ」については Rangkupan（2004）の用例からみると、書き言葉であり、読者の行動についての断定を避ける用例だと思われる。例えば「อ่านเรื่องนี้จบแล้ว คุณอาจต้องรีบเดินไปเปิดตู้เย็น แล้วคว้าน้ำส้มคั้นบรรจุขวดมาดื่มอย่างราวกับไม่มีวันพรุ่งนี้ทีเดียว（この記事を読んだ後、あなたはすぐ冷蔵庫を開け、オレンジジュースを一気に飲むだろう）」そのため、対話文の（60）では、「ʔàattôŋ」を使用すると不自然だと考えられる。

表 13「かもしれない」とタイ語の形式の対応関係と使用条件

【6.1】 「かもしれない」に対応する「ʔàat(cà)」 教科書の対応関係	【6.2】 「かもしれない」に対応する「khoŋ(cà)」
① a) 登場人物の思考・対話文 b) 状況：話し手がある命題の事実を知らず、真になれる可能性を表す c) 可能性：単なる可能性 d) 共起副詞：概言を表す副詞 ② a) 対話文 b) 状況：話し手が相手の発言を聞いて、首肯せずに主張を表す c) 可能性：相反する可能性 d) 共起副詞：概言を表す副詞と共起できない（しかし・でもなど、逆接接続詞と共有）	① a) 登場人物の思考・対話文 b) 状況：現実での出来事は話し手が望ましくないことであるため、反事実条件文で自分が望ましいことを表す c) 可能性：予想の可能性 d) 共起副詞：概言を表す副詞 ② a) 対話文（タイ語の作品のみ） b) 状況：確定に近い予定について表す状況 c) 可能性：予定の可能性 d) 共起副詞：概言を表す副詞 ③ a) 対話文（一つの例のみ） b) 状況：義務的なことを和らげる c) 可能性：× d) 共起副詞：概言を表す副詞と共起できない

「かもしれない」に対応する「ʔàat(cà)」「khoŋ(cà)」に関して明らかになったことは、以下の 2 点である。

一つは、「かもしれない」に対応する「ʔàat(cà)」において、本稿の調査では、①可能性を表す場合と、②主張を表す場合の 2 つの場合に分けられた。まず、①可能性を表す場合に関して、タイの小説では使用されることが多く、登場人物の思考文と対話文の両方で使用されていることが分かった。日本語では「かもしれない」が使用されており、タイ語では「ʔàat(cà)」が使用されている。話し手が知らないことについて、確信を持たず、単に可

能性を表すため、「たぶん」「もしかしたら」など概言を表す副詞と共起することができる。さらに、「かもしれない」を表す際、矛盾の可能性や他の可能性の意味を含めていることができる。次に、②主張を表す場合に関して、対話文で使用されることが多かった。「かもしれない」と「ʔàat(cà)」を使用することによって話し手の主張を和らげ、婉曲用法として使用される。聞き手の意見に首肯しないことを表すため、「しかし」「でも」など、逆接接続詞と共起する。

二つ目は、「かもしれない」に対応する「khoŋ(cà)」において、本稿の調査では、①反事実のことを表す場合、②確定に近いことを表す場合、③義務的なことを表す場合の 3 つの場合に分けられた。まず、①反事実のことを表す場合に関して、本稿の調査では、登場人物の思考と対話文で両方とも使用されていることが分かった。現実での出来事は話し手にとって望ましくないことであるため、反事実条件文で自分が望ましいことを表す場合、日本語では「かもしれない」が使用される[15]。一方、タイ語の「ʔàat(cà)」の仮定は話し手が事実を知らない可能な世界のみで使用されるため、反事実のことを表す場合にタイ語では想像を表す「khoŋ(cà)」を使用する。次に、②確定に近いことを表す場合に関して、タイ語の作品のみで使用されていた。日本語では「かもしれない」が使用されているが、タイ語の「ʔàat(cà)」は矛盾する意味を含んでいるため、確定に近いことを表す場合に使用すると不自然になる。この場合、「khoŋ(cà)」が用いられる。そして、③義務的なことを婉曲的に表す場合に関して、本稿の調査では一つの例のみ出現が確認された。日本語では「かもしれない」を使用し、義務的な意見をやわらげることによって、遠回するが、タイ語では義務的モダリティ形式と共起する場合、「khoŋtôŋ」という形式が使用されている。

以上の考察から、日本語の「かもしれない」とタイ語の「ʔàat(cà)」は、基本的に話し手が事実を知らないことについて可能性を表す用法として同様に使用されている。可能性を表す場合、日本語の「かもしれない」は、過去・現在・未来、及び反事実条件でも使用されているが、タイ語の「ʔàat(cà)」は反事実条件文で使用できないため、両言語は従来の先行研究や教科書のような対応関係を成していない場合があることが明らかとなった。

それに対して、可能性を表す用法から離れた対人的な婉曲用法としても、日本語の「かもしれない」とタイ語の「ʔàat(cà)」が同様に使用されているが、強い義務を表す場合、タイ語では「khoŋtôŋ」という形式が使用されているため「ʔàat(cà)」は使用されていないことが分かった。

---

[15] 反事実条件文で自分が望ましいことを表す場合、日本語では「かもしれない」の他、「だろう」も使用することができる。

第 7 章「だろう」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式

第 7 章では、日本語の「だろう」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式について分析する。第 3 章の調査では、日本語の「だろう」はタイ語の「khoŋ(cà)」と「ʔàat(cà)」と「nâacà」に対応していることが分かった。したがって、まず 7.1 で「だろう」に対応する「khoŋ(cà)」について教科書や先行研究の説明をより詳しく再分析し、次の 7.2、7.3 では、先行研究で扱われていない「だろう」に対応する「ʔàat(cà)」と「nâacà」について、それぞれ分析する。最後に 7.4 では、全体をまとめる。

先行研究によると、「だろう」は様々な用法を持っているが、その中で「確認要求」と「疑問要素」を持っていない「だろう」は推量用法のみである。（キャアコップチャイ 2009：92）ここで、推量用法について確認しておく、三宅（1995：85）によれば、推量は話し手の想像の中で命題を真であると認識するものであるという。仁田（2000：116－118）では、推量とは命題内容である事態の成立・存在を不確かさを有するものとして想像・思考や推論の中に捉えるものであると述べられている。想像・思考や推論の中で捉えるという点については、何らかの根拠が必要になると説明されている。つまり、「だろう」は話し手の想像の中のものであり、何らかの情報に基づいて推量する際に使用するものである。

本稿では先行研究を踏まえて、図 9 の手順で分析する。まず、出現文と使用状況について分析し、それから、推量を表すかどうか、また推量する場合は根拠に基づくかに関しても分析する。最後に、推量を表しているかどうか確認するため、「たぶん」「きっと」など概言を表す副詞と共起できるかという観点から検討する。

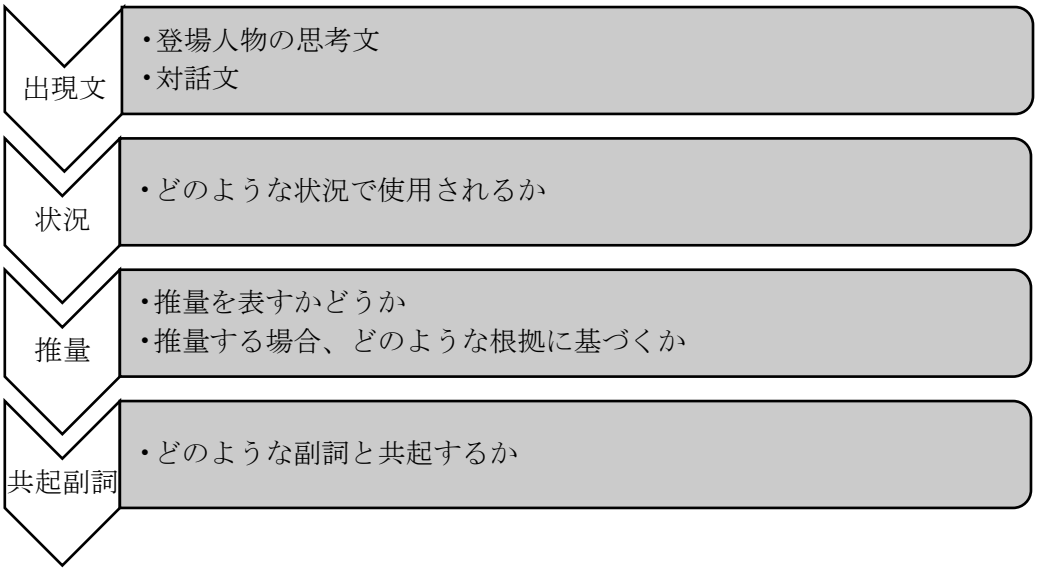

図 9　「だろう」に対応するタイ語の形式の分析の手順

7.1.　「だろう」に対応する「khoŋ(cà)」

「だろう」と「khoŋ(cà)」の関係は、タイで使われている教科書や先行研究でよく挙げられている対応関係である。

推量を表す用法に関して、三宅（1995：85）によれば、推量は話し手の想像の中で命題を真であると認識するものであるという。現実の世界ではなく、想像の世界において命題をとらえるという点が推量の基本的な特徴だと説明されている。仁田（2000：116-118）では、推量とは命題内容である事態の成立・存在を不確かさを有するものとして想像・思考や推論の中に捉えるものであると述べられている。想像・思考や推論の中で捉えるにあたっては、何らかの根拠が必要になる。また、日本語記述文法研究会編（2003：148）では、推量とは想像や思考によってその事態が成立するとの判断を下すことだと述べられている。以上の先行研究から、「だろう」は、話し手の想像の中のものであり、何らかの情報に基づいて推量する形式であると言える。

一方、タイ語の「khoŋ(cà)」に関して、ピヤマーワディー（1992：265）は「推量」と呼び、ある事柄の真実を確認することはできないが、自分の経験による手持ちの情報や既知の情報を根拠とし、それに基づいて考えた結果、その事柄が真である可能性があると判断するものだと説明する。また、Rangupan（2005：62）によれば、Deductive（演繹）は、演繹で主観的に推し量りを表すものであり、Probability（概言）と Inferential Evidence（証拠性）2つのタイプに分けられるとしている。両方のタイプの演繹を表すタイ語の形式は「khoŋ(cà)」であるという。そして、Kiatkobchai（2011：61）は、「khoŋ(cà)」について、話し手の直接

的経験領域にない知識について、思考・想像・仮定という不確かな知識によって判断を下す用法であると捉える。つまり、「khoŋ(cà)」は話し手の知識に基づいて主観的に推量を表す形式である。

以上の先行研究を見ると、日本語の「だろう」はタイ語の「khoŋ(cà)」に対応すると考えられる。

本研究の調査では、推量を表す「だろう」は、小説の登場人物の思考の文に使用されることが多かった。また、条件文として使用されることも少なくない。次の（61）（62）がその一例である。

（61）状況：麗子は事件について考えている。

（i）友達の死にビックリ仰天した杉村恵理は、すぐさま自分の携帯から一一〇番通報したのだという。第一発見者を疑うのは捜査の鉄則だが、杉村恵理の話しぶりに不自然さは感じられなかった。彼女の話が事実だとするなら、被害者は殺害されてほんの一時間ほどで発見されたということになる。（ii）杉村恵理の訪問がなければ、事件の発覚は明日以後にずれ込んでいただろう。

（ii） a. 杉村恵理の訪問がなければ、事件の発覚は明日以後にずれ込んでいただろう。

b. thâahàak sɯ́kìmurá?eerí mây maa hăa kwàa khray cà rúu wâa
もし 杉村恵理 否定 来る あう まで 誰 未来形 知る と
kèət hĕet khâatakam khûn kɔ̂ɔ khoŋ ləəy pay pen
起きる 事件 殺人 起きる だから khoŋ 過ぎる 行く である
cháw wanphrûŋníi
朝 明日

もし杉村恵理が訪問しなければ、事件の発覚は明日の朝にずれ込んでいただろう。

(謎解きはディナーの後で)

（62）状況：晩ご飯を作るために、クーンと父親は鳥を狩りに行ったが、今日は獲れずに家に帰ってしまった。

その日は大沼が丘では何ら得るものはなかったのだが、父親はまだあきらめなかった。（i）クーンは胸の中で、家へ帰ったら、きっと母さんはまた父さんにぶつぶつ文句を言うだろうななどと思っていた。

（i）a. khuun núk nay cay yûu wâa mûa kláp pay thŭŋ ruan
クーン 思う 中 心 ている と とき 帰る いく 着く 家
mêɛ khoŋ wâa phôɔ ʔìik nêɛnêɛ
母親 khoŋ 叱る 父親 また きっと
クーンは胸の中で、家へ帰ったら、きっと母さんはまた父さんに叱るだろうなと思っていた。

b. クーンは胸の中で、家へ帰ったら、きっと母さんはまた父さんにぶつぶつ文句を言うだろうななどと思っていた。

（lûuk iisăan）

さらに、ドラマでは推量を表す「だろう」は対話文の中で使用されていたが、小説の用例数ほど多くなかった。次の（63）（64）がその一例である。

（63）状況：ラックは知らない人を助けた。

ゲオ ：よかった。これでみんな助かったわ。人買いが、逮捕されて。助けてくれれ、ありがとうございます。感謝します。
ラック：やめてください。そんなことしなくても
ゲオ ：あなたは、地獄から救ってくださった恩人です。
ラック：（i）これも、何かの縁なんでしょうね。あなたが、僕の家に逃げ込んだのは。

（i）a. chăn wâa raw khoŋ thambun maa rûamkan ná
わたし と（思う） 私たち khoŋ 寄進 くる 一緒 終助詞
khun thŭŋdây piin maa thîi bâan phŏm ŋaykhráp
あなた できる 登る くる に 家 僕 終助詞
一緒に寄進しただろうから、あなたが僕の家に逃げ込んだと思っている。

b. これも、何かの縁なんでしょうね。あなたが、僕の家に逃げ込んだのは。

（phrácan　sǐ　rúŋ）

（64）状況：竹下は浅野の大事なものを盗んだ。

未樹：（i）大事なものは全部東田が隠してる。どこにあるのかなんて見当もつかない。私名義の通帳だってそう。それらを持ち出すなんて絶対無理。
半沢：そうか だったら、この写真を東田に送るまでだ。（ii）あいつ怒るだろうな。

（i） a. あいつ怒るだろうな。
b. khăw khoŋcà pen bâa nêɛ[16]
彼 khoŋcà である バカ きっと
彼はきっとバカになるだろう。

（半沢直樹）

（61）では、（61i）のように、実際にその日（今日）杉村恵理が訪問し、死体を発覚したが、話し手は（61ii）「杉村恵理の訪問がなければ、事件の発覚は明日以後にずれ込んでいただろう」という杉村恵理の訪問がなかった場合を推量している。すなわち、反事実のことである。（62）では、話し手は（62i）「家へ帰ったら、きっと母さんはまた父さんにぶつぶつ文句を言うだろう」という未来を想像している。（62）では推量する根拠を述べていないが、（62i）で「また」を使用しているため、話し手は「鳥や魚が獲れなかったとき、母親がぶつぶつ文句を言った」という経験があり、その経験に基づいて推量していると考えられる。（63）も推量の根拠が示されていないが、（63i）に「も」を使用しているため、以前にも同じようなことがあったと考えられる。すなわち、（63）の話し手も、自分の経験に基づいて（63i）「これも、何かの縁なんでしょうね」と推量している。（64）の話し手は、他人の気持ちについて推量している。（64）では、話し手は（64i）の未樹の発言に基づいて、大事な通帳が盗まれたと知ったら、（64ii）「東田は怒るだろう」と推量している。つまり、「だろう」に対応する「khoŋcà」は、未来や他人の気持ちなど、話し手が知りえないことについて、話し手の想像（（61）の用例）・経験（（62）（63）の用

[16] タイ語訳では、怒るという言葉を直訳せず、書き言葉に近い言い方で訳したが、怒るという言葉に入れ替えても、「khoŋcà」を使用する。本稿では認識的モダリティ形式を中心にするため、以上のようなよう例を対象になる。

例）・知っている情報（（64）の用例）に基づいて推量する状況で使用されると考えられる。この状況において、（62i）のように「きっと」など、概言を表す副詞と共起することが多い。

しかし、例外的な用例もある。以下の「だろう」は、「khoŋ(cà)」を使用しているが、「nâacà」を使用しても問題はない。これに関して、本研究では用例を挙げて指摘するにとどめる。

（65）状況：父親は、娘のゲオのために料理をたくさん準備している。

ゲオ：父さん、母さん、こんなにたくさん食べきれないわ。

父親：普段作ってやれないから、たまにはな。（i）残っても、ゴーンが帰って来たら食べるよ。ライブの後は、お腹がすくだろうから。

（i） a. lŭa kôɔ mâypenray nîi dĭaw kɔɔn khăw kôɔ klàp maa kinʔeeŋ
残る は 大丈夫 終助詞 結局 ゴーン 彼 は 帰る くる 食べる
klàp maa càak rɔ́ɔŋ phleeŋ dɯ̀kdɯ̀k khoŋ hĭw
帰る くる から 歌う 歌 夜遅く khoŋ お腹がすく
残っても大丈夫。ゴーンが帰って来たら、食べるよ。仕事（ライブで歌を歌う仕事）が終わって、遅く帰ったら、お腹がすくだろう。

b. 残っても、ゴーンが帰って来たら食べるよ。ライブの後は、お腹がすくだろうから。
（sɔ̌ɔŋ hŭacay níi phûa thəə）

c. lŭa kôɔ mâypenray nîi dĭaw kɔɔn khăw kôɔ klàp maa kin ʔeeŋ
残る ても 大丈夫 終助詞 結局 ゴーン 彼 は 帰る くる 食べる
klàp maa càak rɔ́ɔŋ phleeŋ dɯ̀kdɯ̀k nâacà hĭw
帰る くる から 歌う 歌 夜遅く nâacà お腹がすく
残っても大丈夫。ゴーンが帰って来たら、食べるよ。仕事（ライブで歌を歌う仕事）が終わって、遅く帰ったら、お腹がすくはずだ。

（65）では、推量する根拠が表示されていないため、タイ語では次の 2 つの根拠が解釈できる。まず、（65a）のように父親は息子が仕事で遅く帰るということを知っており、夜遅く帰ることを基にして推量すると解釈する場合、「khoŋ(cà)」を使用する。それに対して、人間は、一般的に仕事が終わった後、お腹が減っている。従って、（65c）のように息子が仕事から遅く帰るため、お腹がすくと推論し、それが根拠として当然であるということを

表す場合、「nâacà」を使用する。つまり、タイ語では話し手が知らないことについて、話し手自身が持っている情報に基づいて推量する場合には「khoŋ(cà)」が使用されるが、話し手が推論して当然であると判断した結論を表す場合には「nâacà」が使用される。

以上、「だろう」に対応する「khoŋ(cà)」は、話し手は未来や他人の気持ちなど、知りえないことについて確かな根拠ではなく、話し手の想像や経験や知っている情報に基づいて推量する状況で使用される。

7.2. 「だろう」に対応する「ʔàat(cà)」

「だろう」に対応する「ʔàat(cà)」の関係は、教科書や先行研究では挙げられていない対応関係である。本稿の調査では、「だろう」に対応する「ʔàat(cà)」は、①複数の戸惑い・混乱を表す場合、②対案・反論を表す場合の大きく 2 つに分けられる。

まず、①複数の戸惑い・混乱を表す場合に関して分析する。この場合の「だろう」は、タイの小説の登場人物の思考文で多く使用されている。例えば、（66）のようである。

（66）状況：ナットは、急に思い立て、昔よく来た場所に行った。

> 今日、船着き場のあずまやの廃墟を見た時、なぜ僕がここに来なければならなかったのか、なぜ変化に出会いに来たのか、なぜ古いままにそっと心の片隅にしまっておかないで、自分の記憶に打撃を与えなければならなかったのか、（i）僕にはわからなかった。（ii）僕はきっと寂しかっただけなのだろう。そして、僕に暖かさを与えてくれ、僕に関心を寄せてくれる誰か、あるいは何かが欲しかったのだろう。僕は純粋であどけなかった幼い頃が懐かしかっただけだろう。あるいは、それらのものを懐しがっていると自分で思っているだけなのだろう。

（ii）a. phŏm **ʔàat** phiaŋkhèɛ ŋăw lɛ́ tôŋkaan khraysàkkhon
僕 ʔàat だけ 寂しい と 欲しい 誰か
rŭɯ ʔàraysàkyâaŋ thîihây khwamʔòpʔùn phŏm **ʔàat** phiaŋkhèɛ
あるいは 何か あげる あたたかさ 僕 ʔàat だけ
khítthŭŋ waydèk thîi bɔrîsùt lɛ́ ráydiaŋsăa rŭɯ phŏm
懐かしい 子共頃 関係代名詞 純粋 と 純朴 あるいは 僕
ʔàatcà phiaŋtɛ̀ɛ khít wâa tuaʔeeŋ khítthŭŋ sìŋlàwnán kɔ̂ɔdây
ʔàatcà だけ 思う と 自分 懐かしい それら 可能

僕はきっと寂しかっただけなのかもしれない。そして、僕に暖かさを与えてくれ、僕に関心を寄せてくれる誰か、あるいは何かが欲しかったのかもしれない。僕は純粋であどけなかった幼い頃が懐かしかっただけかもしれない。あるいは、それらのものを懐しがっていると自分で思っているだけなのかもしれない。

b. 僕はきっと寂しかっただけなのだろう。そして、僕に暖かさを与えてくれ、僕に関心を寄せてくれる誰か、あるいは何かが欲しかったのだろう。僕は純粋であどけなかった幼い頃が懐かしかっただけだろう。あるいは、それらのものを懐しがっていると自分で思っているだけなのだろう。

（weelaa nay khùatkɛ̂ɛw）

（67）状況：ナットはジョムの様子を見て、彼女の気持ちについて考えている。

ジョムがその人の群れの中に誰を探していたのか、（i）僕にはわからない。（ii）多分、彼女が一緒にしゃべったり、笑ったり、泣いたりすることのできる誰かだろう。あるいは、彼女を子供に帰らせてくれ、そばに寄り添って離れていかない誰かかもしれない。

（ii） a. phǒm mây rúu wâa cɔ̌m khónhăa khray nay phûukhon làwnán
僕 否定 知る と ジョム 探す 誰か 中 人々 その
ʔàat pen khraysàkkhon thîi lɔ̀n phɔɔcà phûtkhuy hŭarɔ́ lɛ́
ʔàat である 誰か 関係代名詞 彼女 すぐ 話す 笑う と
rɔ́ŋhây dûay dây rŭɯ khraysàkkhon thîi càtham hây
泣く 一緒 できる あるいは 誰か 関係代名詞 する あげる
lɔ̀n klaay pen dèkdèk thîi khlîakhlɔɔ yûu dooy mâyyom
彼女 なる である 子共 関係代名詞 すり寄る いる で 否定
hàaŋ pay nǎy
離れる いく 終助詞
ジョムがその人の群れの中に誰を探していたのか、僕にはわからない。
多分、彼女が一緒にしゃべったり、笑ったり、泣いたりすることのできる誰かかもしれない。あるいは、彼女を子供に帰らせてくれ、そばに寄り添って離れていかない誰かかもしれない。

b. ジョムがその人の群れの中に誰を探していたのか、僕にはわからない。
多分、彼女が一緒にしゃべったり、笑ったり、泣いたりすることのできる誰かだろう。あるいは、彼女を子供に帰らせてくれ、そばに寄り添って離れていかない誰かかもしれない。

（weelaa nay khùatkɛ̂ɛw）

（66i）「僕にはわからなかった」と（67i）「僕にはわからない」のように、話し手はある命題についての事実を知らず、断定できないため、様々な可能性を表している。

日本語では（66b）（67b）のように「だろう」が使用されているが、これらの「だろう」は（66b'）のように「だろうか」に置き換えることが可能である。

（66）b'. 僕はきっと寂しかっただけなのだろうか。そして、僕に暖かさを与えてくれ、僕に関心を寄せてくれる誰か、あるいは何かが欲しかったのだろうか。あるいは、僕は純粋であどけなかった幼い頃が懐かしかっただけだろうか。あるいは、それらのものを懐しがっていると自分で思っているだけなのだろうか。

大島（2002：37）によれば、「だろうか」文の意味は、ある課題について結論が「不明である」ということを表すという。また、益岡（2007：171－172）では、「か」は「不定性」を表す助詞であり、自問を表す「か」は「だろう」に接近すると述べている。（66）（67）は疑問要素の「か」が付いていないが、例の状況から考えると、話し手があることについて混乱しているため、「だろう」の代わりに「か」という不明を表す表現を使用することも可能である。次の（66c）のようである。

（66）c. 僕はきっと寂しかっただけなのか。そして、僕に暖かさを与えてくれ、僕に関心を寄せてくれる誰か、あるいは何かが欲しかったのか。あるいは、僕は純粋であどけなかった幼い頃が懐かしかっただけか。あるいは、それらのものを懐しがっていると自分で思っているだけなのか。

一方、タイ語では、5.1 節で述べたように、複数の可能性を表す場合、「ʔàat(cà)」が繰り返し使用されている。この状況において、「khoŋ（cà）」に訳すと、（66a'）のように、不自然となる。なせならば、「khoŋ(cà)」は想像や既知に基づいて推量を表す形式であるが、

（66）（67）では話し手が推量の根拠を持っておらず、単に可能性を表しているため、「khoŋ(cà)」が使用できないと考えられる。

（66）a'.* phŏm khoŋ phiaŋkhèɛ ŋăw lé tôŋkaan khraysàkkhon rŭɯ? àraysàkyâaŋ thîi hây khwam?òp?ùn phŏm khoŋ phiaŋkhèɛ khítthŭŋ waydèk thîi bɔrîsùt lé ráydiaŋsăa rŭɯ phŏm khoŋ phiaŋtèɛ khítwâa tua?eeŋ khítthŭŋ sìŋlàwnán kôɔdây

このように、話し手が複数の戸惑い・混乱を表す場合、タイ語では「?àat(cà)」を繰り返し使用し、複数の可能性を表している。それに対して、日本語では不明性を表す「だろう」を使用される。

次に、②対案・反論を表す場合に関して分析する。この場合の「だろう」は対話文において使用されていることが多い。次の（68）（69）がその一例である。

（68）状況：母親（潮香）は娘の病気を心配し、色んな病院を回ったが、治療法がないと言われた。最後にその病気の専門家の医者のところに行った。

潮香：海外では…。（i）あの海外では何かいい治療法があるんじゃないですか？

医者：今のところ海外も同じです。（ii）むしろ日本のほうがこの病気の研究は進んでいるでしょう。

（ii） a. 今のところ海外も同じです。むしろ日本のほうがこの病気の研究は進んでいるでしょう。

b. tɔɔnníi tàaŋpràthêt ?eeŋkôɔ mŭankan thîi yîipùn ?eeŋ àatcà
今 海外 も 同じ で 日本 方 àatcà
phátthanaa wícay rôok níi pay mâakkwà lɛ́ɛw dûaysámpay
発達 研究 病気 この 行く より 過去形
(1リットルの涙)

b'.* tɔɔnníi tàaŋpràthêt ?eeŋkôɔ mŭankan thîi yîipùn ?eeŋ
今 海外 も 同じ で 日本 方
khoŋcà phátthanaa wícay rôok níi pay mâakkwà lɛ́ɛw dûaysámpay
khoŋcà 発達 研究 病気 この 行く より 過去形

今のところ海外も同じです。むしろ日本のほうがこの病気の研究は進んでいるでしょう。

(69) 状況：麗子と影山はある事件について相談している。

影山：だからこそ、犯人はシークレットシューズの存在を隠したい。その存在が捜査員の頭の中にチラリとでも浮かぶような行動に出たか…もう、お判りですね。

麗子：判ったわ。(i) 犯人は被害者のズボンを脱がせたのね。長すぎる裾を隠すために。

影山：さすが、お嬢様、慧眼でいらっしゃいます。(ii) しかしながら、ズボンを脱がせただけですと、かえって捜査員の注目は脱がされたズボンに集中してしまいます。捜査員はクローゼットの中のズボンを調べることでしょう。

(ii) a. しかしながら、ズボンを脱がせただけですと、かえって捜査員の注目は脱がされたズボンに集中してしまいます。捜査員はクローゼットの中のズボンを調べることでしょう。

b. tɛ̀ɛwâa thɔ̀ɔt tɛ̀ɛ kaaŋkeeŋ ʔɔ̀ɔk câwnâathîitamrûat **ʔàatcà** yîŋ
しかし 脱ぐ だけ ズボン 出る 捜査員 àatcà もっと
phûŋ khwaamsǒncay pay thîi kaaŋkeeŋ lé càtkaan trùatduu
集中 興味 いく に ズボン と 管理 調べる
kaaŋkeeŋ thîi yûu nay tûusûaphâa
ズボン 関係代名詞 ある 中 クロゼット
さすが、お嬢様、慧眼でいらっしゃいます。しかしながら、ズボンを脱がせただけですと、かえって捜査員の注目は脱がされたズボンに集中してしまいます。捜査員はクローゼットの中のズボンを調べることかもしれません。

(謎解きはディナーの後で)

b'.* tɛ̀ɛ wâa thɔ̀ɔt tɛ̀ɛ kaaŋkeeŋ ʔɔ̀ɔk câwnâathîitamrûat **khoŋcà** yîŋ
しかし 脱ぐ だけ ズボン 出る 捜査員 khoŋcà もっと
phûŋ khwaamsǒncay pay thîi kaaŋkeeŋ lé càtkaan trùatduu
集中 興味 いく に ズボン と 管理 調べる

kaaŋkeeŋ　thîi　yûu　nay　tûusŵaphâa
ズボン　関係代名詞　ある　中　クロゼット
さすが、お嬢様、慧眼でいらっしゃいます。しかしながら、ズボンを脱がせただけですと、かえって捜査員の注目は脱がされたズボンに集中してしまいます。捜査員はクローゼットの中のズボンを調べることでしょう。

（68）では、医者が（68i）「あの海外では何かいい治療法があるんじゃないですか」という患者の母親の指摘に対して別の見解として（68ii）「むしろ日本のほうがこの病院の研究は進んでいるでしょう」と示している。また（69）の話し手は、（69i）のように聞き手の「犯人は被害者のズボンを脱がせた」という意見に首肯せず、（69ii）「しかしながら、ズボンを脱がせただけですと、かえって捜査員の注目は脱がされたズボンに集中してしまいます。捜査員はクローゼットの中のズボンを調べることでしょう」という反論を表している。（68）（69）は、いずれも聞き手と意見が合わず、話し手が「対案」や「反論」を表している状況である。このような場合、「むしろ」や「かえって」と共起することが多い。

日本語の「だろう」に関して、益岡（2007：144）は、断定保留とは、真であるとの確信が持てなかったり聞き手との関係で断定を差し控えたりといった事情で断定を保留するものだと述べている。

以上の用例の話し手と聞き手の関係を見ると、（68）は医者と患者の母親であり、（69）は執事とお嬢様であるため、話し手は直接断定せず、「だろう」を使用することによって、待遇的に自分の意見を控えめにしていると考えられる。この状況において、「だろう」は、話し手の推量ではなく、自分が知っていることや思っていることを表したものであるため、次の例のように「たぶん」などの概言を表す副詞と共起させると不自然になる。

（68）a’* むしろたぶん日本のほうがこの病気の研究は進んでいるでしょう。

一方、タイ語では、「khoŋ(cà)」を使うと、（68b’）（69b’）のように話し手が知らないことについて推量を表すという意味になり、以上の状況においては適切ではないと考えられる。Vatcharasuwan（2004：95）は、タイ語で反論を表す時に「?àat(cà)」を使用する場合があることを指摘している。「?àat(cà)」を使用すると、主張をやわらげる効果がある。すなわち、断定保留の「だろう」に似た効果があると考えられる。

このように、対案や反論を表す場合に関して、日本語では「だろう」を使用することによって自分の断定を控えめにすることができる。しかし、タイ語の「khoŋ(cà)」は推量から

派生した婉曲用法を持っていないため、タイ語では可能性を表す「ʔàat(cà)」が用いられ、可能性を示すことによって話し手の主張をやわらげる。

7.3. 「だろう」に対応する「nâacà」

「だろう」に対応する「nâacà」の関係は、教科書や先行研究で指示されていない対応関係である。本稿の調査では、対話文と登場人物の思考の文のどちらにも同じぐらいの頻度数で表れていた。

（70）状況：古美門は政治家の事件について証拠を集めているので、政治家の秘書である江藤に聞く。

江藤　：メモを作れそうな人物？
古美門：証拠となったメモは金銭授受の内容を極めて正確に記録してありました。そのメモを作成し得る人物は誰でしょうか？
江藤　：（i）まずは、浅井本人でしょうね。それから、向井、西川、当時いた伊東に和田。（ii）それぐらいかな。

(i) a. まずは、浅井本人**でしょう**ね。それから、向井、西川、当時いた伊東、和田。
b. khon rêɛkləəy **nâacà** pen aasaai thàtmaa kɔ̂ɔ pen múkhaai
人 まず nâacà である 浅井 それから である 向井
níshíkaawâa lɛ́ɛwkɔ̂ɔʔ itôo waadà nay weelaa nán
西川 そして 伊東 和田 中 時 その
まずは、浅井本人はずですね。それから、向井、西川、当時いた伊東、和田。
（リーガルハイ）

（71）状況：警察は、被害者と同じアパートに住んでいる河原に事情聴取している。

河原：わたしが郵便受けに夕刊をとりにいったときのことです。このアパートでは郵便受けは外階段の一階部分にまとめて設置してあるんですが、そこでちょうど帰宅する吉本さんとすれ違いました。ひとりで駅のほうから歩いてきて、

わたしの横を通り過ぎたんです。ええ、間違いありません。デニムのミニスカートに茶色のブーツでした。

警部：それは何時ごろのこと？

河原：（i）五時台のテレビ番組が終わって少ししたころでしたから、（ii）午後六時でしょうね。

（i） a. 五時台のテレビ番組が終わって少ししたころでしたから、午後六時**でしょう**ね。

b. tɔɔn nán raaykaan thoorathát thîi maa tɔɔnhâamooŋ phâŋcà
とき その 番組 テレビ 関係代名詞 くる 五時 ばかり
còp pay kɔ̂ɔ **nâacà** raawraaw hòkmooŋ nákhráp
終わる いく だから nâacà ぐらい 六時 終助詞
（謎解きはディナーの後で）

（70）では、政治家の秘書である話し手が（70i）「そのメモを作成し得る人物は誰でしょうか」と聞かれているが、（70ii）のように「それぐらいかな」を表し、はっきり断定できず、事件当時、メモに関わりがありそうな人の名前を表している。（70）では、推量の根拠を表示していないが、（70i）をみると、話し手は「かな」という表現を使っている。日本語記述文法研究会編（2003：37）によれば、「疑い疑問文」は「だろうか」「かな」「かしら」によって表され、補充疑問文に対する応答文として、知っているもののはっきり言い切れない情報を伝えるときに用いられるという。すなわち、（70）の話し手は（70ii）のように「それぐらいかな」という程度を表し、知っているもののはっきり言い切れない情報に基づいて（70i）「まずは、浅井本人でしょうね。それから、向井、西川、当時いた伊東に和田。」と推論していると考えられる。次に、（71）の話し手は、警察に時間帯について聴取されいる。5 時台の番組終了後、話し手が郵便受けに行って被害者に会ったため、（71i）「五時台のテレビ番組が終わって少ししたころでしたから」という前提を持っているが、はっきりとした時間を知らないので、（71ii）「午後六時でしょうね」と推論したことを表している。いずれも、話し手が知りえないことについて、ある前提を持っているが、その前提の中にははっきり分からないところがある。すなわち、不確かな根拠である。話し手は不確かな根拠を基に、推論する場合に「だろう」が使用されると考えられる。

三宅（1993：42）は、確かな根拠の存在が前提としにくい文脈の場合、「だろう」は「はずだ」に置き換えることが難しいと述べている。また、成（2016：75）によれば、論理的推

論過程が成立する場合にも「だろう」の使用が可能であるのは、は話し手の心中または認識の中で、判断に対する不確かさが内在されているためだという。（70）（71）では、話し手は具体的な根拠を持たず、「ぐらい」「ごろ」などを使用し、不確かな記憶に基づいて推論しているため、「はずだ」を使用すると（70a'）（71a'）のように不自然になる。

（70）a'* まずは、浅井本人の**はずだね**。それから、向井、西川、当時いた伊東、和田。それぐらいかな。

（71）a'* 五時台のテレビ番組が終わって少ししたころでしたから、午後六時の**はずだね**。

一方、タイ語に関して、ピヤマーワディー（1992：267－268）によれば、「nâacà」は、ある事柄の真偽を確認はできないが、ある既知の情報（P あるいは P_1、P_2…）を根拠として考えると、論理的に「当然そのような結論(Q)になる」ということを表すという。（70）では、話し手は推論する根拠を述べていないが、話し手は政治家の秘書であり、政治家に関係する人がメモを作成し得ると知っており、その人たちが政治家に関わる人であるため、メモを作成し得ると推論したと考えられる。（71）の話し手は、五時台のテレビ番組が終わった時間を根拠として推論する。この状況において、タイ語では「nâacà」が使用されている。

このように、話し手が知りえないことについて、はっきり分からない記憶に基づいて推論する場合、日本語では「だろう」が使用され、タイ語では「nâacà」が使用されている。話し手のはっきり分からない記憶は不確かな根拠であるため、日本語では「はずだ」を使用することができない。

7.4. まとめ

第 7 章では、「だろう」に対応する「ʔàat(cà)」「khoŋ(cà)」「nâacà」に関して考察した。それぞれの対応関係と使用条件は以下の表 14 のようにまとめられる。

表 14「だろう」とタイ語の形式の対応関係と使用条件

【7.1】 「だろう」に対応する 「khoŋ(cà)」 教科書の対応関係	【7.2】 「だろう」に対応する 「ʔàat(cà)」	【7.3】 「だろう」に対応する 「nâacà」
a) 登場人物の思考・対話文（小説：思考文＞対話文） b) 状況：（未来の出来事・他人の気持ちなど）話し手が知りえないことについて推量する c) 推量○ 推量の根拠：話し手の想像・経験など d) 共起副詞：きっと・たぶんなど、概言を表す副詞	① a) 登場人物の思考文（タイの小説のみ） b) 状況：（複数の）戸惑い・混乱を表す c) 推量○ d) 共起副詞：きっと・たぶんなど、概言を表す副詞 ② a) 対話文 b) 状況：「対案・反論」を表す状況 c) 推量△（＋待遇性） d) 共起副詞：むしろ・かえってなど（概言を表す副詞とは共起できない）	a) 登場人物の思考文・対話文 b) 状況：話し手が知りえないことについて、記憶の中で忘れていることがあって、そのことについて推論する c) 推量○ 推量の根拠：話し手の記憶である。 d) 共起副詞：きっと・たぶんなど、概言を表す副詞

「だろう」に対応する「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」に関して明らかになったことは、以下の 3 点である。

一つは、「だろう」に対応する「khoŋ(cà)」について、本稿の調査では、対話文より小説の登場人物の思考の文に使用されることが多かった。話し手は、未来の出来事や他人の気持ちなど知りえないことについて、ある根拠に基づいて推量する状況で使用される。「だろう」に対応する「khoŋ(cà)」の根拠は、確かな根拠ではなく話し手の想像や経験や知っている情報などである。そのため、「きっと」「たぶん」など概言を表す副詞と共起することができる。

次に、「だろう」に対応する「ʔàat(cà)」について、本稿では、①複数の戸惑い・混乱を表す場合、②対案・反論を表す場合の 2 つの場合に分けられた。まず、①複数の戸惑い・混乱を表す場合に関して、本稿の調査ではタイの小説の登場人物の思考文のみで使用されていることが分かった。日本語ではこの場合、「だろう」は「か」と同様に不確かさを表す形式として一つの文または一つのまとまりの中でに繰り返し並べることができる。一方、タイ語では、5.1 で述べたように、複数の可能性を表す際「ʔàat(cà)」が繰り返し使用される。タイ語の「khoŋ(cà)」は一つの文中に繰り返し並べることができないため、単に可能性を表していると捉え、「ʔàat(cà)」が使用される。次に、②「対案・反論」を表す場合に関して、この場合の「だろう」は対話文においてよく使用されていた。日本語では「だろう」を使用することによって自分の断定を控えめにすることができる。しかし、タイ語の「khoŋ(cà)」は推量から派生した婉曲用法を持っていないため、タイ語では可能性を表す「ʔàat(cà)」を用いて、可能性を示すことによって話し手の主張をやわらげる。

最後に、「だろう」に対応する「nâacà」について、本稿の調査では、会話の文と登場人物の思考の文のどちらにも、同じぐらいの頻度数で表れていた。話し手が知りえないことについて、はっきり分からない記憶を前提に推論する場合、話し手の推論の根拠は不確かなものであるため、日本語では「だろう」が使用される。しかし、話し手が持っている根拠と結論は因果関係が成り立つため、タイ語では「nâacà」が使用されている。

以上の考察から、日本語の「だろう」とタイ語の「khoŋ(cà)」は、基本的に想像の中のものであり、未来のことや他人の気持など話し手が知りえないことについて推量を表す形式である。推量するためには、根拠や前提が必要だが、その根拠と前提にははっきり分からないことや不確かさがある。そのため、概言を表す副詞と共起できる。

しかし、「khoŋ(cà)」は一つの文中に繰り返し使用することができない。また、対話文での「対案・反論」を表す状況で、「だろう」を使用することによって話し手の意見を控えめにする用法を持っているが、タイ語の「khoŋ(cà)」は推量を表す用法しか持っていない。そのため、両言語は従来の先行研究や教科書のような対応関係を成していない場合があることが明らかとなった。

第 8 章「はずだ」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式

第 8 章では、日本語の「はずだ」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式について分析する。第 3 章の調査で、日本語の「はずだ」はタイ語の「khoŋ(cà)」と「nâacà」に対応していることが分かった。したがって、まず 8.1 で「はずだ」に対応する「nâacà」について教科書や先行研究の説明をより詳しく再分析し、次の 8.2 では、先行研究で扱われていない「はずだ」に対応する「khoŋ(cà)」について、それぞれ考察する。最後に 8.3 では全体をまとめる。

先行研究をまとめると、「はずだ」は、主に①他の認識的モダリティ形式との比較と、②現実の世界と観念の世界との関係[17]という 2 つの観点から分類されている。

まず、①他の認識的モダリティ形式との比較という観点に関して、野田（1984：117）では、「にちがいない」「かもしれない」「はずだ」を比較し、「はずだ」の意味と用法は自分が持っている知識から推論すると、こうなるのが当然だということを表すと述べられている。また、三宅（1995：80）によれば、「はずだ」は「確信的判断」であり、命題が真であると確信することを表す形式であるという。この点で、推量の「だろう」と可能性判断の「かもしれない」とは違うと説明されている。仁田（2000）は、論理的必然性や推論の様態に関わるものだということのみ述べている。

次に、②現実の世界と観念の世界との関係の観点に関して、太田（2008：149-157）は、「現実状態が未確認である場合」と「現実の状態が確認済みである場合」に分けている。

本稿では先行研究を踏まえて、図 10 の手順で考察する。まず、出現文と使用状況について分析し、それから、現実の状態が確認済みであるかに関しても分析する。最後に、推論を表しているかどうか確認するため、「きっと」など確言を表す副詞と共起するかという観点から検討する。

[17] 太田（2008）

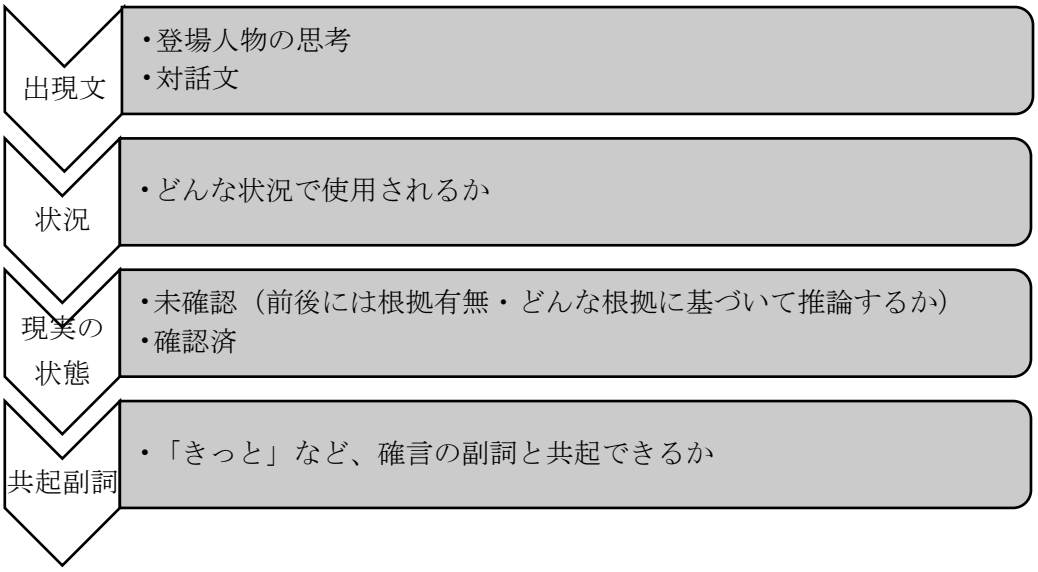

図 7　「はずだ」に対応するタイ語の形式の分析の手順

8.1　「はずだ」に対応する「nâacà」

「はずだ」と「nâacà」の関係は、タイで使われている教科書や先行研究でよく挙げられている対応関係である。

基本的な推論を表す用法に関しては、野田（1984：117）は、「はずだ」の意味と用法は自分が持っている知識から推論すると、こうなるのが当然だということを表すと述べている。仁田（2000：92）では、論理的必然性や推論の様態に関わるものだということのみ述べれらているが、仁田（1991：45）ではさらに、推論の様態に関わるものは、単なる推し量りを表しているのではなく、言表事態として描き出されている事態がある推論によって引き出されたものであることを表していると述べられている。また、益岡（2007：145）によれば、当然判断とは、推論から得られる当然の帰結を表すものであり、「はずだ」がその形式であるという。以上から、「はずだ」は、話し手が持っている情報に基づいて推論し、当然の結論を表す形式であると言える。

一方、タイ語の「nâacà」に関して、ピヤマーワディー（1992：267－268）によれば、ある事柄の真偽を確認はできないが、ある既知の情報を根拠として考えると推理的に、「当然そのような結論になる」という。田中（1996：230）では、ある前提条件、経緯、情報などに基づき、帰結される必然性が極めて高いということを認める判断を表す形式であると述べられている。以上から、「nâacà」はある情報に基にづいて、当然の結論を表す形式であると言える。

以上の先行研究を見ると、日本語の「はずだ」はタイ語の「nâacà」に対応すると考えられる。

本稿の調査では、「はずだ」に対応する「nâacà」は、①推論を表す場合、②納得を表す場合の 2 つに分けられる。

まず、①推論を表す場合に関して、この推論を表す「はずだ」は、登場人物の思考文より対話文で使用されていることが多い。次の（72）（73）（74）がその一例である。

（72）状況：警察が被害者の奥さんに死体のスーツにあった手紙を渡している。

内海：（i）未開封でしたから（ii）神崎さんは知らなかったはずです。本当に心がきれいな方だったんですね。ご主人は

弥生：ありがとう。

（ii） a. 未開封でしたから、神崎さんは知らなかった**はずです**。

b. man mây khəəy thùuk pèət maa kɔ̀ɔn ləəy nîi
それ 否定 過去形 受身形 開く くる 前 過去形 終助詞
thâayâaŋnán khunkhansaakì kɔ̂ɔ mây **nâacà** rúu rûɯaŋ níi
そのため 神崎さん は 否定 nâacà 知る 話 この
それは開封されなかったから、神崎さんは知らなかったはずです。

（ガリレオ）

（73）状況：幸三郎が警察に昨夜のことについて聞かれている。

麗子 ：ゆうべなにかあったのですか。そういえば寺岡さんがいらっしゃっていたようですけど。

幸三郎：マージャンだよ。わたしと雅彦君と俊夫、それに寺岡君を交えてね。（i）寺岡君は結局、泊まっていったようだから、（ii）まだそのへんにいるはずだよ。

（ii） a. 寺岡君は結局、泊まっていったようだから、まだそのへんにいる**はずだ**よ。

b. sùttháay mûakhɯɯn theeráookà kɔ̂ɔ kháaŋ thîinîi
結局 夕べ 寺岡 は 泊まる ここ

nâacà yaŋ yùu thɛ̌ɛw níí lɛ̀
nâacà まだ いる 辺り この 終助詞

（謎解きはディナーの後で）

（74）状況：和夫は容疑者について警察と話している。

明子：あ、それだったらさあ、同じ理由であたしも無理だってことだよね。あたしも女の子だし、重いもの投げらんなーい。
和夫：（i）明子は昔、砲丸投げの選手だっただろ。（ii）いまでも余裕で投げられるはずだ。

（ii） a. 明子は昔、砲丸投げの選手だっただろ。いまでも余裕で投げられる**はずだ**。
b. ʔaakikò nâ mûakɔ̀ɔn khəəy pen nákkiilaa thûmnámnàk nîi
明子 は 以前 たことある である 選手 砲丸投げ 終助詞
mɛ́ɛtɛ̀ɛ tɔɔnníi kɔ̂ɔ **nâacà** yoon dây sàbaaysàbaay
でも 今 も nâacà 投げる できる 余裕
明子は以前、砲丸投げの選手だっただろ。いまでも余裕で投げられるはずだ。

（謎解きはディナーの後で）

（72）では、神埼は死んでしまったため、ある手紙を読んだかどうか知らなかったが、話し手は（72i）のように自分が持っている手紙が未開封であることに基づいて、（72ii）「神崎は知らなかったはずだ」と推論している。（73） の話し手は、今寺岡がどこにいるか知らないが、（73i）のように昨夜自分が会ったことに基づいて、「まだその辺にいるはずだよ」（73ii）と推論している。（74）では、犯人を探している中で話し手が（74i）のように「明子は昔、砲丸投げの選手だった」という自分が知っていることに基づいて、「いまでも余裕で投げられるはずだ」（74ii）と推論している。いずれも、話し手は、事実を知らないこと（現実の状態が確認していないこと）について、自分が直接見たことや聞いたことなど確かな根拠に基づいて、推論している。

最初述べたように、先行研究では、「はずだ」と「nâacà」は、話し手が持っている情報に基づいて推論し、当然の結論を表す形式だと述べられている。（72i）（73i）（74i）のよ

うに話し手が持っている情報に基づいて推論しているため、（72）（73）（74）は「はずだ」と「nâacà」が使用される。

この場合、話し手は自分が直接見たことや聞いたことなど確かな根拠に基づいて、確信を持ち、推論しているため、「きっと」など、確言を表す副詞と共起することができる。

（72）a'. 未開封でしたから、きっと神崎さんは知らなかった**はずです**。

（73）a'. 寺岡君は結局、泊まっていったようだから、
きっとまだそのへんにいる**はずだ**よ。

また、このような推論を表す「はずだ」は、「存じる」「気になる」「知る」など、認知動詞と一緒に使用されている用例も少なくない。次の（75）（76）（77）はその一例である。

（75）状況：古美門と黛は、ボニータの歌を盗んだ友達と話している。

古美門：(i) 葛西サトシのゴーストライターのお一人ですよね？バンド活動をやめ、昼はピアノの先生、夜は飲食店でのアルバイト。そこで偶然葛西サトシさんに出会った。捨てていたはずの音楽への思いが再燃し、自作の曲を売り込んだ。何曲かは一部採用になり、幾ばくかのギャランティーを手に入れた。あるいは、見向きもされなかった自分の歌が葛西サトシさんの名前が付いた途端、日本中で聴かれるようになることにひそかな快感を覚えたのか。しかし、君は採用されたいあまり荒川ボニータの作った曲にまで手を出した。それが『あれは恋でした』だった。違いますか？

黛　　：あなたの親友でしょう？（ii）歌を作る苦労はご存じのはずなのに

（ii） a. 歌を作る苦労はご存じの**はず**なのに

b. khun kɔ̂ɔ **nâacà** rúu wâa khăw pháyaayaam khêɛ năy
あなた は nâacà 知る と 彼女 頑張る だけ どれ
nay kaan tham phleeŋ
中 こと 作る 歌
彼女は歌を作るのにどんなに頑張ったかご存じのはず

（リーガルハイ）

（76）状況：古美門は、容疑者がコーヒーを買ったお店の店員（斉藤）と話している。

古美門：去年の 9 月 3 日午後 2 時ごろこの人がこちらでコーヒーを買っているはずなんですが。

斎藤　：前にも言ったけど、よく覚えてないんですよ。もうだいぶ前のことだしね。
古美門：データとしては残ってるんですよね？
斉藤　：ええ。（i）確かに 9 月 3 日の午後 2 時。コーヒーを買ったお客さんがいます。その日出たコーヒーはこの 1 杯だけなんで。
古美門：だったら、印象に残ってても、おかしくないでしょう。（ii）コーヒーを買った後も一日中ずっとあのベンチの辺りにいたんです。植物の観察などをしていました。（iii）気になったはずですよ。

（iii）a. コーヒーを買った後も一日中ずっとあのベンチの辺りにいたんです。
植物の観察などをしていました。気になった**はずです**よ。

b. lăŋcàakthîi khăw súɯ kaafɛɛ lɛ́ɛw khăw kɔ̂ɔ nâŋ yûu thîi
後で 彼 買う コーヒー 過去形 彼 は 座る ている で
máanâŋ troŋnán tháŋwan khăw nâŋ mɔɔŋ tônmáy
ベンチ あそこ 一日中 彼 座る 眺める 木
sûŋ man kɔ̂ɔ **nâacà** thamhây khun cam khăw dây
だから それ は nâacà 影響する あなた 覚える 彼 できる
コーヒーを買った後、一日中ずっとあそこのベンチに座っていたんです。
木を眺めながら座っていました。あなたが気になったはずですよ。
（リーガルハイ）

（77）状況：ポーはオーンにお金をだまされたラックと話している。

ポー　：（i）ラック、またなの？お人よしにもほどがあるわ。あの人は、ただの隣人。なぜ、ここまでしてあげるの？
ラック：オーンが、大変な目にあっていたのよ。目の前の人を見捨てるわけにいかないわ。

ポー　：まったく、救いの天使じゃあるまいし。覚えておきなさい。貸した金は返ってこないわ。（ii）知っているはずよ。あの人の性格は。

（ii）a. kôɔ **nâacà** rúucàk nîsăy naŋʔɔɔn man dii yûu lɛ́ɛw
nâacà 知る 性格 オーン あいつ よく ている 過去形
あなたはオーンの性格を知っているはず。

b. 知っている**はず**よ。あの人の性格は。

（phrácan sĭ rúŋ）

（75）では、話し手は（75i）のように聞き手も作曲家であることに基づいて、（75i）「歌を作る苦労はご存じのはずなのに」と推論している。（76）では、話し手は（76i）「9 月 3 日の午後 2 時にコーヒーを買ったお客さんがいます。その日出たコーヒーはこの 1 杯だけ」という情報と、（76ii）「（そのお客さんは）コーヒーを買った後も一日中ずっとあのベンチの辺りにいたんです。植物の観察などをしていました」という情報に基づいて、（76iii）「（お客さんがコーヒーを買った後も一日中ずっとあのベンチの辺りにいると）気になったはずですよ」と推論している。また、（77）では、話し手は（77i）のようにラックの隣人の性格に基づいて、「知っているはずよ」と推論している。（77i）の「ラック、またなの？」では、「また」を使用しているため、話し手は「この前、ラックが隣人のオーンにお金を貸したが、返ってこなかった」という情報を持っていると考えられる。話し手はその情報に基づいて（77i）「（ラックはオーンの性格を）知っているはずよ」推論していると。いずれも、聞き手の認知に関することであるため、話し手が現実の状態を確認することはできない。そのため、話し手は自分が持っている確かな根拠に基づいて推論している。

このように、話し手はある命題について事実を知らず、直接見たことや聞いたことなど確かな根拠に基づいて推論する場合に関して、日本語では「はずだ」が使用され、タイ語では「nâacà」が使用されている。この場合、話し手が確かな情報を推論の根拠にするため、推論の内容に確信を持っている。したがって、確言を表す副詞と共起できる。

次に、②納得を表す場合に関して分析する。4.1.3 で述べたように、対話文で使用される「はずだ」には、話し手の納得を表す用法がある。本稿の調査では、一つの用例のみが確認され、対話文で使用されていた。4.1.3.と同じよう例を挙げる。

（27）状況：麗子と影山は事件について話している。

影山：ところが、（i）アパートの鍵は防犯に優れた最新式です。空き巣狙いの泥棒が数分で破れるような代物ではありません。

麗子：ええ、そのとおりよ。（ii）犯人が鍵を破って侵入したとは思えないわ。

影山：では、吉本瞳が鍵を掛け忘れたのでしょうか。しかし、お嬢様の話によれば、その可能性を低いと思われます。（iii）吉本瞳は『人並み以上に戸締まり気を使う人で、鍵をかけ忘れることなんて絶対ない』。第一発言者の杉村恵理はそう断言しております。

麗子：（iiii）確かにそうね。吉本瞳が外出の際に鍵をかけたはずよ。

（iiii）a. 確かにそうね。吉本瞳が外出の際に鍵をかけた**はず**よ。

b. ciŋdûay sìná tɔɔn ʔɔɔk pay khâaŋnɔ̂ɔk yoshimotohitomi **nâacà**

本当 終 とき 出る 行く 外 吉本瞳 nâacà

lɔ́k hɔ̂ŋ lέεw lâ

かける 部屋 た 終助詞

そうですね。吉本瞳が外出の際に鍵をかけたはずよ。

（謎解きはディナーの後で）

野田（1984：118）は、「はずだ」には、「安いはずだ。にせものだもん」のように、「安い」という事実を知っていたものの、その理由が分からなかったが、「にせものだから」ということに今、気づいて納得したという用法があると述べている。また、太田（2008：155）によれば、現実と認識が一致している場合、本来は断定を用いることができるが、「はずだ」を用いて、あえて認識を持ち出すのは「そう考えるのは妥当なことだ」とあえて確認するような場合であり、いわゆる「納得」を示すという。以上から、話し手の納得を表す「はずだ」の使用にいおいて、話し手はある事実の成立が当然のことだと知っても、推論の根拠が分からなかったが、その根拠を知ることによって、納得したことを表すと言える。

（27）では、話し手は（27i）「（被害者の）アパートの鍵は防犯に優れた最新式です。空き巣狙いの泥棒が数分で破れるような代物ではありません」ということを知っており、（27ii）のように犯人が鍵を破って侵入したとは思えず、吉本瞳が外出の際に鍵をかけたはずだと思っているが、その根拠が持っていなかった。影山の話より（27iii）「吉本瞳は『人

並み以上に戸締まり気を使う人で、鍵をかけ忘れることなんて絶対ない』。第一発言者の杉村恵理はそう断言しております」という理由を知ることによって、話し手は（27iiii）「確かにそうね。吉本瞳が外出の際に鍵をかけたはずよ」という納得を表している。この場合、話し手がある理由に納得し、その納得したことを基に推論するため、（27a'）のように確言を表す副詞と共起することができる。

（27）a'. 確かにそうね。きっと吉本瞳が外出の際に鍵をかけた**はず**よ。

一方、タイ語の先行研究では、「nâacà」の納得を表す用法に関する記述が見当たらないが、「nâacà」の根拠を基に当然そのような結論を表す用法から考えると、話し手は（27iii）「人並み以上に戸締まり気を使う人で、鍵をかけ忘れることなんて絶対ない」という情報を基に推論したことと考えられる。そのため、「nâacà」が使用できる。

このように、話し手が知らないことについて、推論の根拠（ある理由）を知ることによって、納得を表す場合、日本語の「はずだ」は、タイ語の「nâacà」に対応する。

8.2 「はずだ」に対応する「khoŋ(cà)」

「はずだ」に対応する「khoŋ(cà)」の関係は、教科書や先行研究で指示されていない対応関係である。本研究の調査では、「はずだ」に対応する「khoŋ(cà)」は、登場人物の思考文より対話文の方に使用されていることが多い。

「はずだ」に対応する「khoŋ(cà)」の用例は多くないが、ほとんどは条件文である。次の（78）（79）がその一例である。

（78）状況：風祭警部は、起こった事件について話している。

警部：昨夜、高原恭子が何者かに殺害された。（i）一方、同じ夜に彼女の飼い猫が前足を負傷した。（中略）では、犯行のあった午前一時ごろ、この猫はどこにいたか。離れだ！このネコは、被害者と一緒に離れの寝室で寝ていたはずなのだ！（ii）もしも離れの寝室以外の場所が犯行現場ならば、この猫が負傷することはなかったはず！

（ii）a. もしも離れの寝室以外の場所が犯行現場ならば、この猫が負傷することはなかった**はず**！

b. thâa mây yâaŋnán man kɔ̂ɔ **khoŋ** mây cèptua paydûay rɔ̀ɔk

もし　否定　　そう　代名詞　は　khoŋ　否定　　負傷　一緒に　終助詞
もしそうじゃなければ、この猫が負傷することはなかっただろう。

（謎解きはディナーの後で）

b’* thâa　mây　yâaŋnán　man　kɔ̂ɔ　nâacà　mây　cèptua　paydûay　rɔ̀ɔk
もし　否定　　そう　代名詞　は　nâacà　否定　　負傷　一緒に　終助詞
もしそうじゃなければ、この猫が負傷することはなかったはずだ。

（79）状況：影山は、起こった事件について話している。

影山：お話によれば、お嬢様は藤倉家の物置の中を覗いた際に、そこにベビーベッドや木馬などをご覧になったのだとか。

麗子：（i）ええ、見たわよ。それがどうかしたの？ベビーベッドや木馬じゃ死体は運べないわよ。

影山：お嬢様は、大変惜しいことをなさいました。せっかくそこまでご覧になったのなら、物置のもう少し奥のほうをお調べになればよかったのに。（ii）そうすれば、きっと見つけることができたはずでございます、犯人が死体の運搬に利用したベビーカーを

麗子：ベビーカーですって！

影山：さようでございます。ベビーカー本来赤ん坊を乗せるものですが、ああいったものはイメージよりは頑丈にできているもの。スリムな女性をひとり乗せたくらいで、たちまち壊れてしまうようなヤワな造りではございません。

麗子：それはそうかもしれないけど、（iii）物置にそんなものがあったかどうか...

（ii）a.　そうすれば、きっと見つけることができた**はずでございます**、犯人が死体の運搬に利用したベビーカーを

b.　thâa　thamdây　yâaŋnán　khunnùu　khoŋ　cəə　rótkhěndèk
もし　できる　そのように　お嬢様　khoŋ　あう　ベビーカー
thîi　khonráay　ʔaw　maa　cháy　khlûanyáay　sòp
関係代名詞　犯人　持つ　来る　使う　運ぶ　死体
そうすれば、犯人が死体の運搬に利用したベビーカーを見つけるでしょう。

（謎解きはディナーの後で）

b'* thâa thamdây yâaŋnán khunnùu nâacà cəə rótkhěndèk

もし できる そのように お嬢様 nâacà あう ベビーカー

thîi khonráay ʔaw maa cháy khlûanyáay sòp

関係代名詞 犯人 持つ 来る 使う 運ぶ 死体

そうすれば、犯人が死体の運搬に利用したベビーカーを見つけるはずです。

（78）では、話し手は（78i）のように同じ夜に彼女の飼い猫が前足を負傷したと知っている。話し手は、その猫が負傷しなかった場合について（78ii）「もしも離れの寝室以外の場所が犯行現場ならば、この猫が負傷することはなかったはず」と推量している。（79）では、話し手は（79i）「ええ、見たわよ。それがどうかしたの？ベビーベッドや木馬じゃ死体は運べないわよ」と、麗子から聞いた。話し手は、麗子が蔵を見ただけでなくよく調べ、犯人の利用したベビーカーを見つけた場合について、（79ii）「そうすれば、きっと見つけることができたはずでございます、犯人が死体の運搬に利用したベビーカーを」と推量している。いずれも、話し手は現実の状態を確認し、事実を知っているが、反事実のことを推量している。

反事実のことについて表す「はずだ」に関して、管見の限り先行研究ではあまり述べられていない。野田（1984：117）では、「はずだ」はある仮定の条件のもとでの推論という場合もあると述べられている。その場合、「はずだ」の前に来る部分が真実である可能性が高いと説明されている。（78）の「はずだ」の文の前に、（78i）のように、「一方、同じ夜に彼女の飼い猫が前足を負傷した」ということは、真実であり、（79）の「はずだ」の前後にも、（79i）（79iii）は、ベビーベッドや木馬などを見たが、ベビーカーを見つけるという麗子の記憶になかった真実を示している。そのため、「はずだ」が使用されている。また、反事実のことを表す状況において（79a）のように「きっと」など、確言を表す副詞と共起できる。

一方、タイ語では、（78b'）（79b'）のように「nâacà」に訳すと不自然になる。この状況においてタイ語で「nâacà」を使うと不自然になる理由は、ピヤマーワディー（1992：267-268）でも述べられているように、タイ語で「nâacà」は、話し手が事実性は確認できないが、何らかの情報を根拠にし、そこから推論すると当然そのような結論になるという意味を表す場合にしか使用できないためである。（78）では、（78i）のように、話し手は被害者の猫が負傷という事実を知っており、（79）では、（79i）のように麗子はベビーベ

ッドや木馬のみを見つけたという事実を知っている。つまり、話し手は事実を知っているため、「nâacà」を使うと不自然になる。この場合、タイ語では推量を表す「khoŋ(cà)」が使用されている。

このように、反事実のことを表す場合、日本語では「はずだ」が使用できるが、タイ語の「nâacà」は事実を知らない場合にのみ使用できるため、反事実のことを表す場合「nâacà」を使うと不自然になる。この場合、タイ語では推量を表す「khoŋ(cà)」が使用されている。

しかし、例外的な用例はある。次の用例（80）「はずだ」が「khoŋ(cà)」に、用例（81）では「khoŋ(cà)」が「はずだ」に訳されているが、実際は「nâacà」が使用されても問題はない。これに関して、本研究では用例を挙げて指摘するにとどめる。

（80）状況：半沢は友達に電話している。

半沢　：（i）これを見るかぎり、東田は 3 年以上前から水増しをしてます。つまり、3 年がかりで着々と金をため込み、準備をしてた。恐らく西大阪スチールの倒産は計画的です。うちから 5 億の融資を騙し取った後、まるで計ったように倒産したのも、これだけ国税が動いているのも、それならうなずけます。

（中略）

半沢　：詳細は 追ってメールする。

渡真利：分かった。法務部の部長はよく知ってる。ハワイとの時差は 19 時間だよな。まだいるかもしれないから、ちょっと行ってみる。

半沢　：（ii）頼む 国税も動くはずだ。（iii）何とか先に押さえてくれ。

（ii）　a.　国税も動く**はずだ**。

b.　sănphâakɔɔn　ʔeeŋkôɔ　**khoŋcà**　khlûɯnwăy　yûu　mŭankan

頼む国税　も　khoŋcà　動く　ている　同じ

国税も動くだろう。

（半沢直樹）

（81）状況：マークは戦争に行って、妊娠している妻のことを思い出した。

マーク：俺は家に帰れるかな。（i）女房が出産したはずだ。（ii）ここで死ぬなんて...

(i) a. ʔiinâk mia kuu pàannîi kɔ̂ɔ khoŋcà khlɔ̂ɔt lɛ́ɛw
ナーク 妻 俺 今ごろ は khoŋcà 出産 過去形
今ごろ妻のナークが出産しただろう。

b. 女房が出産した**はずだ**。

(phîimâak phrákhánooŋ)

太田（2008：151）によれば、「はずだ」の現実の状況が未確認である場合の中に、話し手にとってはその命題がすでに確信を持って抱かれている認識であるとしている。この場合、「はずだ」の担う役割は、判断を導き出す過程自体にはなく、その根拠も問われないことがあるという。（80）では、推論の根拠を表示していないが、話し手は国税も動くことについて確信を持っているので、（80iii）のように「何とか先に押さえてくれ」と友だちに依頼を要求している。（81）の話し手は推論の根拠を述べていないが、奥さんが出産したと確信を持っており、（81iii）のように「ここで死ぬなんて...」と家に帰りたいと表している。いずれも、推論の根拠を表示していないが、話し手は確信を持って推論している。

（80）（81）は、「だろう」に置き換えても、文法的には正しいが、意味的には「はずだ」に比べると、話し手の確信を表さず、単なる推量を表す意味になる。

（80）c. 国税も動く**だろう**。何とか先に押さえてくれ

（81）c. 俺は家に帰れるかな。女房が出産した**だろう**。

一方、タイ語も日本語と同様に「khoŋ(cà)」と「nâacà」の両方を使用できるが、意味は異なる。（79）（80）のように、「khoŋ(cà)」を使うと単なる推量を表す意味になる。（79b）は、（79i）のように半沢は国税が東田の物件の場所について調べていることを知っているが、今、国税が動いているという根拠を持っていないため、「動いているだろう」と自分の推量を表す意味であり、（81a）は、自分がどれぐらい家を離れたか分からず、単に「（家を出て）長い期間だから、女房が出産しただろう」と推量するという意味になる。

それに対して、「nâacà」を使用すると、話し手は既に根拠を持っており、その根拠に基づいて推論するという意味になる。以下の（80d）（81d）のようである。（80d）は、半沢は、国税が東田の物件の場所を知って、今動いているという根拠を持っており、それに基づいて推論するという意味となり、(81d) は、自分がどれぐらい家を離れたか知っており、今、ちょうど女房が出産したごろだと推論するという意味になる。

(80) d. sănphâakɔɔn ʔeeŋkɔ̂ɔ **nâacà** khlɯ̂ɯnwăy yûu mɯ̆ankan
tham wíthii năy kɔ̂ɔdây raw tôŋ yɯ́tmaa hâydây kɔ̀ɔn

(81) d. kuu cà dây klàp phrákhànɔ̆ɔŋ măy nîa
ʔiinâk mia kuu pàannîi kɔ̂ɔ **nâacà** khlɔ̂ɔt lɛ́ɛw

(80) (81) のように、「はずだ」の前後に根拠を述べていない用例が少なくない。翻訳者は話し手がどれぐらい根拠を持っているか確認できないため、「khoŋ(cà)」に訳していると考えられる。

8.3 まとめ

第 8 章では、「はずだ」に対応するタイ語のモダリティ形式に関して分析した。それぞれの対応関係と使用条件は以下の表 15 のようにまとめられる。

表 15「はずだ」とタイ語の形式の対応関係と使用条件

【8.1】 「はずだ」に対応する「nâacà」 教科書の対応関係	【8.2】 「はずだ」に対応する「khoŋ(cà)」
① a) 登場人物の思考文・対話文 b) 状況：（相手の認知など）話し手が知りえないことについて、直接見たことや聞いたことなど確かな根拠に基づいて推論する。 c) 現実の状態：未確認 d) 共起副詞：きっとなど、確言を表す副詞 ② a) 対話文（一つの例のみ） b) 状況：推論の根拠を知ることによって、話し手の納得を表す状況 c) 現実の状態：未確認 d) 共起副詞：きっとなど、確言を表す副詞	a) 対話文 b) 状況：反事実のことを表す状況 c) 現実の状態：確認済み d) 共起副詞：きっとなど、確言を表す副詞

「はずだ」に対応する「nâacà」「khoŋ(cà)」に関して明らかになったことは、以下の 2 点である。

一つ目は、「はずだ」に対応する「nâacà」について、本稿の調査では、①推論を表す場合、②納得を表す場合の 2 つの場合に分けられた。まず、①推論を表す場合に関して、登場人物の思考文より対話文で使用されることが多いことが分かった。話し手はある命題について事実を知らず、直接見たことや聞いたことなど確かな根拠に基づいて推論する場合、日本語では「はずだ」が使用されており、タイ語では「nâacà」が使用されている。この場合、話し手が確かな根拠に基づいて推論しており、確信を持っているため、確言を表す副詞と共起できる。次に、②納得を表す場合に関して、本稿の調査では一つの用例のみ出現が確認された。話し手が知らないことについて、推論の根拠を知ることによって、話し手

の納得を表す状況において、日本語では「はずだ」が使用されており、タイ語では「nâacà」が使用される。

二つ目は、「はずだ」に対応する「khoŋ(cà)」について、本稿の調査では対話文で使用されていることが分かった。反事実のことを表す場合に関して、日本語では「はずだ」が使用できるが、タイ語の「nâacà」は事実を知らない場合にのみ使用できるため、反事実のことを表す場合「nâacà」を使うと不自然になる。この場合、タイ語では推量を表す「khoŋ(cà)」が使用されている。

以上の考察から、日本語の「はずだ」とタイ語の「nâacà」は基本的に話し手が直接見たことや聞いたことなど確かな根拠に基づいて推論し、当然の結論を表す用法として同様に使用されている。話し手は直接見たことや聞いたことなど確かな根拠に基づいて推論しており、確信を持っているため、確言を表す副詞と共起できる。また、当然的なことについて推論の根拠を知らない場合、その推論の根拠を知ることによって、「はずだ」と「nâacà」を使用することで話し手の納得を表すことができる。しかし、反事実について推論する場合、日本語では「はずだ」が使用できるが、タイ語の「nâacà」は事実を知らない場合にのみ使用できるため、両言語は従来の先行研究や教科書のような対応関係を成していない場合があることが明らかとなった。

第 9 章　むすび

第 9 章では、今回の研究の結果を簡単にまとめてから、今後の課題について述べていく。まず、9.1 で本研究の全体のまとめ、次に 9.2 で日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の用法をまとめ、それぞれの形式の特徴を示す。最後に 9.3 で残された課題について述べる。

9.1. 本研究のまとめ

従来、タイで使われている日本語の教科書の説明は、日本語を基準にして、それに合わせたタイ語を使って説明している。しかし、本稿では、タイで使われている日本語教科書と日タイ語認識的モダリティ形式の対照研究の先行研究を調べた結果、日本語とタイ語の認識的モダリティ形式の対応関係には一致しない部分があることが分かった。更に、先行研究では、教科書のような一対一の対応関係を成していない場合もあると示唆されているが、実際に日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」がどのように訳されているか、教科書のとおりの対応関係を成さないのはどのような場面であるかに関しては、十分説明されていない。

これらの問題を明らかにするため、本研究は以下を目的とした。

① 実際に日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」が両言語でどのように訳されているか、両言語の認識的モダリティ形式がどのような対応関係を成しているかについて明らかにし、従来説明されていない対応関係があれば、それに関して説明することを目的とする。

② 両言語を比較対照することにより、日本語の「だろう」 「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の用法を分析しながら、日本語とタイ語の認識的モダリティ形式の特徴を明らかにする。

まず、①の目的を明らかにするために、タイ語に翻訳された日本語の作品と日本語に訳されたタイ語の作品の「だろう」「かもしれない」「はずだ」「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」を表す用例を抜き出し、分析を行った。

その結果、まず、実際に日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」が両言語でどのように訳されているかに関して、本研究の調査では、日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」は、教科書のようにある形式が特定の形

式に訳されるわけではないということを確認し、タイ語の「無形モダリティ形式」「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」によく訳されていることが明らかになった。一方、タイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」は、教科書のようにある形式が特定の形式に訳されるわけではないことを確認でき、日本語の「無形モダリティ形式」「だろう」「かもしれない」「はずだ」に多く訳されていることが明らかになった。

次に、両言語の認識的モダリティ形式がどのような対応関係を成しているかに関して、本研究の調査では、両言語の認識的モダリティ形式が以下の表 9 のような対応関係を成していることが明らかになった。

表 9　日タイ認識的モダリティ形式の対応関係の出現数

タイ語 / 日本語	ʔàat(cà)	khoŋ(cà)	nâacà	無形モダリティ形式	合計
かもしれない	141	25		18	184
だろう	36	149	19	44	248
はずだ		16	17	33	66
無形モダリティ形式	28	111	5		144
合計	205	301	41	95	642

表 9 から見ると、従来タイで使われている日本語の教科書では、網掛けの部分のみが説明されているが、説明されていない対応関係があることが確認できた。説明されていない対応関係を説明するために、本稿の第 4 章～第 8 章で分析を行った。

まず、a.出現文と b.使用状況について考察し、それから c.先行研究を踏まえて、その形式の特徴を分析する。最後に、d.それぞれの対応関係が推量・可能性・推論を表すかどうか確認するために、概言を表す副詞や確言を表す副詞などと共起できるかどうか、またどんな副詞と共起するかという観点から検討する。その結果、以下の表 16 のようにまとめられる。

表 16　日タイ認識的モダリティ形式の対応関係と使用条件

タイ語 / 日本語	ʔàat(cà)	khoŋ(cà)	nâacà	無形
かもしれない	【6.1】 ① a) 登場人物の思考文・対話文 b) 話し手がある命題の事実を知らないため、断定できず、可能性を表す状況 c) 単なる可能性 d) もしかしたらなど、概言を表す副詞 ② a) 対話文 b) 聞き手の発言を聞いて、首肯せず、主張を表す状況 c) 相反する可能性 d) 概言を表す副詞と共起できない しかし・でもなど、逆接接続詞	【6.2】 ① a) 登場人物の思考文・対話文 b) 反事実のことを表す状況 c) 予想の可能性（想像） d) 概言を表す副詞 ② a) 対話文（タイの作品のみ） b) 確定に近いことを表す状況 c) 予定の可能性 d) 概言を表す副詞 ③ a) 対話文（一つの例のみ） b) 義務的なことを表す c) × d) 概言を表す副詞と共起できない		【4.1】 a) 対話文 b) 話し手が直接的証拠に基づいて評価する状況 c) 事実を知っている d) 概言を表す副詞と共起できない
だろう	【7.2】 ① a) 思考文（タイの小説のみ） b) （複数の）戸惑い・混乱を表す状況 c) 推量：○ d) きっと、たぶんなど概言を表す副詞 ② a) 対話文 b) 「対案・反論」を表す状況 c) 推量：△（＋待遇性） d) 概言を表す副詞と共起できない むしろ・かえってなど、逆接接続詞	【7.1】 a) 登場人物の思考文・対話文 b) （未来の出来事・他人の気持ち、反事実のことなど）話し手が知りえないことについて、推量する状況 c) 推量：○（根拠：話し手の想像・知識） d) 概言を表す副詞	【7.3】 a) 登場人物の思考文・対話文 b) 話し手が知りえないことについて、記憶の中で忘れていることがあって、そのことについて推論する状況 c) 推量：○（根拠：話し手の記憶である） d) 概言を表す副詞	【4.2】 a) 対話文 b) 過去の事実を基に、推量する状況 c) 事実を知っている d) 概言を表す副詞と共起できる
はずだ		【8.2】 a) 対話文 b) 反事実のことを表す状況 c) 現実の状態：確認済み d) 確言を表す副詞	【8.1】 ① a) 登場人物の思考文・対話文 b) 知りえないことについて、見たことや聞いたことなど確かな根拠に基づいて推論する状況 c) 現実の状態：未確認 d) 確言を表す副詞 ② a) 対話文（一つの例のみ） b) 推論の根拠を知ることによって、話し手の納得を表す状況。 c) 現実の状態：未確認 d) 確言を表す副詞	【4.3】 a) 対話文 話し手の推論した結果が現実と異なる状況 b) 事実を知っている c) 確言を表す副詞と共起できない
無形	【5.1】 ① a) 登場人物の思考文・対話文 b) （複数の）迷いを表す状況 c) 事実を知らない d) 概言を表す副詞（終助詞「か」と共起する） ② a) 対話文 b) 話し手が知りえないことについて、対案を表す状況 c) 事実を知らない d) 概言を表す副詞（終助詞「よ」と共起する）	【5.2】 ① a) 対話文 b) 話し手が知りえないことについて、確信を持ち、推量する状況 c) 事実を知らない d) 確言を表す副詞 ② a) 対話文 b) 話し手が確定に近い予定を表す状況 c) 事実を知らない d) 概言を表す副詞	【5.3】 a) 対話文 b) 話し手が知りえないことについて、確信を持ち、推論する状況 c) 事実を知らない d) 概言を表す副詞	

次に、②の目的を明らかにするために、以上の表 16 を基にし、両言語を比較対照することにより、日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の用法と特徴を 9.2 でまとめる。

9.2. 日本語とタイ語の認識的モダリティ形式の用法と特徴

本節では、表 16 を基にして、両言語を比較対照することにより、日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の用法と特徴を示す。9.2.1.で日本語とタイ語の「無形モダリティ形式」、9.2.2 で「かもしれない」と「ʔàat(cà)」、9.2.3 で「だろう」と「khoŋ(cà)」、9.2.4 で「はずだ」と「nâacà」について、それぞれの用法と特徴を記す。

9.2.1. 日本語とタイ語の「無形モダリティ形式」の用法と特徴

表 16 からは、日本語とタイ語の無形モダリティ形式の用法は次のようにまとめられる。

日本語の「無形モダリティ形式」については、表 16 の【5.2】【5.3】の b で示すように、話し手がある命題についての事実を知らないが、その命題を確かなものとして捉える場合に使用されている。仁田（2000：94）でも述べられているように、判定のモダリティの中に、概言の推量と対立する「確信」という形式があるためである。仁田は、「確信」とは、事態の成立・存在を、自らの想像・思想や推論の中で確かなものとして捉えたものであると説明しており、推量表現を表さない、無形モダリティ形式である。日本語の「無形モダリティ形式」は確信を表すため、確言を表す副詞と共起することができる。

さらに、表 16 の【5.1】で示すように、日本語では、認識的モダリティを使用せず、無形モダリティ形式に「か」「よ」を付加し、話し手の考えや主張を表すことができる。

一方、タイ語の「無形モダリティ形式」は、表 16 の【4.1】【4.2】【4.3】の c で示すように、話し手がある命題の事実を知っている場合のみ使用されている。事実を知っている場合は、直接的証拠に評価することや、直接経験した事実のことなどである。

以上の「無形モダリティ形式」の用法の分析から、両言語の捉え方の特徴が明らかになった。それは、事態について、日本語では確かなものとして捉えるが、タイ語では事実を知っているものとして捉えるということである。

9.2.2. 日本語の「かもしれない」「だろう」「はずだ」の用法と特徴

表 16 からは、日本語の「かもしれない」「だろう」「はずだ」の用法は、次のようにまとめられる。

まず、「かもしれない」については、表 16 の【6.1】【6.2】【4.1】をまとめると、「かもしれない」の用法は以下の図 11 のようにまとめられる。

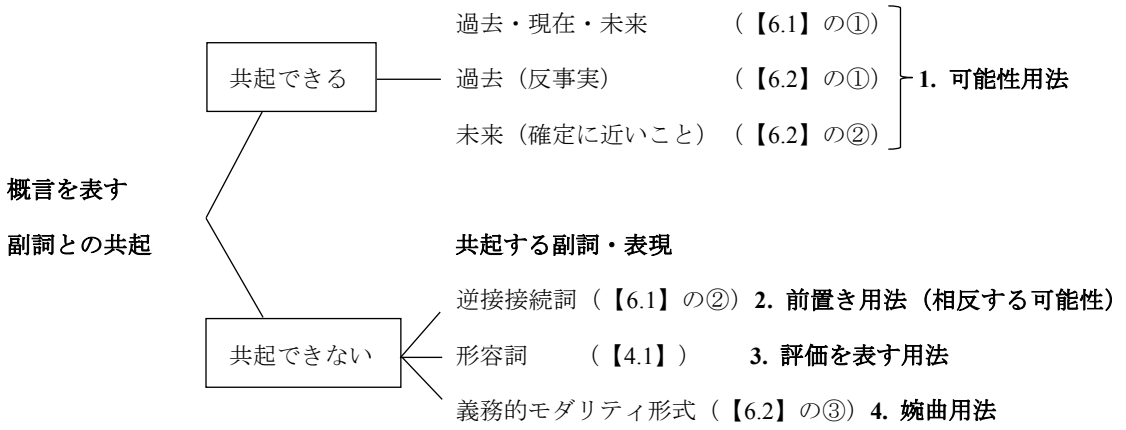

図 11「かもしれない」の用法

まず、概言を表す副詞と共起できるかどうかで 2 つに分け、「共起できる場合」は「1. 可能性用法」の「かもしれない」である。可能性を表す用法に関して、表 16 の【6.1】の①、【6.2】の①②で示すように、「かもしれない」は、話し手がある命題についての事実を知らない場合、その命題の可能性を表す形式である。未来のことでも過去のこと及び反事実のことでも使用されていることが分かった。

次に、「概言を表す副詞と共起できない場合」は、「共起する副詞・表現」によって更に 3 つに分ける。まず、「しかし」「でも」など、逆接接続詞と共起する場合に関して【6.1】の②で示すように、話し手が「かもしれない」を使用することにより相手の意見に首肯せず、話し手の主張を和らげ、婉曲用法として使用する用法である。本稿では、「2.前置き用法（相反する可能性）」と呼んだ。次に、「いい」「かわいい」など、形容詞と共起する場合に関して【4.1】で示すように、直接的証拠に基づいて評価する場合、「かもしれない」を使用することにより、対人的な配慮のために話し手の評価を回避する用法である。本稿では、「3.評価を表す用法」と呼んだ。最後に、義務的モダリティ形式と共起する場合に関して【6.2】の③で示すように、話し手は「かもしれない」を使用することにより、話し手

が聞き手に義務を負わせる当為判断を直接述べることを避け、遠回しに表す用法である。本稿では、「4.婉曲用法」と呼んだ。

このように、タイ語と対照することにより、「かもしれない」は 4 つの用法に分けられる。それは、1.可能性用法、2.前置き用法（相反する可能性）、3.評価を表す用法、4.婉曲用法である。

次に、「だろう」について、表 16 の【7.1】【7.2】【7.3】【4.2】をまとめると、「だろう」の用法は以下の図 12 のようにまとめられる。

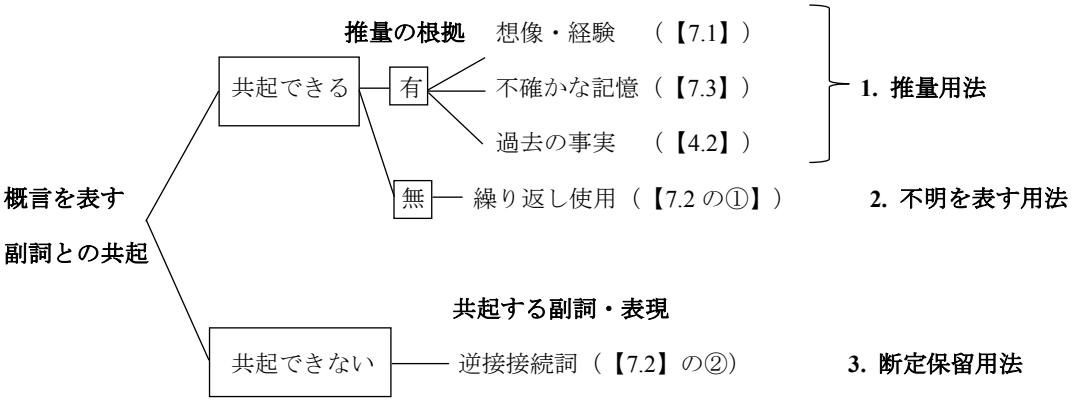

図 12「だろう」の用法

まず、概言を表す副詞と共起できるかどうかで 2 つに分けると、「共起できる場合」と「共起できない場合」である。

まず、概言を表す副詞と「共起できる場合」とは、話し手がある命題について事実を知らず、不確かさを持っている場合である。この場合、話し手は不確かさを持っているため、概言を表す副詞と共起することができる。概言を表す副詞と共起できる場合は、更に推量の根拠があるかどうかによって 2 つに分けられる。一つは表 16 の【7.1】、【7.3】、【4.2】で示すように、話し手は知り得ないことについて、想像・経験・不確かな記憶など、不確かな根拠に基づいて推量する用法である。本稿では、「1.推量用法」と呼んだ。もう一つは、【7.2】の①で示すように、話し手が戸惑い・混乱している場合、推量の根拠を持っておらず、単に可能性を表す用法である。この場合「だろう」は繰り返し使用される。本稿では、「2.不明を表す用法」と呼んだ。

次に、「概言を表す副詞と共起できない場合」は、【7.2】の②で示すように、対話文の「対案」や「反論」を表す状況では、「だろう」を使用することによって話し手の意見を控えめにする用法がある。本稿では、「3. 断定保留用法」と呼んだ。

このように、「確認要求」と「問いかけ性質がある場合」以外、「だろう」は、3 つの用法を持ち、それは 1.推量用法、2.不明を表す用法、3. 対人的な用法の断定保留用法である。

そして、「はずだ」は、表 16 の【8.1】【8.2】【4.3】をまとめると、「はずだ」の用法は以下の図 13 のようにまとめられる。

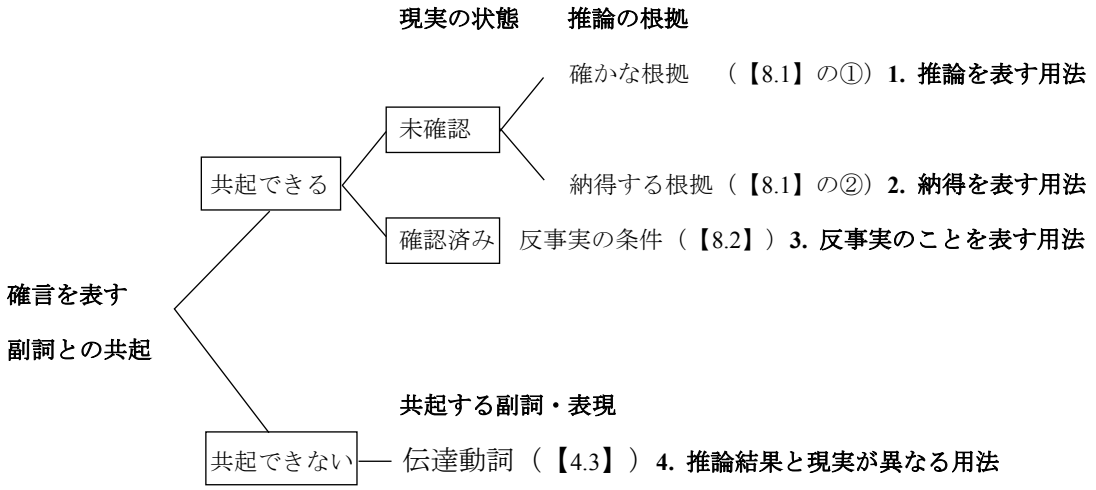

図 13「はずだ」の用法

まず、確言を表す副詞と共起できるかどうかで 2 つに分け、「共起できる場合」は、「現実の状態」によって、「未確認」と「確認済み」、2 つに分ける。更に、「未確認」を「根拠」によって 2 つに分ける。「未確認」の「確かな根拠」に関しては、【8.1】の①で示すように、話し手が見たり聞いたりした確かな根拠に基づいて推論を表す場合には「はずだ」を使用する。本稿では「1.推論を表す用法」と呼んだ。次に、「未確認」の「話し手の納得する根拠」に関しては、【8.1】の②で示すように、話し手が推論の根拠が分からなかったが、その根拠を知ることによって、納得したことを表す用法である。本稿では、「2.納得を表す用法」と呼んだ。それに対して、現実の状態を確認したに関しては、【8.2】で示すように、話し手が推論したことは現実と異なって、「はずだ」を使用することにより、反事実のことを推論し、残念な気持を表す用法である。本稿では、「3.反事実のことを表す用法」と呼んだ。

次に、「確言を表す副詞と共起できない場合」は、【4.3】で示すように、話し手が推論したことと現実は異なる場合、対話文で多く使用され、「言う」「教える」など伝達動詞と共起することが多い。この場合「言ったのに、なぜ言ったとおりしない」など話し手の不満や怒りを表す用法である。本稿では「4.推論結果と現実が異なる用法」と呼んだ。

このように、タイ語と対照することにより、「はずだ」は 4 つの用法に分けられる。「はずだ」は、1. 推論用法、2. 納得する用法、3. 反事実のことを表す用法、4. 推論結果と現実が異なる用法を持っていると明らかになった。

以上の考察から、日本語の「かもしれない」「だろう」「はずだ」は、基本的には、概言を表す副詞と共起でき、話し手が知りえないことについて、可能性・推量・推論を表す形式である。可能性用法・推量用法・推論用法は、未来のことでも過去のこと及び反事実のことでも使用できる。更に、それぞれの形式は、対話文では、基本的な用法から離れた対人的用法を持っている。

9.2.3. タイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の用法と特徴

表 16 から見ると、タイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の用法は、次のようにまとめられる。

まず、「ʔàat(cà)」については、表 16 の【6.1】【7.2】【5.1】をまとめると、「ʔàat(cà)」の用法は以下の図 14 のようにまとめられる。

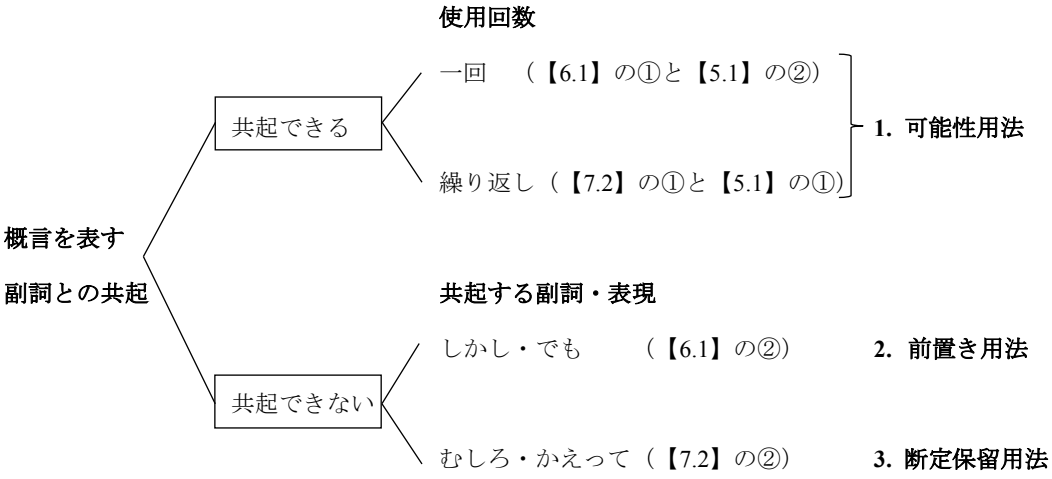

図 14「ʔàat(cà)」の用法

まず、概言を表す副詞と共起できるかどうかで 2 つに分け、「共起できる場合」は可能性用法の「ʔàat(cà)」である。可能性を表す用法に関して、「使用回数」によって、さらに

2 つに分かれる。一回使用する場合は、表 16 の【6.1】の①と【5.1】の②で示すように、話し手がある命題の事実を知らないため、断定できず、可能性を表す。一方、繰り返し使用する場合は、表 16 の【7.2】の①、【5.1】の①で示すように、話し手が戸惑い・混乱・迷いの状態であるため、断定できず、複数の可能性を表す。これらの「ʔàat(cà)」は、本稿では「1.可能性用法」と呼んだ。

次に、「概言を表す副詞と共起できない場合」は、「共起する副詞・表現」によって更に 2 つに分かれる。まず、日本語に訳すと、逆接接続詞の「しかし」「でも」と共起する場合に関して、【6.1】の②で示すように、話し手が「ʔàat(cà)」を使用することにより相手の意見に首肯せず、主張を表す用法である。本稿では、「2.前置き用法」と呼んだ。次に、日本語に訳すと、逆接接続詞の「むしろ」「かえって」と共起する場合に関して、対話文の「対案」や「反論」を表す状況では、「ʔàat(cà)」を使用することによって話し手の意見を控えめにする用法がある。本稿では、「3.断定保留用法」と呼んだ。

このように、日本語と対照することにより、「ʔàat(cà)」は 3 つの用法を持っていることが明らかになった。それは、1.可能性用法、2.前置き用法、3.断定保留用法である。

次に「khoŋ(cà)」は、表 16 の【6.2】【7.1】【8.2】【5.2】をまとめると、「khoŋ(cà)」の用法は以下の図 15 のようにまとめられる。

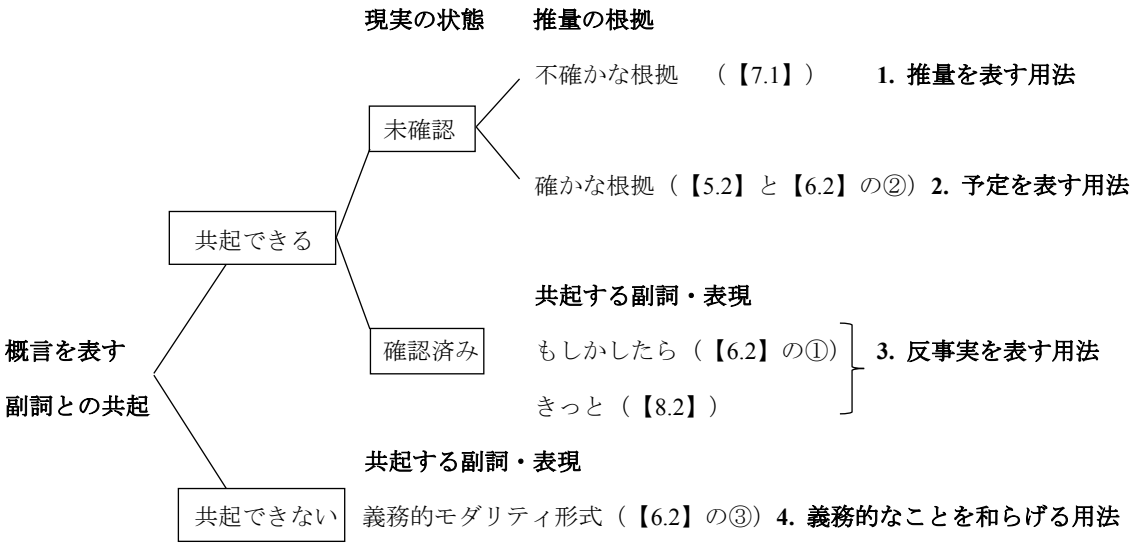

図 15「khoŋ(cà)」の用法

まず、概言を表す副詞と共起できるかどうかで 2 つに分けられる「共起できる場合」は、「現実の状態」によって、さらに「未確認」と「確認済み」2 つに分けられる。更に、「未確認」の場合は推量の根拠によって「不確かな根拠」と「確かな根拠」に分けられる。

一つは、（現実の状態について）未確認で、「不確かな根拠」に基づいて推量する場合に関して【7.1】で示すように、未来や他人の気持ちなど話し手が知りえないことについて、不確かな根拠（例えば、話し手想像や経験など）に基づいて推量を表す用法である。本稿では、「1.推量を表す用法」と呼んだ。もう一つは、（現実の状態について）未確認で、「確かな根拠」に基づいて推量する場合に関して【5.2】と【6.2】の②で示すように、話し手が確定条件や個人的な理由に基づいて確定に近い自分の予定を表す用法である。本研究では、「予定を表す用法」と呼ぶ。それに対して、（現実の状態について）確認済みに関して、【6.2】の①と【8.2】で示すように、話し手の想像したことと現実が異なる場合、反事実を表すことによって、自分の期待や残念な気持などを表す用法である。本稿では「3.反事実を表す用法」と呼んだ。

次に、「概言を表す副詞と共起できない場合」は、【6.2】の③で示すように、対話文では、「tôŋ」という義務的モダリティ形式と共起することにより、「khoŋ(cà)」は話し手が聞き手に義務を負わせる当為判断を直接述べることを避け、遠回しに表すことができる。本稿では、「4.義務的なことを和らげる用法」と呼んだ。

このように日本語と対照することにより、「khoŋ(cà)」は 4 つの用法を持っていると明らかになった。それは、1.推量を表す用法、2.話し手の予定を表す用法、3.反事実を表す用法、4.義務的なことを和らげる用法である。

そして、「nâacà」は、表 16 の【7.3】【8.1】【5.3】をまとめると、「nâacà」の用法は以下の図 16 のようにまとめられる。

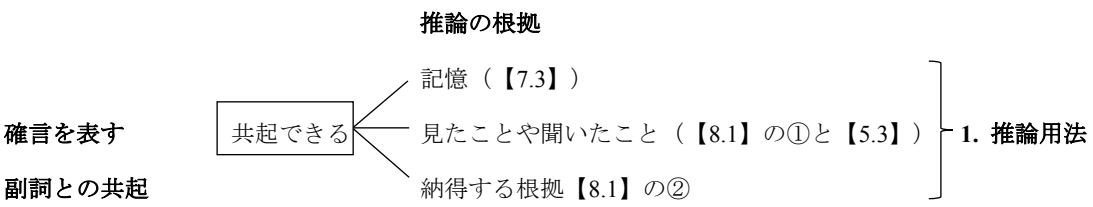

図 16「nâacà」の用法

「nâacà」は、確言を表す副詞と共起できる場合のみあり、【7.3】【8.1】【5.3】で示すように、話し手がある根拠に基づいて推論し、当然な結論を表す形式である。推論するた

めには、根拠と前提が必要だが、推論の根拠は「話し手の記憶」や「見たことや聞いたこと」など、確かなものも不確かなものも使用できる。さらに、【8.1】の②で示すように、話し手が推論の根拠が分からなかったが、その根拠を知ることによって、納得したことを表す場合にも使用することができる。

以上の考察から、タイ語の「ʔàat(cà)」「khoŋ(cà)」「nâacà」は、基本的には概言を表す副詞と共起でき、話し手が知りえないことについて、可能性・推量・推論を表す形式である。しかし、複数の不確かなことを列挙する際に繰り返し使用できる認識的モダリティ形式に制限があり、その場合は「ʔàat(cà)」のみが使用できる。また、反事実のことを表す場合にも制限があり、その場合は「khoŋ(cà)」のみが使用できる。更に、基本的な用法から離れた対人的用法として使用する場合、タイ語では「ʔàat(cà)」のみ使用されているが、義務的モダリティ形式と共起すると、強い義務を表し、「khoŋtɔ̂ŋ」という形式で表している。

9.2.5. まとめ

両言語を比較対照することにより、日本語の「だろう」 「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の用法を分析しながら、日本語とタイ語の認識的モダリティ形式の特徴が明らかになったのは、次の 4 点である。

1) 無形モダリティ形式に関して、断定できない場合、日本語は無形モダリティ形式で判断の意味を表すことができるが、タイ語ではモダリティ形式を入れなければ、判断の意味が表せず、事実を述べる文になる。このように、無形モダリティ形式で断定の意味を表すのは日本語の特徴である。
2) 日本語の「かもしれない」「だろう」「はずだ」は、未来のことでも過去のこと及び反事実のことでも使用できるが、タイ語では反事実のことを表す場合、「khoŋ(cà)」しか使用できない。このように、反事実の制限があるのはタイ語の特徴である。
3) 話し手の複数の不確かなことを 1 文中で同じ認識的モダリティ形式を使用して列挙する場合に関して、日本語では「だろう」と「かもしれない」はそれぞれ繰り返し使用できるが、タイ語では「ʔàat(cà)」のみしか使用できない。このように、複数の不確かなことを列挙する際に使用できる認識的モダリティ形式に制限があるのは、タイ語の特徴である。

4) 日本語の「かもしれない」「だろう」「はずだ」は、基本的な用法から離れた対人的用法を持っている。一方、タイ語では「?àat(cà)」以外、派生的な対人的用法を持っていない。このように、認識の用法から離れた対人的な用法として使用されるのは、日本語の認識的モダリティ形式の特徴である。

以上の日本語とタイ語の認識的モダリティ形式の用法をみると、基本的な用法に関しては、両言語の認識的モダリティ形式は、教科書や先行研究で挙げている対応関係のように対応できる。しかし、以上の四つの特徴が、両言語の対応関係の多様性を生み出す要因となっていることが明らかとなった。。

9.3. 今後の課題

本稿では、タイ語に翻訳された日本語の作品と日本語に訳されたのタイ語の作品から用例を抜き出し、考察を行った。作品のジャンルのために、日本語の無形モダリティ形式に対応する「nâacà」など、用例の少ない対応関係がある。今後は、用例を増やし、考察を行いたいと思う。また、日本語の認識的モダリティ形式の派生した用法に関しては、実際にタイ人日本語学習者がどのように使用するかについてや、母語の原因で誤用があるかについて調査を行いたいと思う。

謝辞

ここに、筆者の本研究作成を支えてくれた皆様に心よりお礼を深く申し上げます。

まず、1 年間交換留学生の時から 6 年間にわたりご指導を頂いた主指導教官の中田一志先生にお礼を申し上げます。未熟な私に対して研究の基礎から丁寧なご指導をくださったり、研究以外にも人生についても親身に相談に乗ってくださったり、授業の TA・TF・RA として参加させてくださったりしたことを心よりお礼を深く申し上げます。

また、副指導教官の三原育子先生にも大変お世話になりました。いつも暖かく見守ってくださいました。誠にありがとうございます。タイ語に関して貴重なご意見をたくさんくださった副指導教官の宮本マラシー先生にもお礼を申し上げます。タイ語のことだけではなく、日本の生活などの相談にも乗ってくださいました。さらに、FoLK でお世話になった今井忍先生、並びに日本語・日本文化専攻の先生方、シラパコーン大学の先生方からも、丁寧なご指導を頂きました。先生方のおかげで、本論文を書き終えることができました。心より感謝申し上げます。

そして、チューターの中谷直樹氏、酒井春菜氏、笹川史絵氏にはひとかたならぬお世話になり、心より感謝いたします。また、金吉任氏、パッチャラーパン氏、サティダー氏、シワポーン氏をはじめとした、大学院生の先輩後輩達と同級生の皆さんがいつも応援してくれてました。本当にありがとうございます。

最後に、ずっとそばにいて励ましてくれたタナポンさん、いつもあたたかい応援や励ましを絶えず送り続けてくれた家族に心から感謝いたします。

参考文献

庵功雄(2009)「推量の『でしょう』に関する一考察：日本語教育文法の視点から」『日本語教育』142, pp.58-68

今井邦彦（2001）『語用論への招待』大修館書店

大島資生（2002）「現代日本語における『だろう』について」『東京大学留学生センター紀要』12, pp.21-40

太田陽子（2002）「『ハズダ』を用いた連体形修飾表現について―『安全なはずの学校』は安全か―」『東京大学留学センター紀要』12, pp.61-82

太田陽子（2008）「『運用力につながる文法記述』試論―モダリティ表現『はずだ』の分析を通して」早稲田大学修士論文

奥田靖雄（1984）「おしはかり（一）」『日本語学』3（2）, pp.54 -69

木下りか（2010）「カモシレナイ・ニチガイナイと推論の方向性」『大手前大学論集』11, pp.91-103

キャアコップチャイ, スィラッサナン（2010）「『だろう』の意味・用法－小説における分析－」『日本語／日本語教育研究』1, pp.157-176

キャアコップチャイ, ソムピット（2008）「『だろう』の四用法について―先行研究の分析から―」『学習院大学人文科学論集』18, pp.73-108

キャアコップチャイ, ソムピット（2009）「『だろう』の意味・用法」『学習院大学大学院日本語日本文学』5, pp.82-95

金水敏（1992）「談話管理理論からみた『だろう』」『神戸大学文学部紀要』19, pp.41-59

國澤里美（2013）「語用論の観点から見た認識のモダリティ形式『かもしれない』について」『言葉と文化』14, pp.1-17

三枝令子（2003）「『だろう』の意味と働き―助動詞から終助詞まで―」『一橋大学留学生センター紀要』6, pp.63-76

坂原茂（2007）『日常言語の推論』東京大学出版会

坂原茂・田窪行則・三藤博（1996）『メンタル・スペース－自然言語理解の認知インターフェイス－』白水社

澤田治美（2006）『モダリティ』開拓社

澤田治美（2012）『モダリティII：事例研究』ひつじ書房

杉村泰（2003）「続・カモシレナイとニチガイナイの異質性―コーパス調査の結果から―」『言葉と文化』4, pp.261-276

成昊炫（2016）「日韓推量モダリティ形式の対照研究－『だろう』『ようだ』『らしい』と対応する韓国語形式を中心に－」筑波大学博士論文

田中寛（1996）「タイ語における推量と認識の構文－日本語との対照比較の視点から－」『大東文化大学紀要』34, pp.215-257

田中寛（2005）「タイ語条件表現の研究－条件節と時間節における文の叙述－」『大東文化大学紀要』44, pp.203-247

張恵芳（2008）「『推量確認要求』用法の日中対照研究 情報伝達・語用論的な観点から」『言語学論叢』27, pp.103-114

中田一志（2009）「発話行為論から見た終助詞ヨとネ」『日本語文法』9（2）, pp.19-35

中畠孝幸（1993）「確かさの度合い―カモシレナイ・ニチガイナイ―」『日本語学文学』4, pp.13-20

仁田義雄（2000）「認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法 3 モダリティ』森山卓郎・仁田義雄・工藤浩，岩波書店, pp.79-159

仁田義雄・益岡隆志（1991）『日本語のモダリティ』くろしお出版

日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』くろしお出版

日本語文法学会編（2014）『日本語文法辞典』大修館書店

野田尚史（1984）「～にちがいない/～かもしれない/～はずだ」『日本語学』3（10）, pp.111-119

早津恵美子（1988）「『らしい』と『ようだ』」『国語学』7（4）, pp.46-60

バンチョンマニー, ブッサバー（2008）『タイ語のレッスン初級 1』スリーエーネットワーク

ピヤマワディー, ラッチャニー（1992）「日本語とタイ語のモダリティ対照研究」筑波大学博士論文

平田真美（2001）「『かもしれない』の意味―モダリティと語用論の接点を探る」『日本語教育』108, pp.60-67

フォコニエ, ジル（2000）『思考と言語におけるマッピングーメンタル・スペース理論の意味構築モデルー』岩波書店

許允瑄（ホユンソン）（2011）「自然会話における『かもしれない』『かも』の機能について一断りの場面を中心にー」『日本語コミュニケーション研究論集』1, pp.29-38

牧原功（2015）「文末ムード形式とポライトネス―『だろう』の機能を中心に―」『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版　pp.79-98
益岡隆志（1993）『日本語の条件表現』くろしお出版
益岡隆志（2000）「真偽判断を表す『ようだ』と『らしい』」『日本語文法の諸相』くろしお出版　pp.135-151
益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探究』くろしお出版
宮崎和人（1993）「『～だろう』の話談機能について」『国語学』175, pp.50-63
宮崎和人（1999）「確認要求表現としての『ダロウネ』」『日本語科学』6, pp.71-90
宮本マラシー（2003）『タイ語表現法』大阪外国語大学
三宅知宏（1992）「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢　日本学篇』26, pp.35-47
三宅知宏（1993）「認識的モダリティにおける確信的判断について」『語文』61, pp.36-46
三宅知宏（1995）「『推量』について」『国語学』183, pp.76-86
三宅知宏（2010）「『推量』と『確認要求』－“だろう”をめぐって－」『鶴見大学紀要』47, pp.9-55
森山卓郎（1992）「日本語における『推量』をめぐって」『言語研究』101, pp.64-83
森山卓郎（2002）「可能性とその周辺―『かねない』『あり得る』『可能性がある』等の迂言的表現と『かもしれない』―」『日本語学』21（2）, pp.17-27
森山卓郎・安達太郎（1996）「確からしさの表現」『日本語文法セリフ・マスターシリーズ6 文の述べ方』くろしお出版, pp.41-52
山岡政紀（2016）「『カモシレナイ』における可能性判断と対人配慮」小野正樹・李奇楠編『言語と主観性―認知とポライトネスの接点―』くろしお出版, pp.133-150
山岡政紀・牧原功・小野正樹『コミュニケーション配慮表現』明治書院
渡辺昭子（2016）「認識的モダリティの婉曲用法―『ダロウ』はなぜ婉曲用法をもちにくいのか―」『日本語日本文学』26, pp.1-26
渡辺昭子（2017）「『カモシレナイ』と『ヨウダ・ミタイダ』の婉曲用法―認識的モダリティの類型的相違がもたらす振る舞いの対照性―」『日本語日本文学』27, pp.1-26
ワンプラディット　アパサラ　キク（2008）「可能性を無くした『かもしれない』」『京都大学言語学研究 』27, pp.189-202

Brown, Penelope and Stephen C. Levinson. (1987) Politeness: Some universals in language usage. Cambridge University Press.

Fauconnier, Gilles. (1985) Mental spaces, The Massachusetts Institute of Technology.

Fauconnier, Gilles. (1997) Mappings in Thought and Language, Cambridge University.

Kiatkobchai, Siratsanan. (2011)「『คง（khoŋ）』は『だろう』かー翻訳に現れる推量表現の考察ー」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』8, pp, 55-64

Meesat, Paitaya. (1997) A study of Auxiliary Verbs developed from Verb in Thai. Thesis Master of Arts in Thai, Department of Thai Faculty of Arts, Chulalongkorn University.

Palmer, F. R. (2001) Mood and Modality, Cambridge University Press, Cambridge.

Phatranawig, Phornthip. (1972) Modal expression in the Thai language. Thesis Master of Arts inThai, Department of Thai Faculty of Arts, Chulalongkorn University.

Rangkupan, Suda. (2004) A system of Epistemic Modality in Thai, Chulalongkorn University.

Rangkupan, Suda. (2005) A system of Epistemic Modality in Thai, Manusaya: Journal of Humanities. 8.1

Rattanapongpinyo, Pratyaporn. (2016)「日・タイ推量表現にかかわる認識的モダリティ形式」大阪大学修士論文

Rattanapongpinyo, Pratyaporn. (2016)「日・タイ推量表現にかかわる認識的モダリティ形式―現実と推論が異なる場合の『ハズダ』―」『日本語・日本文化研究』26, pp.139-146.

Uppakit, Sillapasarn. (1937) Lak Phaasaa Thai, Bangkok

Vatcharasuwan, Paveena. (2004) The Act of Disagreeing in Thai by Speakers of Different Social Status: the case of teachers and students. Thesis Master of Arts in Thai, Department of Thai Faculty of Arts, Chulalongkorn University.

参考テキスト

3ACorporation. (2549) มินนะ โนะ นิฮงโกะ : แบบเรียนภาษาญี่ปุ่นชั้นต้น (ฉบับปรับปรุง). กรุงเทพฯ : สำนักพิมพ์ภาษาและวัฒนธรรม

（スリーエーネットワーク（2002）『みんなの日本語』、スリーエーネットワーク）

Tomomatsu, Etsuko. (2545) กุญแจสู่ 200 ประโยคพื้นฐาน ภาษาญี่ปุ่นขั้นต้นและกลาง. แปลโดย วีรวรรณ วชิรดิลก. กรุงเทพฯ : ภาษาและวัฒนธรรม สมาคมส่งเสริมเทคโนโลยี (ไทย-ญี่ปุ่น)（友松悦子ほか（2002）『どんなときどう使う日本語表現文型 200 初・中級』泰日経済技術振興協会）

บุษบา บรรณจงมณี. (2547) ภาษาญี่ปุ่น อากิโกะ โตะ โทะโมะดะจิ. กรุงเทพฯ : คิโนะคุนิยะ บุ๊คสโตร์ (Banjongmanee, B. (2004). Akiko to Tomodachi. Bangkok: Kinokuniya Book Stores.)

用例出典

江頭美智留・大島里美・横田理恵（脚本）（2005）ドラマ『1 リットルの涙』（原作：木藤亜也『1 リットルの涙』）

宇戸清治編訳（2012）『現代タイのポストモダン短編集』公益財団法人大同生命国際文化基金

セーウィクン, プラパッソーン（2015）『瓶の中の時間』（藤野勲訳）Nilubol Publishing

夏川草介（2009）『神様のカルテ』小学館

東川篤哉（2010）『謎解きはディナーのあとで』小学館

八津弘幸（脚本）（2013）ドラマ『半沢直樹』（原作：池井戸潤『半沢直樹シリーズ』）

早船歌江子（脚本）（2012）ドラマ『ラッキーセブン』

福田靖・古家和尚・松本欧太郎（脚本）（2007）ドラマ『ガリレオ』（原作：東野圭吾『ガリレオシリーズ』）

古沢良太（脚本）（2012）ドラマ『リーガルハイ』

ブンタヴィー, カムプーン（1980）『東北のタイの子』（星野龍夫訳）井村文化事業者

คำพูน บุญทวี (2543). ลูกอีสาน. กรุงเทพ : โป๊ยเซียน

โซซีเกะ นัตสึคาวะ. (2555). อิจิโตะ คุณหมอหัวใจเทวดา. แปลโดย พรทิพย์ วิทยเลิศพันธุ์. กรุงเทพฯ:แพรว

เดอะ วัน เอ็นเตอร์ไพรส์ (2560). “เธอคือพรหมลิขิต” (ดัดแปลงจากบทละครเรื่อง You’re my destiny)

บรรจง ปิสัญธนะกุล (2556). “พี่มาก...พระโขนง”

บินหลา สันกาลาคีรี. (2548). “สีที่แปดของรุ้งกินน้ำ”, ใน เจ้าหงิญ. หน้า67-84. กรุงเทพฯ: มติชน

ปัทมาพร เคนผาพงษ์ (2552). “พระจันทร์สีรุ้ง”

ประภัสสร เสวิกุล (2533). เวลาในขวดแก้ว. กรุงเทพ : ดอกหญ้า

พันนา ฤทธิไกร (2547). “เกิดมาลุย”

วินทร์ เลียววาริณ. (2542). “เรื่องของพระเด็กเสือไก่มอด”, ใน สิ่งมีชีวิตที่เรียกว่าคน. หน้า316-335. กรุงเทพฯ : บริษัทดับเบิ้ลนายน์ พริ้นติ้ง

สร้างสรรค์, หลี่เจิน (2558). “สองหัวใจนี้เพื่อเธอ” (ดัดแปลงจากบทประพันธ์โดย จินโจว)

อุทิศ เหมะมูล (2551). “เสียงเรียกจากเพื่อนเก่า”, ใน ไม่ย้อนคืน. หน้า71-92. กรุงเทพฯ : แพรวสำนักพิมพ์

ฮิงาชิกาวะ โทคุยะ. (2555). นักสืบหลังมือค่ำ. แปลโดย เมธินี นุชนาคา. กรุงเทพฯ: สยามอินเตอร์บุ๊คส์

音韻表記

ここで、タイ語の表記に関して、一言述べなければならない。タイ語は、通常タイ文字によって表記されるが、本論文では、理解の容易さという点から音声をアルファベットで表記した。表記は IPA 表記（International Phonetic Alphabet）を使用した。

子音

タイ語の子音には、文字としては 44 の文字があるが、音としては 21 種類にある。

	IPA 表記	タイ語の子音文字
1	k	ก
2	kh	ข, ฃ, ค, ฅ, ฆ
3	ŋ	ง
4	c	จ
5	ch	ฉ, ช, ฌ
6	s	ซ, ศ, ษ, ส
7	d	ฎ, ด
8	t	ฏ, ต
9	th	ฐ, ฑ, ฒ, ถ, ท, ธ
10	n	ณ, น

	IPA 表記	タイ語の子音文字
11	b	บ
12	p	ป
13	ph	ผ, พ, ภ
14	f	ฝ, ฟ
15	h	ห, ฮ
16	m	ม
17	y	ญ, ย
18	r	ร
19	l	ล, ฬ
20	w	ว
21	ʔ	อ

母音

	IPA 表記		タイ語の母音文字		
	短母音	長母音	短母音	長母音	
1	a	aa	-ะ	-า	記号「 - 」は頭子音文字の位置を示す。母音だけの音は「 - 」のところに「อ」の字を入れて表記する。
2	i	ii	ิ	ี	
3	ɯ	ɯɯ	ึ	ือ	
4	u	uu	ุ	ู	
5	e	ee	เ-ะ	เ-	
6	ɛ	ɛɛ	แ-ะ	แ-	
7	o	oo	โ-ะ	โ-	
8	ɔ	ɔɔ	เ-าะ	-อ	
9	ə	əə	เ-อะ	เ-อ	

二重母音

	IPA 表記	タイ語の母音文字	
1	ia	เ-ีย	記号「 - 」は頭子音文字の位置を示す。母音だけの音は「 - 」のところに「อ」の字を入れて表記する。
2	ɯa	เ-ือ	
3	ua	-ัว	

音調

タイ語には次の 5 つの声調がある。

	IPA 表記	タイ語の母音文字	
1	aa	อา	平声
2	àa	อ่า	低声
3	âa	อ้า	下声
4	áa	อ๊า	高声
5	ǎa	อ๋า	上声